

浄土

昭和十一年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十二年二月廿日印刷
昭和十二年三月一日發行

第三卷 第三號

上人門下の三高僧

三月號



知恩院史
編纂主任

井川定慶著

法然上人の選擇集

待望の全釋書生る
平易完璧の講義

選擇集は皆様御承知の通り始祖法然上人の代表的著作ですが、難解の爲適當な講義書がありませんでした。此度知恩院史編纂主任の井川定慶氏がラヂオ放送で非常な好評を博し出版要望の聲多數の爲更に補訂して出版されました。美しく立派な本になりました。淨土宗關係の皆様は是非一本を備へて、上人の法淨に浴してゐたゞきたい。

内容の偉装幀の美

淨土宗管長 岩井智海大僧正
知恩院門跡

元祖法然上人の御法語が極めて平明に説き明かされてゐることは何より結構です。これに依つて皆さんがじつかりした信仰を得て下さることを望んでやみませぬ。

譯 枝 大谷壺淵臺下

佛教聖典の大衆化即ち誰にでも了解し得る様に易釋されたいとは各方面から叫ばれてゐる聲である。今淨土宗の聖典であり淨土眞宗の教義にも重要な地位にある選擇集を畏友井川定慶師によりて放送され一般大衆に多大の感銘を與へられたる事は誠に感謝に不堪次第である。今此れを上梓せらるゝに當り再び放送を聴聞された方も聞き漏した方も共に信仰の泉に浴する機會を與へられだる事を歡喜するものである。

體裁

四六判三五〇頁上質紙
本文新綴九ポイント組
國寶御影その他口繪三葉
金箔押文字オフセット多
色刷法然上人繪卷表紙

定價 一圓三十錢

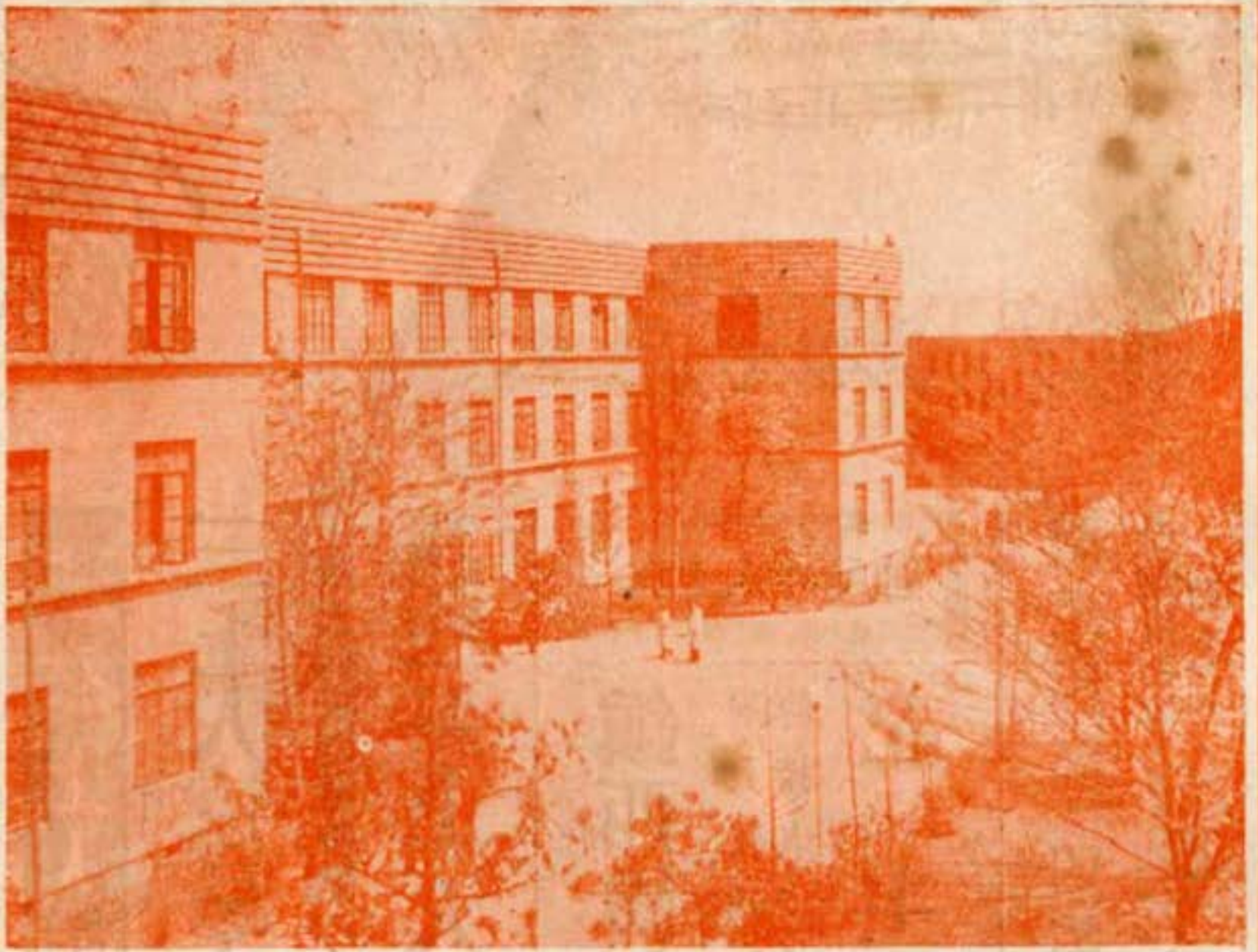
(内地送料一二錢)

東京市赤坂區表町三丁目

新英社

電話

(赤坂二八四〇番)
(赤坂二七三一番)
振替東京五四五五〇



學部 佛教學、宗教學、哲學、史學、國文學、支

那文學、英文學科、

大學豫科 第一學年級 第二學年級

專門部佛教科 第一學年級 第二學年級

同高等師範科 第一學年級 國語漢文科、公民歷史科

日本精神講座開設

入學試驗 各科トモ四月五日ヨリ

大正大學 學生募集

特典 學部卒業者ハ文學士ト稱スルコトヲ得、中

等教員及ビ高等教員無試験檢定資格アリ、
高等師範科卒業生ハ國語、漢文、公民歴史、
豫科ハ英語ノ中等教員無試験檢定アリ

四月四日迄

願書受付 詳細 學則參照 郵券封入申込マレタシ
所在 東京市豊島區西巢鴨四丁目

(市電省線バス共便利) 電話大塚四八九四、九九六



法然上人門流の三上人を讃ふ

三上人遠忌を迎へ奉りて 管 淨土長宗 岩井智海 (二)

淨土列祖禮讃の歌 (八百谷順應編) (一七)

法然門流の高僧 三上人の功績 柴田玄鳳 (四)

三上人の足跡	
鎮西國師の生涯	高山龍善 (一〇)
淨土教の傳持者 勢觀房	中村辨康 (一八)
記主禪師	佐藤賢順 (二六)

記主禪師・明鏡の夢 (三)

金儲けとも一致した谷孫六さんの信仰 戸松學瑛 (四五)

川柳浮世さまさま (大羽比羅夫畫) 代田重雄 (五〇)



名士
閑話

私の目
から見た

人間のお天気

藤原咲平 (五二)

三上人物語

鎮西の洪鐘

江上秀静 (四)

大谷の庵

井川定慶 (四〇)

伊勢路に於ける記主禪師

岸覺勇 (三)

信仰相談

中村辨康 (六)

小説と童話

母を守れ

(吉田貫三郎画)

浅原六朗 (六)

鳩と少年兵士

中田龍夫 (五八)

鑽仰運動ニュース

(七〇)

編輯後記

(七二)

◇浄

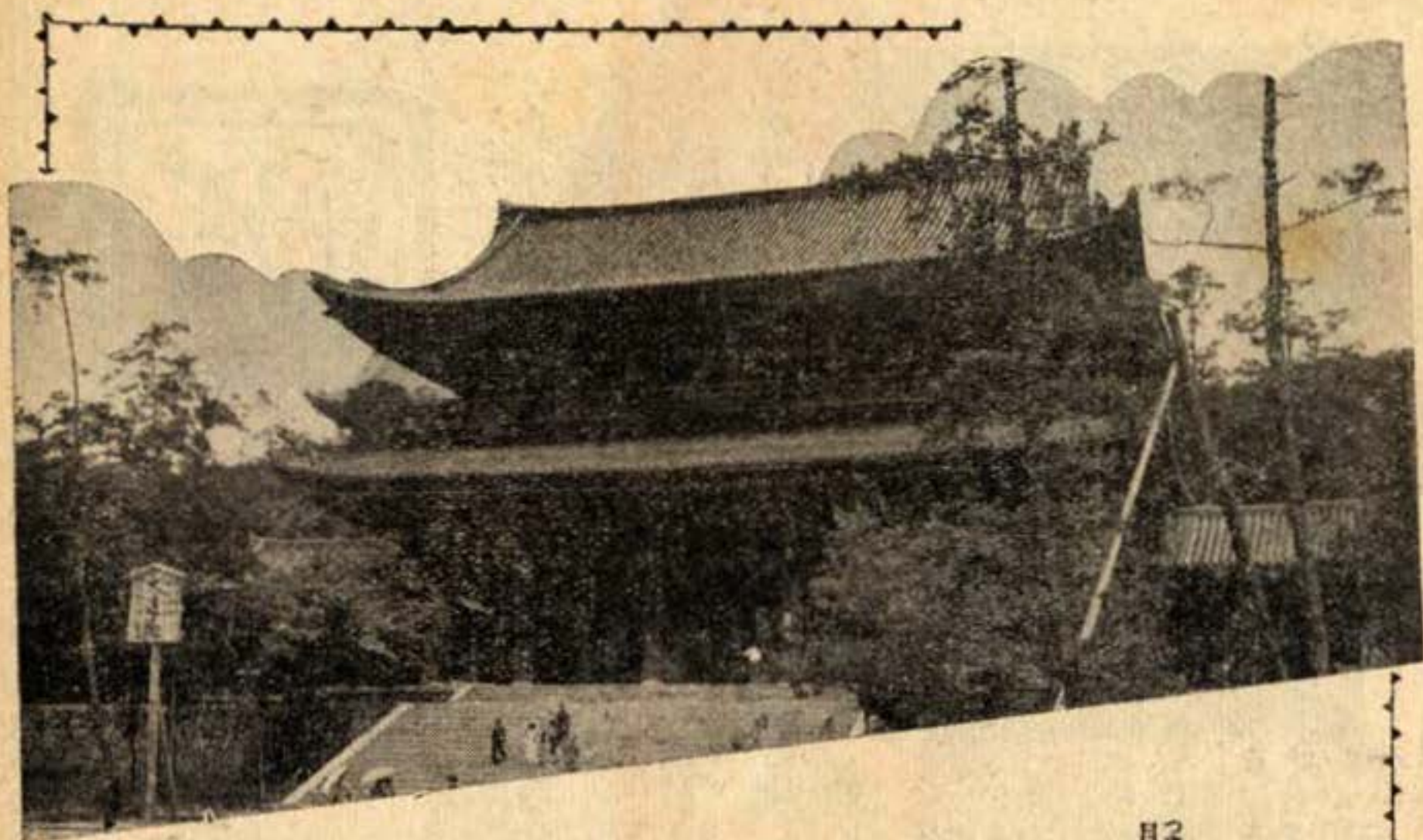
土

第三卷
第三號

三月號
目次

◇

◎ 注意 御注文は大日本金屬工業社の振替で願ひます



月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人のところにぞすむ

御

詠

辨阿（鎮西國師）は助けたまへ阿彌陀佛と

心にもおもひ、口にもいふなり

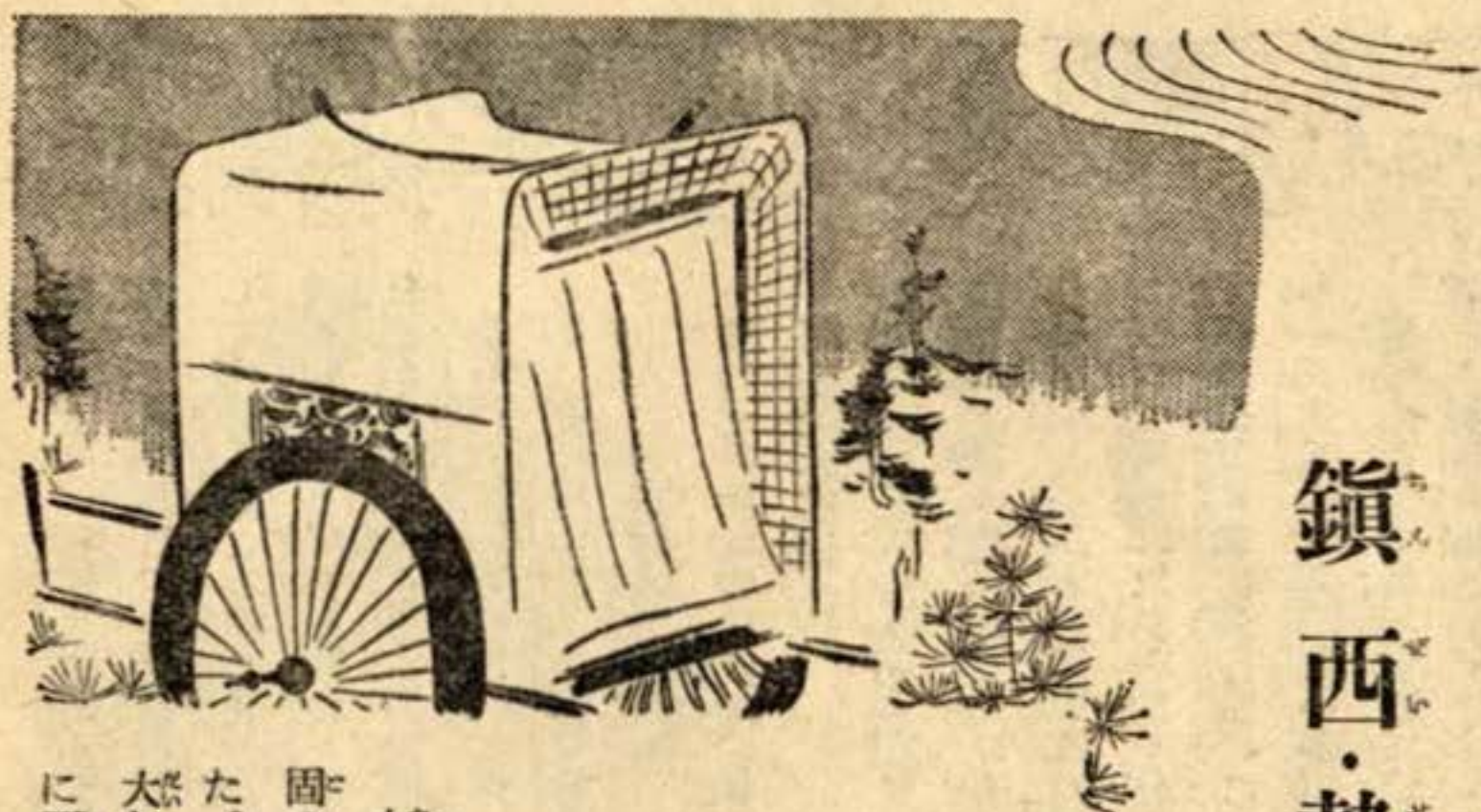
鎮西國師

いつはらざる心をもて、佛の本願を信じて

まさに往生せんとおもふ。

記主禪師

： 淨 土 三 月 號 ：



上人門流の三高僧

鎮西・勢觀・記主三上人

二祖上人 鎮西國師の生涯

高山龍善

大聖釋尊は末の代を闢淨堅固の時代と豫言なさいました。實に今日は、大は國家の大なるより、小は一家の些事に至る迄、兎角闘ひと諍ひの

絶へない時である。昨年は餘り名の知れなかつたエチオピアが、伊太利と戦つたが、さしも勇悍な國民も文明の利器には一たまりもなく、終に併合の悲慘を見た。ヤレ、一戦争済んだかと思ふと又西班牙の内亂が起り今に戦禍が續いて居る。



三上人遠忌を迎へ奉りて

浄土宗 管長 岩井智海

吉水の清流滾々と流れてこゝに八百歳、元祖法然上人の法燈燦として日本全土に普く、萬人救済の浄土の法門は益々永遠の光を輝やかして参りました。こゝに至れる浄土門の興隆は、元祖上人の崇高なる御人格と、深い内省自覺から生れた念佛一行の固い御信念とによることは申す迄もありませんが、この御信念を傳々相承して今日の聖代に傳へられた多くの御高德の貴い御苦勞も

忘れてはなりません。

別けても、器から器へ水を移すが如く一滴も洩らさず、元祖上人から直々に正統を授けられた二祖鎮西國師、國師から直接にその正統を傳へられた三祖記主禪師、並に元祖上人の側近に常隨として、誠心誠意奉仕せられた勢觀房源智上人の三高德の功積は實に大なるものがあります。

元祖上人没後、南都北嶺の念佛興行に對する迫害は非常に



激烈で、それに加へて上人の御思想を殊更に誤り傳へる輩も簇出して、念佛門の正統はために滅せんとさへ思はれました。この時に正法護持の爲に身命を抛つて、雄々しくも奮起せられ、邪義異端を卻けられて、淨土教の礎を確立せられたのは、實にこの三上人の偉大なる御力によるのであります。

今年、期せずして、鎮西國師七百年、記主禪師六百五十年、勢觀上人七百年と、三上人の遠忌を勤修する事になりました事は、淨土宗の我々にとつて誠に千載一遇の好機であります。

顧みて現下の我國の國情を眺めますと、内外に亘つて重大事件鬱積して前古未曾有の非常時局に際會致してゐます。國民の重責は愈々大なるものがあります。翻つて元祖上人並に三上人の時代に眼を轉じますと、現下の國情に相似たものがありました。新しい時代が顯はれんとした轉換時代で、新時代を模索して未だ達せず、人心はその歸趣さだかならずして極度に混亂した非常時代でありました。この不安な人心に安心の白道を提示して時代を指導した人こそ、元祖上人並に三上人であります。従つて私は時代は變遷するとはいへ、非常時克服の信念確立は我が淨土教に依る外はないと確信致します。

かく考へますとこゝに三上人遠忌を迎へ奉ることは淨土教徒は勿論一般國民にとつても亦極めて有意義な事であると思ひます。心から三上人の御高德を偲び奉ると共に、協力一致の下に遠忌の盛大なる事を祈願して居ります。



三上人の功績

柴田 玄鳳

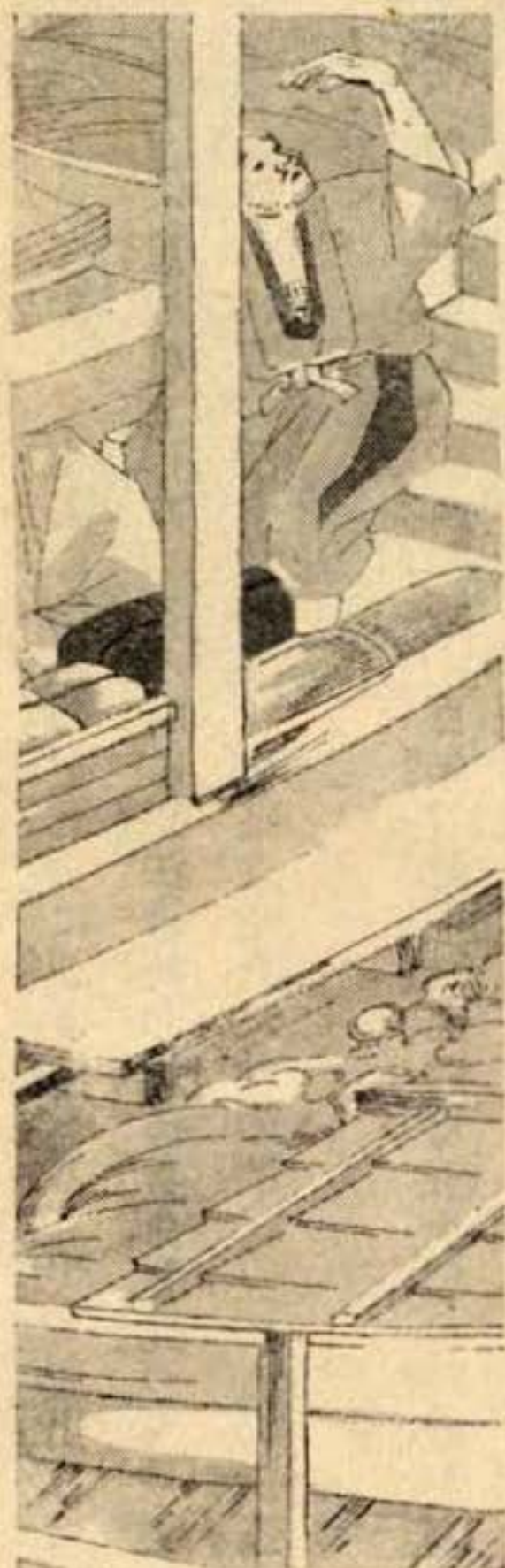
一、元祖の創業

俗間にも大師は弘法に、太閤は秀吉に、元祖は法然に取られたと云ふ通り、吾々浄土教徒は祖師法然上人を元祖様と呼び慣れてゐる。

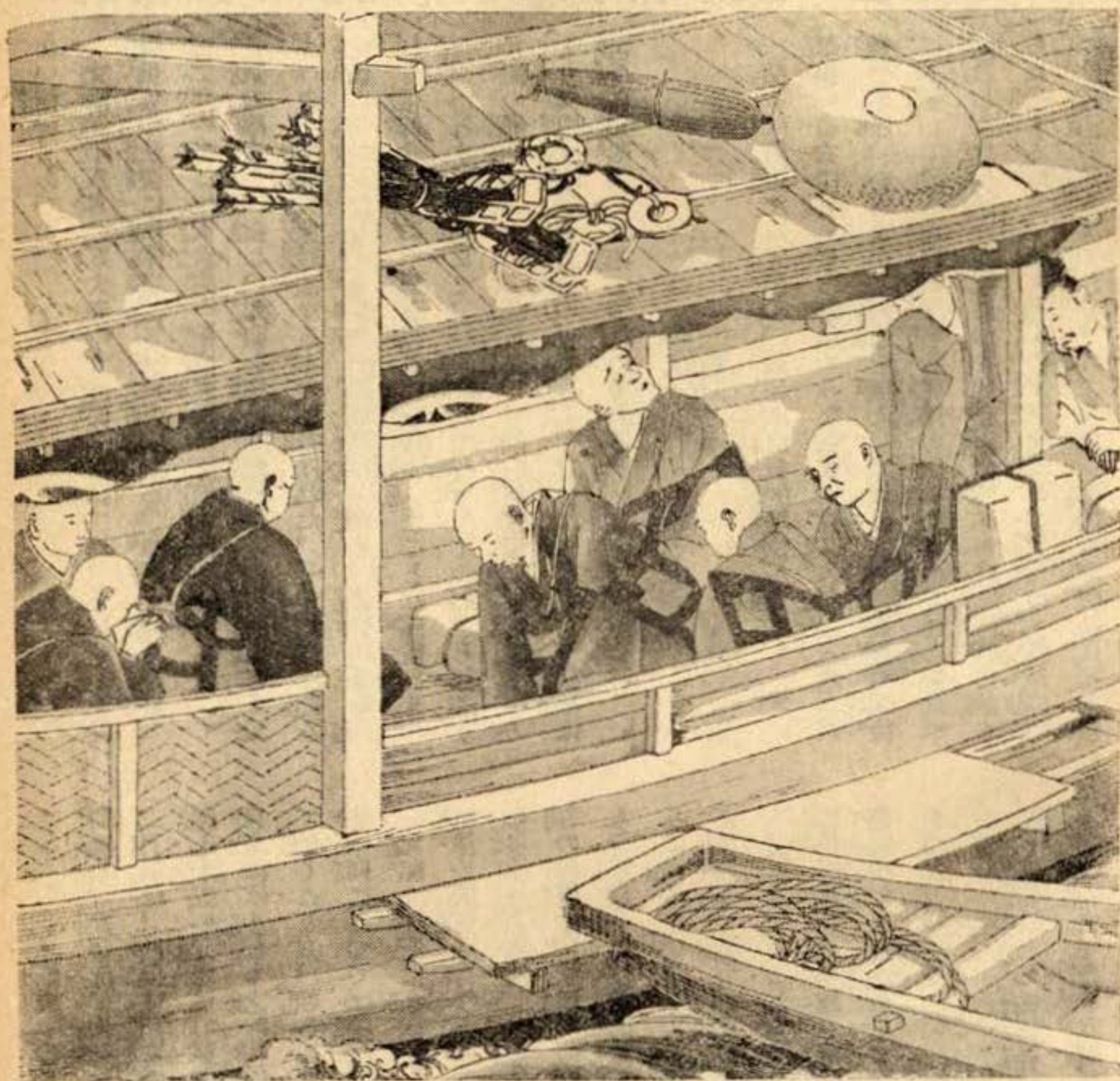
元祖は承安五年の春三月、齡四十三歳、幾度か一切經を讀

讀して後、凡夫往生の捷徑は他力易行の稱名念佛にありとの確信を得て、永年棲み慣れた比叡の峯を下り、京都の西、今の粟生の光明寺のあたりに、さゝやかな庵を結んで居住されたが間もなく東山吉水のほとりに理想の地を見出し、其處へ庵を移して、いよく念佛弘通の大傳道を開始されたのである。

(挿畫は元祖大師御配流の關り勢親上人名義を惜み給ふ、安田光雲筆)



比叡山三千坊の中にあつて、智慧第一と謳はれた程の法然上人、其年の春には高倉天皇の勅請により、帝を初め奉り三公九卿お揃ひで、慈覺大師このかた絶えて無かつた莊嚴なる授戒會が取行はれた程に名聲の高い元祖が、京都に近い東山の一角



に居を構へて、新宗開立の叫びを擧げられたことは、當時の宗教界に一大センセーションを捲起さしめたに相違ない。若しそれが無事泰平の御代であるならば、其時直ちに何等かの形で新開の浄土宗に對しても、相當大きな反響が現はれたであらう。然るに當時藤原氏の政權は地に墜ちて平家專横の時代となり、京都や奈良の諸大寺は非常な打撃を受けてゐた際であり、且つ開宗第六年には所謂治承の變が勃發して、南都の巨刹東大寺や興福寺が焼かれるといふ騒ぎであり、續いて源氏の擧兵、平家の没落、鎌倉開府等の爲に新興浄土宗に對する批判も自ら忽緒になつてゐた。しかのみならず打續く兵亂や、昨の豪奢に代る今日の哀れな平家の有様を目前に眺めては、僧も俗も舉世涸々として厭離穢土の思を懷き他力念佛の浄土門に奔らざるを得



ない情勢であつた。

文治元年八月、東大寺の大佛像が再建され、上皇親しく開眼供養の法要に御幸遊ばされた其頃から、世間も漸く鎮靜し翌二年の秋には天台宗の權威者たる顯眞法印の首唱に依つて各宗の學者が相會し、元祖を招いて淨土宗義の檢討會とも云ふべき、所謂大原談義なるものが行はれた。その結果は頗る元祖に有利となり、座長格の顯眞法印を初め、満座の面々何れも信仰せし上に、形を見れば法然上人まことは彌陀如來の再來かとまで稱揚して、一同念佛の行者となつた。それより元祖の聲譽はいやが上にも昂り、後白河法皇、中宮任子の方より關白藤原兼實其他の貴顯を初めとして、一世の信望は自ら元祖の身に集まつたのである。

二、法 難

然るに謙讓なる元祖は、如何に社會的地位が上るも、常に墨染の布衣に甘んぜられたのみならず、建久八年の（六十六歳）の冬、いさゝかの病患を機として以後は一切貴顯の請待にも趣かて、専ら自行稱名と徒弟の訓育に努めて居られたが著しき念佛門の興隆につれ、多數の門弟中には素行の治まらぬ者もあつて、屢々世上の問題を醸し、元祖の名聲が高いだけ非難の聲も亦大きく、其上日頃念佛門の隆盛に反感を懷

けるもあり、嫉視するもあつて、叡山の僧衆は念佛の停止を訴願し、興福寺の衆徒は元祖を罪せよと叫び、遂に承元元年二月には、門弟住蓮安樂の兩名が死刑に處せられ、剩へ老齡七十五の元祖までが四國讀較へ配流の憂き目に遇ひ、元祖自身には少しも之を苦痛とせず、寧ろ邊土に赴いて布教させて戴くことは、「頗るこれ朝恩なり」と悦ばれたが、念佛の門徒一同にとつては確に此上もない法難であつた。

元祖は配所に在ること一年、多くの教績を遺し、赦されて攝津の國勝尾寺まで歸還し、其處に留ること四年、七十九歳の冬十一月歸洛し、翌建曆二年正月廿五日、吉水の東、大谷の禪房に於て稱名の聲の裡に安らけく入寂せられたのである。巨星一たび地に墜ちた後の門弟同行のみじめさは想像するに難くない。その憂鬱な日は長く續いた。彼の叡山の衆徒が大舉して大谷の御廟の石棺を發きに来るといふ噂を聞いても、どうすることも出來ず、讒に夜中石棺を掘出し、嵯峨野に持ち逃げ、其處も危険だといふので太秦へ、西山へと昇ぎ廻はつたことから見ても、あはれ敗軍の殘兵にも似た爲態であつた。

三、西海の二祖

都に於ては斯る悲劇が行はれてゐた間にも遠く、九州の別



天地にあつて、旗蓋堂々として他方木蘭念佛の大旗を振り翳して居た人々、それは浄土の二祖、鑑西聖光上人であつた。二祖は親すところなく元祖の衣鉢を繼いで、天賦の達識、多年の修學、數多き法類縁者の居る肥筑の山野は、二祖の羽翼を伸ばすに何等の支障もなく、其上に筑前の國司草野氏の厚き外護を得て、新建の寺院四十八、著述の書七部十七卷に達した。

元祖も早くより二祖の大器には瞞望され、二祖が初めて元祖に入門したのは建久八年、三十六歳の首夏の候であつたが、翌々年には他の多くの同門を差置き、

汝は法器なり、傳持に堪えたり。早く此書を寫して末代に弘むべし。

とて秘書選擇本願念佛集を授けられた。又二祖自身にも常に傳燈の重寶を感じ、其著念佛三心要集に、

弟子辨阿（二祖の號）は故然上人より、是の如く種々に念佛の法門を受け傳へ候なり、日本國の一切の人々を助け奉らんが爲に、年七旬に成りて最後の化導と存じ、わななく／＼注し置き候なり。

と述べて居られる。天晴れ第二の法然上人として恥かしからぬ人物である。

然るに老後の二祖にとつて最大の痛恨事は適當なる後繼者

の無いことであつたが、佛天の加裕と云はうか、二祖七十七歳の夏歸らずも山陰石見の國から、遠々壯年の一愚僧が訪ねて來た。解は入宗に通じ行は羅密を兼ねといふ稀代の俊傑でこれぞ後年の第三祖記主禪師である。其時の二祖の悦びはいかばかりであつたか。他の弟子達に告げて、

我れ年關け離離れ在世久しからず、將來の癡闇を思へば肝膽安からず。然りと雖も我が法は然阿（三祖の號）に授け奉らぬ。法燈何くんぞ銷えん、然阿は是れ予が盛年に還れるなり。

四、關東の三祖

第三祖記主禪師は二祖の附法を受け、暫くも猶豫せず、急いで故郷の石見へ歸り、約十年間山陰山陽各地の化導に従ひ齡五十になつて郷里を發し、關東開教の途に就かれたのであるが、愚案するに三祖の東國傳道には餘程の大決心が秘められてゐたであらう。恐らく二祖の膝下に居られた間にも幾度か懇談が重ねられたことと思ふ。何故なれば念佛の法門は元祖一代の教化にて近畿地方には十分行届いてゐたのである。

然 法 三 高 僧 の 下 門

元祖の晩年以後他宗の激しい壓迫があつたにもせよ、深刻なる元祖の徳化と、遺弟達の忍苦精進とによつて、既に動かすべからざる地盤が築かれてゐた。西海九州は前述の如く二祖半生の感化で到る處に念佛の道場が設けられてある。そこで三祖は先づ初めの十年間を中國の布教に費し、寧て最後の目的地たる關東を目ざして法幢を進められたのである。

當時の鎌倉は、源頼朝が幕府を開いてから六十年を経て、北條時頼執權の時代となつてゐた。志を天下に成さんとする者は先づ鎌倉へ進出すべきである。是を以て新興宗門大成の重任を荷負せる三祖も、雄心勃勃として伊勢の大廟に賽し、ては大法弘通の祈願を籠め、信州善光寺へ詣で、は祖道恢宏の冥助を仰ぎ、徐に上野下野より兩總武藏の各地に轉錫し

て法縁を結び、六十歳遂に中原鎌倉に入つて縦横無盡の活躍を爲し、更に中央との連絡を保たん爲に七十八歳の老軀を措して上洛し滞在十年、淨土門流の統一を完成して再び鎌倉に歸つて靜に入寂された。

三祖は更に宗門百年の爲に善導、元祖並に二祖の遺書に註解を施し、書を成すこと五十餘帖といはるゝも、實際には二十餘部八十數卷に及び、門下また多士濟々で六派を立つるに至つた程である。

通常淨土の二祖三代といへるその二祖は善導元祖の二師を指し、三代とは元祖鑑西記主の三師を擧ぐるので、本願念佛の淨土宗は此の四大祖師に依つて大成したのである。

五、中京

に勢觀

翻つて京

都の念佛門徒

は元祖の晩年

より己來、慘

慘な憂い目を

見たのである

が、その中に





踏み止まり、隠忍自重専ら元祖の遺風を傳持した人は勢觀房源智上人である。文暦元年元祖の靈廟並に大谷の禪房を再興して四條天皇より華頂山知恩教院大谷寺の勅を拜戴し、又加茂神宮堂なる元祖の舊跡を復興して今日の大本山百萬遍の基を築かれる等全く上人努力の賜である。

現今洛東南禪寺の門前に淨土宗西山派の西福寺といふ寺がある。その寺の本尊阿彌陀佛(前頁寫眞參照)の御袖の裏に

上人之御安置佛則某送給

建保乙亥秋當寺住同四丙子正月十日ヨリ二十五日迄於當

院二別時念佛執行

沙門 勢觀源智

と朱漆で記されてある。尤も此の文字は時代を経てゐるために殆んど讀み難いが、幸ひ今より約二百二十年前に、同寺の住職謙明といふ人が其頃既に讀み悪かつたので別の木札に寫し取つて置かれたから能く分る。これなん元祖の勅修御像に元祖の道具本尊房舎聖教のこる所なくこれを相承せられたとある其本尊ではあるまいか。

嗚呼七百二十幾年を経て、今日吾々が此の尊像を瞻仰する時は、感慨無限なるものがある。

かくて洛中に於ける他宗派の攻撃も時代の趨勢には抗し得ず、元祖の念佛は漸次社會民衆の間に普及して行つたのである。

六、結 尾

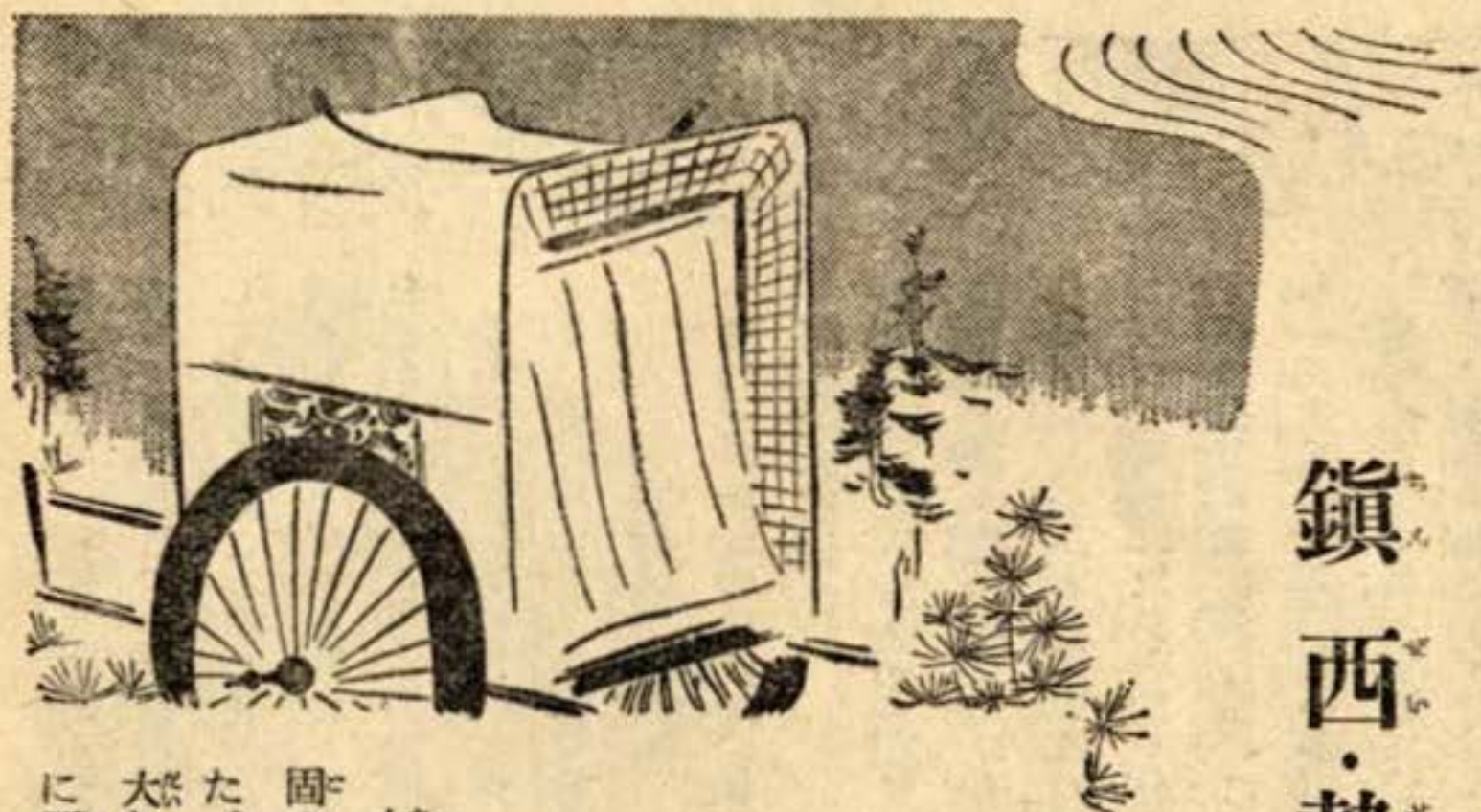
今にして思へば我が淨土宗は實に幸運に恵まれて來たものである。初め元祖が京洛の中央に立教開宗して四十年の傳道を續け、晩年には逆縁とは云へ山陽四國まで之を延長し、二祖は古來大陸文化輸入の門戸たりし北九州に同じく四十餘年間信仰の堅壘を築き元祖亡き後は溫厚玉の如き勢觀房遺業を保持して失ふことなく、三祖は關八州に進出して徳川十八世林興隆の素地を開拓し以て所謂東夷の國々に潤澤なる信仰の法水を灌ぎ、延いては萬機普益の稱名念佛を日本全土に弘布し得たのである。元祖の選擇集末文に、

當に知るべし、淨土の教、時機を叩いて行運にあたれり。念佛の行、水月を感じて昇降を得たり

といへるも宜なる哉である。

鎮西國師御法語 往生極樂といふことは、あまりにう

づ高くいみじき事なれば、我身のいふにかひなく、いやしきに付けても、いかゞあらんと思ふは、之れ却りて一分の信心ともいふべきか、其故は世間にてこゝろを案ずるに、あまりに欲しき物を取らせんといふを聞きて、若得ぬこともあらんずらんと思ふは、是其物に於て欲心の深きによるなり。それが往生のせまほしきに、もし往生せでもやあらんと思ふは、是かへりて往生の信心ともいふべきか。



上人門流の三高僧

鎮西・勢觀・記主三上人

二祖上人 鎮西國師の生涯

高山龍善

大聖釋尊は末の代を闢淨堅固の時代と豫言なさいました。實に今日は、大は國家の大なるより、小は一家の些事に至る迄、兎角闘ひと諍ひの

絶へない時である。昨年は餘り名の知れなかつたエチオピアが、伊太利と戦つたが、さしも勇悍な國民も文明の利器には一たまりもなく、終に併合の悲慘を見た。ヤレ、一戦争済んだかと思ふと又西班牙の内亂が起り今に戦禍が續いて居る。



之を御隣りの支那に見てもヤレ緩遠問題だ西安事變だと安き心もなき有様。眼を轉じて國內の狀勢を視ても思想界に經濟界に、將た政治界に於ても、未だ充分の安定を得て居るとは言ひ得られない。考へて見れば何所から何處迄不安焦躁、おちつきのない世相である。

かやうな時期に尙更我等は泰然として、如何なる困難に遭遇するも笑つて之を迎へ、悠々として處し行く安住の天地を求めて眞實に生きて行きたい。

回顧すれば約八百五十年の昔、我國狀は果して如何。

申す迄もなく、前きには保元平治の亂あり、後には承久の變あり、世は刈藻の亂れに亂れ、父子相戰ひ兄弟相闘ぎ、人はおどくとして安き心もなく、人生の無常不定を嘆けゝる時、此ドン底より振ひ立つて安心して生き得る途を明らかに指示せられた偉聖がある。そは言ふ迄もなく我念佛の元祖法然上人で在らせられた。

大師上人の偉大なる御感化の跡は、今更叙述する迄もないが、如何に大人物と雖、後繼者宜きを得なければ、あたら畢生の大業も、一代果てになり終つて、後世に傳はらなかつたであらふ。

幸ひなる哉、我鎮西上人ましまして、法燈燦として今に輝き、開宗以來既に七百七十年、遺教長へに此の不安の人生を救ひ、誰人も南無阿彌陀佛の聲の下に、生かされ救はれ育てられて、人生五十年を力強く踏みしめつゝ、後の世をかけて、明るく正しく仲よく進み行くべき道が遺されたのである。思へば二祖鎮西國師忍苦七十七年の生涯の鴻恩、何を以てか報謝し奉らん。

然り而して國師逝きましてより春風秋雨七百年、我等は茲に此大遠忌を迎へ奉るの好機に際會した。末徒たるもの出來得る限りの力を盡して、其御遺徳を鎮仰せねばならん。

鎮西上人

鎮西上人——、嗚呼何といふ親しみ深い稱呼であらふ——
鎮西とは無論九州一圓を呼ぶ辭であるが、九州にも古今エライ人は
澤山出たが、單なる「九州の和尚」といふ意味でなしに、全く九州全
土を代表した、エライ人で有つたといふ、深い尊敬の意を籠めた意味
に於て、鎮西上人と呼び奉る、いと懐かしい呼名である。

正統傳持

元祖の門下は多士濟々ではあつたが、一宗傳持の任に堪ゆるものと
ては、そんなに、ざらにあるものではない。
學が有つても徳が足らなければいかず、徳が有つても學が足らずで
はいけない、學徳兼備の人と言へば、今も昔も極めて少い。
鎮西上人は數ある御弟子の中にも徳風殊に勝れさせ給ふた事は彼の
華嚴の鳳潭和尚の批評でも分る。



鳳潭はなか／＼の遣り手で有
つた丈けに、人の事は餘り讀め
なかつたといふ事だが、二祖國
師の心血を注がれた末代念佛授
手印を拜讀して、
『文章はさまで立派といふ譯に
は行かぬが、其道力には感ぜ
ずには居られん』
といはれた事に見ても、如何に
道念深い所謂有難い、拜まれる
方であつた事は間違ひはない。
それ故にこそ元祖は幾多の御弟
子の中に此人を撰んで、選擇集
の附屬となり起請文の御手渡し
となつて、第二祖と定められた

に違ひはない。

宣なる哉。

文政十年上人六百回忌辰の禪は、仁孝天皇長くも諡して大詔正宗國師と下賜あらせ給ふた。

蓋し、元祖の正宗を立派に繼紹せられた方だといふ御思召しを簡めさせられたものだといふ事を、拜察し奉る事が出来る。

(二祖鎮西上人初めて吉木の禪房に元祖法然上人を訪ふ圖)



鎮西上人とは
どんな御方？

今を經る事七百七十七年の昔
二條天皇の應保二年五月六日、
筑前國遠賀郡香月莊に呱呱の聲
を擧げさせられ、御幼名を文珠
丸様と申上た。

父君は畑山の城主彈正左衛門
則茂、母君は古川氏、御兄弟御
三方在らせられた。二祖は其次
野坊である。

餘程佛縁の深い御館で有つた
と見へ、弟君も後に出家して
三位房と仰せられた。

仁安三年、文珠丸様齡七歳にして菩提寺の妙法々師に入室し、十四
歳剃染して御名を聖光房辨長と頂かれた。淨土歸入の後には自ら辨阿彌
陀佛と仰せられた。爾來廿二歳の春迄、九州、一圓の名僧知識を歴訪
して、具さに研鑽を重ね道業を練られたが、壽永二年奮然起て觀山に
登られ寶池房證眞法師に師事し、建久元年學成業遂、古郷に歸を歸ら
れたが、偶々僧侶の九州大學とも申すべき油山の學頭職に就き、師弟

の教養を怠りなかつたが、卅二歳弟君眼前の無常に驚きて、始めて念佛に指を染め、卅六歳明星寺の五重の塔を完成して、其本尊佛を京都に迎ふる時、ゆくりなく法然上人に面謁して、悦服、終に安心の師と仰ぎ、年來所修の聖道を捨擲して、淨土門に歸入し首尾八年、元久元年四十四歳にして濁瓶遺りなく、終に第二祖を繼承し、後師命もだしがたく鎮西に歸つて、七十七歳の夕迄化緣至らぬ限もなく、千古不朽の大足跡を遺して、嘉禎四年二月廿九日安然として如眠大往生の素懷を遂げさせ給ふたのである。

師緣法緣

「蒲團着て寝たる姿や東山」三十六峰聳けるが如き連山の中にも、音に名高き華頂山、今でこそ七堂伽藍輝き渡り、推しも推されもせぬ總本山、各宗に冠たる知恩院ではあるが、八百餘年の昔は、狐狸も躍るてふ、野菰の生ひ繁る、此所眞葛ヶ原一帯の地、此所に草庵を結んで、靜かに念佛して居る聖者が有つた。身は墨染の衣に鼠の袈裟、道心坊主と見誤られ相な風態乍ら、内に裹める靈徳は自ら外に顯はれ、日を追ふて慕ひ來るもの靈霞の如く、京洛の巷に念佛の聲は高まり行つた。申す迄もなく法然上人の假りの住家である。

當時大師は今の廿五間四面の大御影堂、其向扉の邊りに、東西三丈計り南北十丈計りてふ小やかな庵に起臥して居られた。此所に飄然として訪ね來つた一人の修行者が有つた。

『鎮西の聖光と申す念佛の行者で御座る、御取次が願ひたい』
聲は其儘元祖の御耳に達した。

『念佛の行者とあればお懐かしい御對面を致しまする。』

時は建久八年夏五月、青葉吹く風も涼しき靜寂の境——。一方は日本第一の大學者大德者、一方は九州第一の大學者大德者、相對して午後の二時頃より、夜の十二時過ぎ迄、蕩々十時間一代の蘊蓄を傾けて醇々不倦、老師の大説法の前には、さしもの聖光上人も頭へ上からず、不思議涙に咽びつゝ、仰げば彌々高く鑽れば彌々固し、我爲の大師尊は我法然上人なりと、心から敬服して

『崑崙の頂きを仰ぐが如く蓬瀛の底を望むに似たり』

と迄讃嘆せられた時の光景、何等の崇嚴ぞ、實に一幅の大畫巻物である。

かくて師弟の契り益々深く、翌年より常隨給仕講席一日も缺くる事なき熱心振を見て、同朋眞觀房或時師の疲勞を想ひつゝ、

『聖光様アナタは壯年故日々の御講釋もさる事乍、上人は何分の御老體時に一日位は御休みしては如何です。』

此厚意的注意には聖光上人も同感の餘り、一日退いて靜に引籠り讀書し給ふてゐたので待ち兼ね給ふ師の君は、

『今日の運參何故かある、疾く參られよ後生の話せん』

此書を拜受したる聖光上人は、感激措く能はず、

『數ならぬ聖光をそれ程迄に思召す有難さ勿體なさ、何と御禮の申し』

様もなし」

と其儘馳せ参じて讀講を聴聞せられたといふ事である。

嗚呼何といふ師弟情誼の濃やかなる事よ、我等は此一事を見ても如何に元祖が聖光上人に嚮望せられたか、師縁法縁の淺からざるを思はざるを得ない。

鎮西上人の念佛

上人は常に口にも折々は助け給へ南無阿彌陀佛と稱へられたといふ事である。

心存助給口稱南無佛は、元祖法然上人の本願念佛の中樞で有つて、又今日傳燈の精髓である。此教義を離れて淨土宗はない。

併し之に據はれて、此世を忘れ、一にも二にも腰抜け土の如く、無爲に念佛せよといふのではない。

此所に大安心の根柢を定め、此基礎の上に立つて、此念佛が名體不離の約束、佛光照曜の利益、現世から觸光柔順善心生焉。過去せるものには三途見光増崇品位の御利益を感じ得べき事は申す迄もない。

此意味に於て鎮西上人は之を徹底して、

「念佛とは不離佛值遇佛の義也」と推し擲けて御勸めになつた、我等惡を想ひ罪を作る時は必ず佛と離れ佛と遠ざかりつゝある時である。

我等合掌念佛する時何時しか如來我等の胸中に宿り給ふが故に、念々佛の護念増上縁に生きて、悦び働き、働き悦ぶ事が出来るのである。

如斯して此信仰の擲かり行く程、所謂「治教を冥々の中に資け人心を默々の際」に格すゝてふ冥益をも施すのである。

嗚呼此單信口稱の念佛が如何に廣大無碍の力用を發揮し給ふ事ではないか。

我等の修養の模範としての鎮西上人

上述の如く、我等は單に正法傳持の祖師として鎮仰せるのみではない、日常修養の模範としても、あなたの御一代には學ぶべきものが、數々あるが、今心附た二三を抄出して見よ。

其一 勉學者として。——聖光上人十歳前後には、明星寺の學徒として、常寂法師に隨身し給ふたが、未だいとけなき上人、時には學に倦怠來り給ひしも無理からざりしが、師命により、櫛櫛の花を佛前に手向けんとて枝を折らんとし給ふにも、其樹高くして容易に折る事難かりしを、再三工夫して漸く攀ち上り折る事を得たる時、豁然として心眼開き、學又如斯。難しと止めば、永久に知るを得ざるべきにと前に發奮の動機を得られしといふ事である。我等兎もすれば難關に遭遇するの時、挫折せんとする如き思ひがある時があるが、上人の幼時既に我等に、堅忍努力の模範を教へ給ふて居るではないか。

其二 求道の熱意。——鎮西上人十七歳の頃より、豐前に有名なる彦山權現に二利双行の大願を遂げん事を祈願し、櫛風沐雨、九里の山

井川定慶著

四六判三五〇頁上質紙
色刷法然上人繪巻表紙
國寶御影其他口繪數葉定價一圓三十錢
(送料十二錢)

法然上人の選擇集

『浄土』誌上でもお馴染の深い、京都知恩院史編纂所主任井川定慶師が全國中繼で放送された聖典講義。法然上人が「私の所存はことごとくつくしてある」と云はれた選擇集がこゝに現代にふさはしい衣裳を纏つて現はれた。明快で要點を盡された近來の名講義！

醫學博士 石川日出鶴丸

井川定慶師の選擇集が全國中繼で放送されました。現代的な講演で要點が悉く述べられており、少しも無駄がなく聴き古してゐる講演にも關らず新しく教へられる點が少なくありませぬ。

■今度それを加筆され御出版になると承り誠に喜びに堪へません。

目丁三町表區坂赤市京東

新英社

〇五五四五京東替振

道を一千日に亘り日參せられしといふ。何事にも三日坊主の多き世の中、此眞劔さは又我等の導き模範ではないか。

其三 念佛の體驗者として。——二祖上人は事ある毎に、如法、眞劔の別時念佛を實修せられた。而も或は百日或は千日、尋常人の及びもつかざる長日の御修行は我等の渴仰に堪へない難有き御手本である。

末代念佛授手印は彌陀の四十八願に因みて、四十八日別時滿願の結晶である事は餘りに有名な御話だが、特に私の敬服するのはアノ厨師の千日の御別時である。

千日といへば約三年、五日七日さへ疲勞と退屈を覺え易き我等、此上人の絶倫の勢力と、體驗を得る迄の眞劔さには慚愧の涙油然として禁せられない。其八百日頃に至り風を聞て集る信徒の多きを嫉み、寺

僧等圖つて迫害を上人に加へんとするの議あるや！

「皆は心任せにするがよい私は如來に誓ひし、別時退轉は出來ないぞ」と何といふ毅然たる態度よ、如何に上人の底に閃く信念の深さと固さを想像する事が出来る。而も幸に轉禍爲福、却て宗風益々揚つたといふ。——何たる難有い事であらうぞ——。

今日の人は單に信仰方面のみに非ず、兎角何事も薄志弱行、議論倒れになり易い世の中。——其中に默々として如實の體驗を重ね、自ら厚く之を信じ、次で之を他に傳へんとする眞面目さ、かくてこそ始めて説法に力あり、人格の感化もある。吾等此所にも深慚深愧、日に三度摩頂して意馬心猿に鞭ち、白道精進、眞劔念佛したいではないか。

變ニ調

歌 の 讃 禮 祖 列 土 淨

1/4	1	1	2	2		6	6	5	6		2	2	2	1		2	—	—	0	
	ア	フ	ゲ	ヤ		ア	—	フ	ゲ		ワ	ガ	ノ	リ		ノ	—			
	1	1	2	2		3	3	5	3		2	2	2	1		2	—	—	0	
	ジ	ウ	—	ド		レ	—	ツ	ノ		ト	フ	ト	サ		ヲ	—			
	6	6	6	6		6	6	5	3		6	6	5	6		2	—	—	0	
	ア	—	フ	ギ		タ	タ	ヘ	ン		ヨ	シ	ミ	ヅ		ノ	—	—	—	
	3	3	5	5		6	6	5	3		2	2	2	1		2	—	—	0	
	ナ	ガ	レ	ヲ		ク	—	マ	バ		ミ	ナ	モ	ト		ヲ	—			

「仰げや仰げわがのりの、淨土列祖の尊さを
 仰ぎたたへん吉水の、ながれをくまば源を
 「にぐるところのあくた川、しづみはつべきわれひとぞ
 釋迦のおしゑの八萬四、とけるがなかにとりわけて
 彌陀のちかひを一ひらの、紙にのこしておしゑてし
 吉水大師のたふとさを、み名をとなへてむくゆべし」
 「尊きおしゑ身にうけて、大紹正宗二祖國師
 西にこころを筑紫灣、法のいさはは彦山の
 みねよりたかくかがやきててらさぬくまもなかりける
 あふぎたたへんそのとくを、み名を唱へてむくゆべし」
 「ながれもきよき吉水の、みあとをうけし聖こそ
 花の都の法の月、源智上人勢觀房
 知恩のかがみつたへたる、華嚴の峰はとこしゑに
 のりの泉ぞ尊とけれ、み名を唱へてむくゆべし」
 「汲めどつきせぬ吉水の、三祖良忠記主禪師
 みのりをうけて東路に、法燈たかくかけたもふ
 鎌倉山や蓮花谷、光明とはにかがやきて
 恵みの海ぞはてもなく、み名を唱へてむくゆべし」

知恩院
第二世

淨土教の傳持者勢觀房

中村 辨 康

勢觀房の系圖

勢觀房源智上人のお父様は、勅修御傳に依ると、備中守平師盛卿と云ふことになつて居る。師盛と云ふ人は小松内大臣重盛公の第五子で、お母様は中納言家成卿の女、師盛卿と維盛卿とは同母の兄弟だとの事であるが、相當年は若かつた筈である。

何しろ維盛を長子として資盛、清經、有盛と次第した其次ぎの弟だから、それに長兄の維盛は壽永三年の時二十五歳たつたから、



その上師盛の任官もまだ備中守と云ふ地方の國司に過ぎなく、位は僅かに從五位下あたりに相當して居ただけだから、まだ年が行つて居なかつた事がほど想像されるのである。直ぐ上の兄である有盛が從四位下左少將、其上の兄清經が從四位下左中將、次兄長兄の資盛維盛が同じく從三位右中將と云ふ高位高官の平家チャキチャキの公達である。

もし有盛あたりと年が餘り違はないならば、兄弟としての釣り合ひから右近衛少將ぐらゐになつて居てもよい筈である。これらの事情から考へると、十六で討死した從五位下敦盛や、同じ年の武藏守知章あたりの年配と大差なかつたと見てよい。されば師盛一の谷戰死十四歳と云ふ説もある位であるが、此説などさう大した誤りは無ささうに思はれる。

然るに勢觀房源智上人は壽永二年の生れであるから、若し假りに師盛の十四歳戰死説が正しいとすれば、十三歳と云ふとても若いお父様だつたと云ふことになる。

さればこそ異説も多い譯なのであらう。

父としては通盛説、敦盛説、資盛説、三位中將説など、色々あつて、まことに混沌として居る。

然し、むしろ混沌として居るのが本當ではないかと思ふ。平家滅亡後十一年も隠れて居て、世の中もだんだん治つて來、重衡に焼かれた東大寺も再建され、大將軍頼朝が上洛して大佛供養を盛んに舉行しやうとした年に、漸く法然上人の處へつれて來られたのだから、云はば

「隠し子」であつて、餘り噂に上つて居なかつた人であつたに相違ない。何しろ當時の事情が事情であつたから、ハッキリして居たのでは周囲の壓迫もあり、かた／＼隠密に暮して居なければならなかつたのである。

けれども法然上人には當然判つて居たことであらう。

勅修御傳には「平家逆亂の後、世のはばかりありて、母儀これがかくしもてりけるを、建久六年生年十三歳のとき上人に進ず」とある。

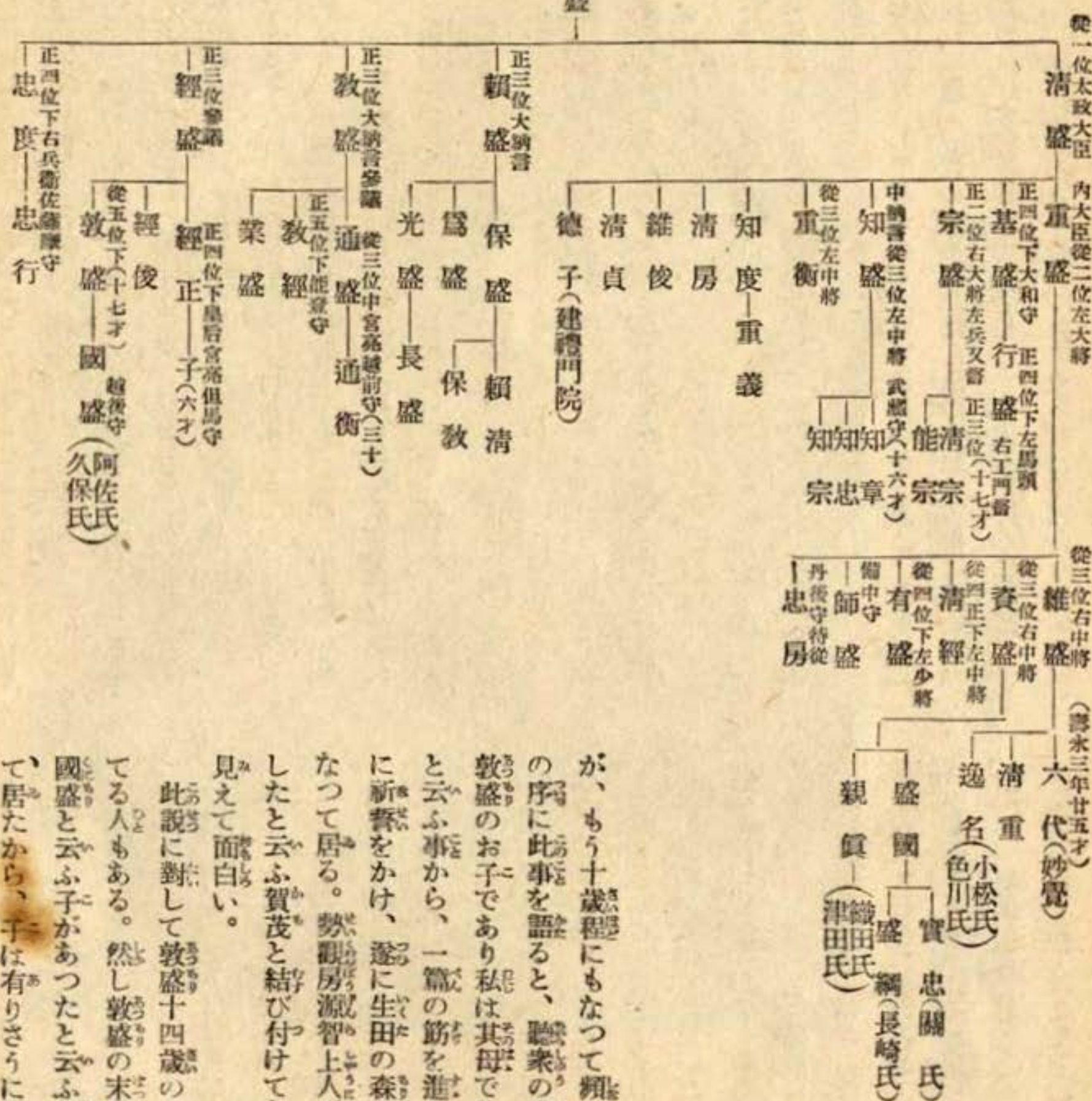
今ま平家の一門を知る爲に次頁に圖示する。

之は大日本人名辭書及び國史大辭典などで調べたものであるが、何れも大日本史に據つて居るから比較的正鵠を得て居る筈である。

三位中將説は之の圖表で見ると、知盛、重衡、維盛、資盛の左右二人宛で、近衛府の官制にピッタリ合つて居り、別に清經が從四位下で左近衛中將になつて居るのは、左中將の知盛が新中納言になつたから、其後を襲つたものではないだらうか。之を重盛孫と云ふ説に合すと、結局維盛、資盛、の内の何ちらかと云ふ事になる。但し之とて資盛説には合ふが、本三位中將説には合はない。

通盛説は其内室小宰相局が十九歳で初妊中、屋島に渡る途中で、海に投じて死んだ筈だと云ふので、之を否定しやうとする人もあるが、必ずしも子どもは正妻に限つた譯でもないから小宰相局を母とした限り、通盛が父たることを否定する材料にはならない。但し從三位ではあるが中將ではなく且つ重盛の直系でもない。

賜平姓
高望王・忠盛



が、もう十歳程にもなつて頼りに父母の事をなげくので、或日説法の序に此事を語ると、聴衆の中から、若い婦人が走り出て、その子は敦盛のお子であり私は其母であると打明けた。

と云ふ事から、一篇の筋を進めて、亡き父に會ひ度いと、賀茂の明神に祈誓をかけ、遂に生田の森で父の最後の有様を夢に見ると云ふ話になつて居る。勢親房源智上人が、始終なつかしがつて自分の終焉地にしたと云ふ賀茂と結び付けてあるところに、作者の素朴な技巧がほの見えて面白い。

此説に對して敦盛十四歳の子と云ふ計算から、信ぜられないと云つて居る人もある。然し敦盛の末孫として四國の阿佐久保二氏の祖である國盛と云ふ子があつたと云ふ説もあり、且つ此頃の殿上人は相當ませて居たから、千は有りさうにないからと云ふ憶測は、ちと獨斷に過ぎ

また敦盛説も相當有力らしいが、其筋は謡曲「生田敦盛」及びお伽草紙「小敦盛」に出て居る。

法然上人が賀茂の明神へ參詣の歸途、下り松のもとで、二歳ばかりの美しい男の子の手箱の中に入れて捨てゝあるのを拾ひ取り之を養育した

はしないだらうか。

また重衡は公卿傳に依ると、壽永三年正月七日に正三位になり同八月解官して西海に赴いた由である。すると本三位中將は此人より外にないから、重衡こそ勢觀房の父であらうと云つてゐる人もあるが、それは唯だ或る一説を採用しただけであつて、確かな話では無い。

こんなやうな譯で、果して誰がお父様なのか、ほんとのことは判らないのであるが、諸説共に平家權要な地位にあつた人の子である事だけは是認して居る。繪像の風貌から推察しても、如何にも品のよいおとなしやかな高貴な面影が見えるから、恐らくさうであつたらうと思はれる。

勢觀房の生涯

勢觀房源智上人は十三の時、建久六年に、母親に連れられ法然上人の處へ來た。それつきりお母様には會つて居ない。然しお母様に會ひたかつたであらうことは、人情の然らしむるところ、其上親一人子一人なのに、男世帯の中に育てられて母の愛には人一倍飢へて居つたのだから、母なつかしさはまた格別なものがあつた筈である。

其後十八年過ぎた建暦二年の正月廿二日に、或る一人の貴女が、車をかつて、法然上人の病氣見舞に來られた事がある。

折ふし誰も居らず、勢觀房も病室の外に居たが、ふと話し聲がするので、聞き耳を立てゝ居ると、女のこゑで、

「もつと永くお達者で居られますやうにと願つて居りますのに、御往生もお近いと承りますことは、本當に悲しく心細いことで御座います。またこれは誠によくきく藥ださうですから、召し上つて頂きたう存じます。それにつけても御往生の後には、お念佛のみをしへをどなたに承つたらよろしう御座います。」

と尋ねられて居る模様である。すると法然上人は、
「私の所存は残らず選擇集に乗せてありますから、これに違かつて居ないことを申す人ならば、私の申す義も誤りなく傳へられて居るものと覺召して下さつて宜しう御座います。」

と答へられ、そのうち暫く御物語り遊ばされて、やがてまた車に召されお立歸りになつたが、その様子がたいびとも思はれないので、勢觀房が其車を追ひかけて行くと、河原へ車をやり出し北の方へ走らせて行くやうであつたけれども、ついに見失ひなつてしまつたと云ふ。何となくお母様のやうな氣がしたのではなからうか。第六感にピンと來たものがあつたからこそ、一生懸命に車を追ひかけたのでもあらう。

もつと頑丈な人だつたら追付いたかも知れなかつたが、か弱い勢觀房のことだから、遂に見失つてしまつたのは、かへすがへすも残念なことであつた。尤も之を見た一人の坊さんが、車のあとをしたひ行き、賀茂のあたりで追ひついたらしかつたが、何う云ふ譯か、其處に死んで居たので、後に此處の芝野を「房が死」と名付けたと云ふ傳説も殘

つて居る。

勢觀房は力なく立ち歸つて、法然上人に、

「お客様が御見えになつたやうでしたが、何誰で御座いましたでせうか」

とお尋ねすると、

「あれこそ輩提希夫人よ。賀茂のあたりにおはしますなり」

とおつしやつて本當のことをお明かしにならなかつたとの事である。

それ以來、賀茂のほとりがなつかしく、上人なきのち賀茂の社壇近く

に居をしめて、時々お詣りをしたと云ふ事は、何か其處に尋常でない

ものを示唆して居るやうである。

十三の時に別れ、それから十八年も過ぎて居るか

ら、様子はスツカリ變つたであらうけれども、幼な心

に燒き付いて居る母の面影を何で忘れやう。

後姿をチラりとぐらゐは見たか何うか。其邊のことは判らない。然し三十になるかならぬかのまだ若い勢

觀房として見れば、血氣盛んで餘程頭も敏感に働く頃

である。輩提希夫人だなど云ふやうな一時のがれの

言葉が、承服される譯がない。尙更「ははあ」と感付

いたに相違ないのである。

然しあの謹嚴な法然上人が、からまで秘し隠しに隠

さねばならなかつた勢觀房のお身上を考へると全く可

覺さうであり悲慘である。

却説、法然上人は勢觀房の母上から「お弟子に」と頼まれたけれど

も、思ふ處あつてか、之を慈鎮和尚の所へ送つたのであつた。

此頃の慈鎮和尚は四十一歳で、第六十二世の天台座主法務權僧正と

して、名聲一世に高く「山門の樞機秘教の棟梁」と云はれて居た。

だから此人の弟子と云ふことになれば、平家ゆかりの者への武家彈

壓の手も、公家の權威に幾分遠慮しなければならぬと云ふ利益もあつ

たらうと考へられる。

そんな表面上の體裁に過ぎなかつたのでもあらうか。勢觀房は慈鎮

おろし





和尚の手に
依て出家す
ると間もな
く法然上
人の庵へと
歸つたので
あつた。

勲傳には
「いく程
なくて上
人の禪室
に歸參し
常隨給仕
首尾十八
箇年、上
人憐愍覆
護他に異
にして、
淨土の法
門を教示
し、圓頓

戒この人をもちて附屬とし給ふ。之に依りて道具本尊房舎聖教、
殘る所なく之を相承せられき」

と云つて居るやうに、それからち法然上人が殊の外慈しみ愛育せられ、勢觀房も亦た宛かも慈父に向ふが如く給仕せられたのであつた。

元久元年の十一月、山門の「反法然熱」高調に就て法然上人が七箇條起請文を制して門弟を誡められた時、勢觀房は漸く二十二と云ふ若い青年僧であつたが、幾多先輩のある中を第五番目に連署して居られることや、また建永二年三月法然上人が讃岐へ配流せられた時、(年二十五歳) 勝津の津浦まで御見送りし、御自筆の「水鏡の眞影」を頂いたと云ふことなど、以て其間の消息を覗ふことが出来る。

またかの貴婦人が御病氣の法然上人を訪ねられた翌日、恩師を看護して居られた勢觀房が、念佛の法門に就て世間に異義邪説が横行して居るところから、其正邪判定の龜鑑にも且つは永い御形見にもと特に御願ひして、御遺訓「一枚起請文」を書いて頂いたと云ふ有名な話しは、其前日の貴婦人が御尋ねした言葉と照應して、誠に意味深遠なものがあると共に、之を一生涯頭にかけて秘藏してはなさなかつたと云ふことを想ふと、貴婦人への心づかひと、恩師への愛着、併びに正流守護の氣魄とが、目に見えるやうである。

また法然上人が歿くなられてから滿三年目、色々お遺物として頂いた内の本尊像を、法勝寺の境内の一草堂へ今の南禪寺北の西禪寺に安置して靜かに住んで居たが、其翌年の正月十日から二十五日迄十六

日間、別時念佛を修せられたと云ふ確證の残つて居る事も、法然上人が毎年正月に別時念佛を御修行になつたと云ふ恒例の事蹟と思ひ比べて、恩師追憶の至情、誠に禁じ難いものがあつての上と想像される。

但し西福寺の寺傳に依れば「小宰相局菩提の爲」と云ふ事になつて居るさうである。また兵庫の長傳寺も其寺傳では「平家の一族菩提の爲」に勢觀房が建てられたものと云ふ事になつて居るさうである。

それが正傳か否かは暫く別として、勢觀房として見れば肉親への愛慕の忘れられないものがあつたであらう。その終焉した處と傳へられる賀茂の功德院（神宮寺）と云ふのも、賀茂の河原屋（今の百萬遍知恩寺の前身）なる法然上人御住房の一つで、恩師に對する知恩報恩の意味ではあるが、また一面肉親の一人かと察せられる貴婦人へ慕しさも手傳つて居たのではあるまいか。

勢觀房源智上人の生活は、勅傳にも云つて居るやうに徹頭徹尾「隱遁を好み自行を本」として居られ、衆人との交りを避けて、會合が五六人以上にもなれば「魔縁きをひなん、あなごととし」とてこれを止められたと云ふことであるから、極度に幕府の忌避に觸れることを恐れて萬事内輪に内輪にと控へ目勝であつたらしいのである。

こんな氣持の人だつたから、謂ゆる嘉祿の法難即ち法然上人滅後十六年目の大谷の廟所破却の大迫害の時も、難を避けて賀茂に隱棲せざるを得なかつたと云はれるが、勢觀房の心のうちは何んなに悲しかつたであらう。

大谷の禪房は慈鎮和尚の寄進せられたもので、その所縁もあつてか勢觀房へ付屬せられ、同法の徒衆に推されて第二世と定められ相續化導の院主とならしめられたと云ふことだから、誠に守護すべき大きな責任のある地である。法蓮房信空や覺阿の手で御遺骸は他に移されたとは云ふものの、この恩師最後の靈地を護り得なかつた一事は、人一倍恩を思ふ此人の、如何に心をいため、如何に心を苦しめた事であらう。後に自分が再興した折、それを「知恩院」と名付けたのは、せめてもの心遣りだつたかも知れない。

一説に依ると此嘉祿法難の翌々年、即ち寛喜元年に、兵庫の經ヶ島（法然上人御流罪の時立寄られた地）に留錫教化せられた由であり、また義山上人の翼讃と云ふ本には、

「山徒と爲に廟堂を破却せられ、近隣閑居の僧房も悉く打壞たれて、居住の隱士等四方に追却せらる。かくて七年を経ける程に、世移り時改りて人の心も穩かなりければにや、文曆年中に至りて勢觀房上人鑑西より歸洛アリケルニヤ」し給へり。時に大谷の舊房再興を營んで先師の厚恩を報じ奉らんとて、奏聞を遂げ給ひて、終に其本意を果し給ひければ、主上歡感ましまして佛殿に始めて大谷寺、廟堂に知恩院、惣門に華頂山とぞ勅額を下し賜りき。されば當院の法令此時に續き得て、連綿として今に繼絶なし」と云つて居るが、之で見ると、九州方面へ身をかはした事になる。成程、さもなかつたら、此時隆寛律師、空阿、幸西などが流刑にな

つて居るのだから、或はさうした運命に會はされたかも知れない。

然し大谷の禪房再興の年から數へて四年目に、即ち嘉祿三年九月二十一日付で、勢觀房から九州の鎮西上人に送られた書翰があつて、

「相互不見參候 年月多積候 于今存命 今一度見參

今生難有覺候 哀候者歟云々」

と云ひ、次ぎに近頃法然上人の教義が大にあやまられて宣傳せられて居るのを歎き、互に正流傳持の操守を悦び合つて居るが、その「見參せざる事、年月多く積る」と云ふ文字が、四年前を意味するのか、或は建久元年に鎮西上人が九州へ歸國せられてからの三十五年の長さを意味するのか、若し後者だとすると「文曆年中鎮西より歸洛」と云ふ事が埒らなくなる。

それは兎もあれ、年來の望みであつた「大谷の禪房」も再興せられた。今の知恩院から見ればさほどでもなかつたであらうが、八年前に破壊せられたものよりははるかに立派で、餘程調つて居たのであらう。總門、廟堂、佛殿の夫れ夫れへ勅額さへ下つて居るのだから、ほど想像がつくのである。

之で知恩院第二世たる責任を充分果たしたことになる。そしてあとは唯だ正義擁護の事だけである。

だからその翌年、異端邪説を破る爲に「選擇要訣」と云ふ本を著書は此外にもある）を書いて居り、其また翌年に前述の鎮西上人へ手紙を送つて異端者の多いのをなげいて居るが、其手紙にもあるやうに

「今一度の見參も」叶はずに、其翌年即ち暦仁元年の十二月十二日に賀茂の功德院で、五十六歳を一期として頭北面西、念佛二百餘遍を唱へ、最後には「陀佛、陀佛」としか聞へなかつたくらゐ、いとも安らかに命終せられたと云ふことである。

尤も此の年の閏二月二十九日には、親しかつた鎮西上人も七十七歳で御往生なさつて居られるのだから、立派になつた大谷の廟所にも住まず、獨り靜かに加茂の佐々木野に隠れて念佛して居た勢觀房として見れば、スツカリ氣落ちせられたからでもあらう。

想へば其御一生は誠に痛ましくも亦た御氣の毒の極みであつた。周囲の壓迫に堪え忍び乍ら、其弱氣の中をしかも力強く主張すべきを主張し、再興すべきを再興し、守護すべきを守護し、後世に残すべきを完全に残して行かれたのである。

淨土一門に取つて其功績は實に偉大であると云はねばならない。

本年は時宛かも其七百回忌に相當する。

隨て其遺跡の地である京都東山の知恩院（三月六日——十二日）並に百萬遍知恩院（四月十九日——二十日）などでは、此の陽春を期して大法會が営まれる。

念佛の信仰にいそしで居る私達は、其報恩の爲にも是非萬障を差繰つて參拜せざるなるまい。

「恩を知るもの誰か恩を報ぜざらんや」だからである。

三祖上人記主禪師

佐藤賢順

まづ日本地圖を披いて下さい。鉛筆で次に擧げる地名を順々に印をつけてみよう。

石見國三隅の庄（島根縣那賀郡）、出雲國饒瀨寺（同縣飯川郡饒瀨村）筑後國善導寺（福岡縣三井郡）、上妻天福寺（同八女郡）、再び石見國安藝國、京都、伊勢國、信濃國善光寺、次に碓氷峠を越えて上野國、利根川に沿つて東へ下る。それから下野を経て、下總國下小堀（千葉縣香取郡）、同匝瑳郡鍋木（香取郡古城村）、同郡磯岡、更に相模國に入つて鎌倉佐介ヶ谷、北へ向つて武藏國足立郡箕田（埼玉縣）、また鎌倉再び東海道を西へ上つて京都、三度鎌倉へ――

もし地圖の上に順々にこの地名を求めてゆくとすれば、その目まぐるしい程に激しく變る進路に先づ驚くであらうし、またその歷程が我國の文化圖の大部分に渉る廣範圍なものであるのに更に驚くであらう。實はこの西に走るかと思ふと東に馳せる、文字通り席の暖まる暇のない鐵錫遊行こそは、我が第三祖記主禪師良忠上人が八十九年の御生涯に歩まれた、諸種の文獻に記録されてゐる御足跡なのである。

その行程は凡そ何百里位になるであらうか。概算し得べくもない。その頃は汽車や飛行機のお蔭で人間が「距離」に對して殆んど無感覺になつてゐる今とは違つて、距離が大きな壓力となつて人間の行動を制肘してゐた時代であつた、といふ事を想ひ出さなければならぬ。その次に手近にある國史教科書を披いてみませう。正治元年（皇紀一八五九年）から建仁、元久、建永、承元、建暦、建保、承久、貞應、元仁、嘉祿、安貞、寛喜など、いふ三四年づつで變る年號を澤山に經て、弘安十年（一九四七）に至る八十九年間が、茲に今物語らうとする時代である。源賴朝の職業は成就して征夷大將軍となり、武家政治は名實共に完成して、鎌倉に賴府が開基された。その賴朝も正治元年には卒去して、それから、事實上の政權は執權職の北條氏に移つてゐた。賴朝の後には賴家、實朝と二代續いたゞけで、源氏の正統は絶えてゐる。といふのも、賴朝が弟範賴、範經を殺して、自らその羽翼を斷つてゐたからである。實朝が害せられた後は、北條義時、泰時、經時、時賴、時宗、貞時、高時など次々に執政者となつて、約百二十

年間に亘る北條時代が現出した。源頼朝の幕府開創の頃から北條高時が亡ぼされるまでの約百五十年は法令が主として鎌倉から出てゐるので、鎌倉時代と呼ばれてゐて、その間には實朝の弑害、尼將軍の活躍、六波羅探題の設置、蒙古襲來、敵國降伏の祈願など血と刃と策謀の生々しい繪巻物が繰り擲られる。然し新興武士階級が、一切の因襲と腐敗を一掃して諸政を一新し、剛毅にして簡素な善政を布かうとする意氣は、その時代に新鮮な感覺を導き入れた。鎌倉時代の諸の制度文化がかやうな「時代」を温床とし生育したこと、眞に日本的



なつて、波瀾を極めたその一生に休止符を打ち靜かに眼を閉ぢてゐる。父は圓尊と言ひ、太政大臣京極師實公の後裔、堀川宰相頼定卿の孫に當り、比叡山で修行したことがあつたが、後に石見國に移り住んだ人と傳へる。

禪師の御生涯は求道修學の時代と弘法巡錫の時代と二つの時期に分けられる。三十九歳にして二祖鎮西國師聖光上人より法を嗣ぐまでの時期が求道修學の時代であり、法を付屬されてから後が弘法巡化の時代である。

なる宗教がまたかやうな事情の故にこそ新興したことなどを、考へ合せなければならぬ。

× ×

記主禪師、御生前中の名は然阿良忠と申す。記主禪師とは寂後賜はつた諡號である。正治元年石見國三隅の庄に生る。この年源頼朝は多年の宿願を成就して天下を平定し、幕府の基礎も安泰と

その當時としては寧ろ僻陋の地と言はるべき山陰地方に生を享けて修學には誠に想像以上の困難があつたであらう。幼少の頃、父圓尊の所へ三智法師なる人が来て恵心僧都の往生要集を講義するのを聴いた十三歳、出雲國勝山寺に登り月珠房信通に教を受けるやうになつたのが修學の發端であつた。十六歳の時、髪を剃つてからは熱心に法華經などを研究なされた。もともと聰敏俊秀な天性の方であつたし、その上に道心は愈々堅固となられたので、顯・密・禪・淨の諸教、何とはなしに貪るやうに涉獵し研鑽した。例へば、圓信や信通に天台・俱舍を、勝山寺密藏に台密を榮朝に東密を、泉涌寺俊房に律を、其の他諸宗の碩學から、それぞれの奥義を學んでゐる。名高い良遍僧都(奈良勝願院)に師事したとも、またその頃、宋から歸つて聲譽の高かつた道元禪師(曹洞宗の祖)を訪れたとも傳へてゐる。

禪師の思想や信仰が、その頃、どんな方向に大體定まつてゐたか、それは憶測すべくもない。法華經の研究に、また、諸宗顯密の聖教の研鑽に精進せられてゐた事は確かであるが、その胸底には西方願生の熾烈な信火が燃え盛つてゐたことであらう。禪師の高足白旛の寂慧は書いてゐる――

「先師はよくこんなことを話された――十八の時だつたと覺える、大唐の法照禪師の大聖竹林寺記を讀んでからといふものは、心は念佛門に傾いて、日々一萬遍の念佛を唱へるやうになつた。その他の法門から出離を求めようなどとはそれ以來考へたことがない」

當時新興淨土教の教は、野火のやうに燃えて風と共にこの裏日本の地にも傳へられてゐたであらう。時勢に敏感な若き求道者が、これに無感覺であつた筈はない。

學成つて三十四歳の時、郷里石見に歸つて多陀寺へ濱田港附近の勝地(に隱棲して、一向念佛に精進した。然しこの閑居にも生活の轉期となる機縁が惠まれた。三十八歳の初秋のことである。顯然とこの草庵を訪れた法師がある。名を生佛法師と言つた。

「聖光上人は法然上人の高弟、淨土一宗の正統で、今鎮西の地にあつて大に淨土教を弘めておられると聞いてゐる。自分は多年法然上人の教を仰信する者であるが、上人御入滅の後には異流異解が多く現れていづれを師と仰いだらよいのやら惱みぬいてゐた。これは信州善光寺に參詣して佛の證判を蒙るに如くはないと思つて、善光寺へ參る途中、靈夢を感じた。その夢に聖光上人こそ最も能く往生の道を知るものだ」と告げられたので、急ぎ善光寺に至り七日七夜の參籠を済ませて、これから筑後に赴くところである」

と胸にこみ上げる喜びを語つた。禪師はこの言葉に如何に動かされたことであらう。私に模索してゐたものを、今確かに搜し當てた喜びは何に譬へやうもなかつた。「然阿良忠上人傳」の筆者道光でさへも、この心境をたゞ「隨喜無量なりき」としか書けなかつた。二人は前後してこの地を發足して、聖光上人の在す筑後の善導寺へと急いだ。

聖光上人が法然上人から法を盡いで鐘西の地に歸られてから、既に三十餘年を経過しある。その化益によつて北九州一帯には早くから戰信直行の法門が移し植えられて、大衆は普く擲取不捨の光明に浴することができた。聖光上人は「末代念佛授手印」だの「徹選擇」だの「念佛名義集」だの重要な典籍を相次いで述作されて、續出する疑問を解決し、擲行し勝ちな勝手な解釋や獨りよがりを克服して、正統淨土教の法幢を愈々高く掲げられてゐる時であつた。

禪師は急ぎ善導寺へ廻り着いたが、生憎と聖光上人は五里程離れた上妻の天福寺に化鎗中であつたので、また其處まで尋ねていつて、師弟の約を結んだ。それ以來講席に常侍すること十一箇月、歸に入り隨に徹する一程までに熱心に貪り聴いた。このやうにして淨土の宗要は悉く禪師に授けられたのである。そこで禪師は「領解末代念佛授手印鈔」を草して上人に示し、禪師の修得するところが、法然上人相傳の正統の法門なることの印証を受けたのであつた。時に嘉祿三年の八月、聖光上人は七十六歳、禪師は三十九歳、宗祖が御入滅なされてから二十六年目であつた。

聖光上人がこの老齡まで關法の弟子を定められず、講筵に常侍すること僅かに一年にも満たざる、しかも遠來の門弟に宗要の悉くを授けられたのを考へても、禪師が研學にまた信行に如何に優れてゐたかと察せられる。

聖光上人は法を授ける時に、「汝能く器に任ず。即ち此の法を以て、

悉く汝に付屬せん」と言はれた。多くの門弟の中にはさだめし猜疑も不満もあつたであらう。然し門弟に宣言せられた次の言葉はよく疑團を一掃し、禪師が淨土宗第三祖なることを決定的にせられた。

「我年關け臨頽へて世に在ること久しからず。屢々將來を思ふて稍悲傷を繼す。然れども我が法悉く然阿に授け畢りぬ。……然阿は是れ予が若くなれるなり。汝等彼に對つて不審を決すべし。……また常にかうも語られた。「我入滅の後法門を然阿に問ふべし」

禪師はその年の八月の末、遂に上人の許を辭して、都鄙遠近に淨土教を宣揚して折角の知遇に報いる爲に、果しなき巡化の旅に出た。

x x x

茲に第三祖上人の弘法巡錫の時代が始まる。その御生涯の丁度半ばが勇躍大教宣布の旅に出られた一轉期となつてゐるといふことも、全く不思議なる偶然と言はなければならぬ。

然し九州を後にしてから最初の十年間の足跡は殘念乍ら定かには知り得ない。それはたゞ石見や安藝など中國地方に限られてゐたやうである。寶治二年禪師五十歳還るばると京都に登り、その頃まだ生き残つてゐた宗祖の遺弟が數人あつたのでこれと法談を交したといふ。宗祖の寂後、廻り京洛に留つて中心勢力をなしてゐた西山の善慧房證空も、その前年には示寂してゐた。その後伊勢の教蹟を遺し、幾く程もなく信州善光寺に詣て、翌年には利根川に沿つて東へ下り關東の地へ入り、下總を中心として頻りに講席を張ることゝなつた。

言ふまでもなく、當時關東は政權の中心地、文化の搖籃地であつた。執權北條泰時・時頼の善政はよく民心を掌握すると共に、文化の生育について力を盡したから、奈良・平安系の舊佛教と言ひ、新たに大衆の要望に應じて興隆した新佛教と言ひ、いづれもその代表者達は鎌倉と何等かの因縁を結ぶやうになつた。新舊を問はず、鎌倉への進出はそれの社會的・國家的認識を求める爲であり、やがてはそれを國家の指導的信念にまで高めよう爲である。であるから、鎌倉政權の確立後は、諸宗派は相次で鎌倉を中心に本據を構へた。舊佛教ではその代表者とも言ふべき奈良の西大寺の叡尊長老が、弘長二年鎌倉へ招かれて自ら、戒律生活の規矩を示し、庶民の生活に大きい影響を與へてゐる。新佛教では既に早く正治二年、榮西が政子の發願によつて臨濟禪を傳へて壽福寺に據つたのを初めとして、宋の僧蘭溪は北條時頼の外護によつて建長寺を開いて同じく臨濟禪を傳へてゐた。そればかりではない。當時宋より曹洞禪を傳來歸朝して道譽一世に高かつた道元は、その名聲の故に時頼に招かれてゐる。

新興宗教の一つである念佛宗も、宗祖上人の入滅後幾何もなくして東漸して來た。念佛宗が早くから京洛の地を離れて鎌倉へ來たのに就いては、鎌倉が政權の中心地であつたといふ理由だけではない。舊佛教が再々新佛教に壓迫を加へ干渉を試みたから、東に移つて新天地を開拓しようとしてゐる。長樂寺隆寛は宗祖門下の高足として、聖光・證空・隆寛と並び稱せられた程の人であつたが、嘉祿三年の大迫害に

よつて流罪となつて奥州へ赴く途すがら、相州飯山に隠れた。隆寛の弟子の智慶や願行などは、それよりも數年早く、鎌倉に來て念佛の弘通に努めてゐる。智慶はその頃の關東の念佛門の最も優れた代表者であつた。これらは然し、多念義と謂つて法然上人直傳の念佛とは可成り離れた念佛であつた。松葉ヶ谷の日蓮にはこの流義の念佛が餘程邪魔になつたと見えて、再々これに言ひ及んでゐる。この他に同じく宗祖のお弟子である覺明房長西の門下の道教や同じ系統の眞阿などが、諸行本願義といふこれも宗祖の相傳の念佛から見れば異流となる念佛を弘めてゐた。法然門下の一人なる親鸞は宗祖滅後六年目には、早くも常陸國稻田へ來て草庵を結んで他力本願の教を高唱して十年餘もその邊を化益してゐた。記主禪師が下總へ來られた頃には念佛の聲は田畑にも海邊にも、至る所に聞かれたであらう。一口に念佛宗と言つても、このやうに種々様々な念佛が、關東一帯に雜然と流行してゐた。これが禪師が下總へ來錫された頃までの鎌倉を中心とする關東の事情である。關菊美を競ふといふか、念佛・禪・唱題の各派は、何れも活潑に教線を展開してそこへ眞佛教の戰士を送る。眼も縊なる思想の展開、何物をも溶かす信火の燃焼、眞鍮な捨身な說法、「提唱」が「摧邪」に迫はれ又これを追ふ。思想には思想で、信仰には信仰で——。これが「鎌倉佛教」の喜ばしい相であつた。

この喧騒にも近い宗教隆盛の地から遠からぬ下總に留錫して居られた禪師の動靜はどうであつたか。其の後殆んど十年間は下總を中心に

教化が續けられた。この地方は、曾て宗祖に歸依して宗祖の御遺骸を嵯峨に移す時「法衣のうへに兵杖を帶して」御供に參じたといふ千葉六郎大夫入道胤頼の一族の勢力範圍で、從つて禪師の徳望を慕つて外護する者が多かつたのである。禪師は或は小堀の淨福寺に於いて「淨土大意鈔」を述作し、或は鍋木に移つて「選擇傳弘決疑鈔」を書き、或は福岡に往きて觀經定善義の講席を開いた。席を移し、講を改めてこの十年間の研究、著述、攻究は誠に夥しい數に上る。その何れもが、淨土教の本旨を闡明して坊間に入り傳へられるところの、宗祖上人の本義を隨すが如き異義邪説を一排せんとするにあつた。論既に還曆に近からんとして、正法傳持の爲のこの奮闘、この精勵には誠に涙を催すものがある。歳末年始の繁忙と休養の期節も一向お構ひなしに「定善義」の講義は進められたといふことである。正統教義の體系化、組織づけは全く禪師の學的努力の賜であつた。

下總の地は恐らくは禪師が生涯の依所とせられるつもりであつたらうが、生來の潔癖からか外護者たる小栗族達との間に面白からぬ問題を生じたので、この地も遂に禪師に見捨てられるやうな事になつた。

一切合財を駄馬數頭に積んで、幾人かの僧形の旅人が馬の轡を取つて、この地を去つてゆく行列は誠に異様であつた。「良忠上人傳」の記者は「道路の人怪しみ之を見る」と書いてゐる。鎌倉に行き着いても、豫め定めた頼る所とてなかつたので、大佛殿の淨光聖を頼つて離く佐介ヶ谷に小庵を草する事ができた。

これが鎌倉光明寺の淵源である。食事も充分ではなかつた。弟子達は鎌倉の町へ出て小屋掛けをして、何か商賣を始めて、それによつて生活を支えたといふことであるから、その眞誠さも想像に難くないであらう。禪師の御年既に六十歳、誠に痛い限りである。しかも外には諸宗錫を削る布陣があつた。然しこの中であつて、禪師は蕭々と正法の宣揚に努められた。「徹選擇鈔」「淨土宗要集隱書」「觀經疏略鈔」「往生論註記」など多數の典籍が次ぎ次ぎに撰述された。その間には、武藏國箕田に留錫して一寺を草し、講席を開かれた事さへある。

建治二年門下の慈心と禮阿とは七十八歳の禪師に特請して上洛を願つた。この請を入れて禪師は遁るばると東海道の旅を續けて再び京洛の地に入つたのである。其の頃鎌倉では弘安の役の立役者北條時宗が執權として天下に號令し、元の使者は九州博多で斬られてゐる。「國職來る」の不安に人心は騒然としてゐた。禪師は禁裡に召されて、後深草上皇に圓頓戒を授け奉り、淨土教の奥義を講説申し上げたと傳へられてゐる。

京都滞留十一年、弘安九年鎌倉に歸る。翌年七月六日、大往生を遂げられたのである。世壽八十九歳。

享け難き生を人界に享け、稱名の不斷相續の間に、その悉くを修學に傳達に巡化に著述に捧げられた有難き御一生であつた。

禪師六百五十年の御遠忌に際し、この一篇を賣前に焚く粗香に代へる。合掌



伊勢路に於ける

主記禪師

岸 覺 勇

頃で、五十歳の時であつた。

二祖鎮西上人から法を嗣いでから十年許

りの間、石藝二州に念佛を弘めて居られた

が、愈々關東の地に下向せんとして、伊勢路

に入られ、伊勢大廟に參籠して、念佛弘通の

大願を祈り、神勅を得て四足八鳥觀音寺

(今六呂見に作る)に入られたのである。

此寺は天台宗寺門派に屬してゐたが、禪師

が入つて念佛を勸化せらるゝや、僧俗共に其

の教化に浴して淨土宗に改め、禪師を推し

て開山とした。

禪師は主として在家の勸化に力を注ぎ、

聲明念佛を口授せられた。此の念佛は七百

年後の今日も猶傳はつて居て、初盆精靈を出

した在家の人々によつて、お盆に唱へらるゝ

ことになつてゐる。

二、禪師の像

又禪師の勸化に浴した四足八鳥の村人達

は大に其の恩徳を感謝し、永く禪師の溫容を

傳へんと、佛師を招きて禪師の像を刻し、お

厨子に入れて觀音寺に奉安した。其後毎歲お

盆に聲明念佛を唱へる時、開扉して溫容に

接する例になつてゐる。

嘗て筆者は此の像の鑑定を文部省宗教局

囑托、大正大學美術學教授たる脇本樂之軒

一、伊勢路へ

禪師が伊勢路に入られたのは寶治二年夏の

淨土宗第三祖記主禪師が伊勢地方を巡錫して念佛を勸化せられたことは餘り世間に知られてゐない事であるけれども、全く相違のない事實で、今日も猶明かな證據を有するので、禪師の六百五十年の大遠忌を迎ふるに當り、本紙を藉りて廣く皆様に御紹介いたし度いと思ひます。(寫眞は十念寺の開山鑿阿彌の僧形)

氏に乞ふた處、鎌倉時代に成りし優秀なる作品であると語られた。又觀音寺には禪師のお墓があつて、代々其の寺の徒弟が剃髪した時、其の髪を埋める風習がある。

三、四人の阿彌

又其の時禪師の勸化に浴した在家衆の中で、特に阿彌號を許されたものが四人あつた。觀阿彌、道阿彌、專阿彌、譽阿彌が其れである。此の中、觀阿彌と道阿彌とは、永く其の村に止つて禪師の念佛を傳へ、今も其の子孫が残つてゐる。

觀阿彌の後は八島氏と稱し、世々其の村の年寄役を勤め、現戸主治一氏は關西大學の教授である。

道阿彌の裔は清水氏を名のり、代々農業を奉じ、現戸主勘次郎氏も農事に急しんでゐる。今や八島、清水の兩家とも愛山護法の念厚く、總本山特別信徒に列せられてゐる。

次に專阿彌は日永に兩聖寺を開きて開基となつた。

兩聖寺の名は記主禪師と專阿彌の兩聖人の建つる寺といふ意味から來てゐると云ふことである。

最後に譽阿彌は今の桑名の十念寺を開いた人である。譽阿彌は觀音寺に於て禪師より念佛を受けたる後、自分の故郷の田光村に歸り、自己の草庵を改めてお寺となし、佛光山九品院十念寺と名づけた。

其の寺名に就ては次の様な奇しき因縁が傳はつてゐる。

禪師が愈々關東に下向せんとせられた時、田光村なる譽阿彌の草庵に立寄り、數日滞在せられたが、御出發期が迫るや譽阿彌は名残を惜しみ

「來世には必ず九品のお淨土で再會いたし度うございます。又此れから毎朝寅の刻に東に向つて合掌いたしますから、どうぞお十念を授けて下さい」

とお願して、涙の中に袂を分つたが、其後譽阿彌が毎朝寅の刻に東方に向つて合掌すると、不思議や白光が飛來して一聲毎に譽

阿彌の口に入つたので、建てたお寺の名を佛光山十念寺と名づけ、又九品の再會を約した處から九品院と號したのだといふのである。この譽阿彌は弘安二年十二月十五日遂に其の寺に寂した。之れ禪師の入寂に先つくと八年である。此の田光の十念寺は其後文明年中、桑名の御本丸の邊に移り、尋いで天正年中今の地に轉じた。之れ桑名の十念寺である。此の寺には今も猶開山譽阿彌の僧形像を傳へてゐる。又田光の十念寺址にこの譽阿彌の遺跡を記念せんものと一庵が結ばれた。之れが田光の九品寺である。

以上が伊勢路に於ける記主禪師の大體の足跡であるが、其の在勢期間が僅かなのに比して教化の實績の偉大なるに驚歎の外はないのである。

最新刊

近代思想の先驅者

(ルツター・デカルト・ルソー)

人間學とは何ぞや

(シェーラーの人間學)

四六版三三〇頁 價一圓二十錢

東京神田同文館

鎮西の洪鐘

江上秀静

中島松二

繪



(上)

筑前、筑後の平野は東が豊後、北が筑前、西が肥前、南が筑後の連山に囲まれて居る。この筑紫平原の眺めをひとり恣まゝにして居るのが南、筑後連山の半程に構えた「發心城」の展望である。

戦國時代の武張つた中に「發心城」の名前は異様の感を懷かしめるのも道理、この城は舊は「武井城」と云ひ、吉木の山腹に在つたのを後に東に移して「發心城」と改名したものである。通稱は「草野城」と云ひ、城主草野太郎一門が筑後の國を司宰する根據であり、城主太郎が歸依の鎮西上人が命名されたものである。

草野太郎發心して「永阿彌陀佛」妻はまた「作阿彌陀佛」と云ひ、念佛日課の夫妻であれば、城中一門も上の行ずるところ下また之に例ひて、月々定つた別時には城の廣間には大念佛の法會が催されて山々に、谷々に反響したことであつた。

時は嘉祿三年の冬十月に入つて、お城ではいつもの念佛會の修行せられる日とはなつたが、このときには折悪しく鎮西上人は少しご病氣とのことでお出でがないとの通知、平生あんなにお達者な上人がどうしたお痛みかと、城主永阿は氣遣うて更に使を立てゝ伺はせると、たいたお痛みでもないが、この頃お食事がお進みにならないから、弟子共が案じて靜かにご養生をお勧め申上げて居る、とのことであつた。

もうお上人も七十六歳の冬を迎へられたのだ。もしもこの期から往生のお支度を遊ばすのではないかと、永阿と、作阿とは淋しくもお噂申上げて居ると、お上人の名代として今日の別時會には聖護房が見えた。聖護房は同じ草野家の一門であり、小山田の里に住居して弓矢持つ身ではあつたが、父の信心からして中途より鎮西上人の門下に投じて出家し、上人給仕第一の御房であつた。

發心城の西窓から眺めると少し南手に當つて有明の海が見える。西光の輝くところ水に反映する金線銀線の、空に照り返しては黄金に、紫に、赤の色雲と流れる。わけて金色の雲の深味にこそ阿彌陀世尊在しますと合掌する眸には、ハラ／＼と蓮華のヒラリ、花瓣ヒラリと舞ひ落つるかと思ゆる。

流れ来る薫香のかぐはしさ、恍惚と歡喜の湧くとき、昔戰場で見た入日は勇士の榮光とも、敗殘の血とも哀れに想ひ出されるのに、今日の城主はまさしく發心者、道心者が國を治め、心を治める堅固さであつた。

念佛の一時、冬の日には早くもかげりそめるに、今日は聖護房が法會の後を、久々での物語り、一座は主従、親族、朋輩でありし俗縁のつながりに、心をきなき齋の席である。

「何歳に成つても故郷は戀しいものと見えて、今日はお師匠さまから草野へ行つておいでと申されたときは、吾ながら軽い、勇んだ返事を申上げました。お城へ上つて皆様とお念佛申して居ますと、ほん

とに皆様のお心が以前にも増して強く、固まつて居るのに驚きました。お念佛申すと阿彌陀佛のお力によつてお互の心が清く、明るく正しくなる。皆が心を合せて暮すことが出来る。同じ勇み心に皆の暮しが進むことはお互の社會に佛さまのお力が加へられて幸福になることである。それ故念佛申すことがそのまゝの幸福である。力である。かうお師匠の上人が仰しやつたお言葉が聖護房にはありがたく領納されます。

お信心の無かつた昔の皆さまと、信仰のある今の皆様と、いざ戦争となつた時の皆様の力はどんな較べ合せになりますか。殊に正邪善惡に就て判斷が出来て、即座に正と善とに進んで行かれるのは全くお念佛の力でございます。聖護房も仕合せ者、皆さまも仕合せ者お師匠上人のお念佛でほんとにこの鎮西の土地は救はれました。魅へりました。ところが皆さん、たつた一つ氣にかゝるのはあの「源次郎」のことです。今日もちやうど小山田口へ上りかゝりますと、櫓の木の間方に倚りかゝつて、ふら／＼になつて今にも倒れそうです。

「おい、こら、そこを通るのは誰れか。おい布衣人坊主！ なんだお念佛なんか唱へやがつて、お念佛がなんだ。おら大きらひだ。お念佛申すと極樂へ行くんだつて、馬鹿にしてやがら、念佛して誰れがいい氣持になるもんか。酒だよ。お酒さんだよ。酒のめばだ！ 酒のめばい、氣持になるんだい。馬鹿だな。おや！ おめえさん聖護

房さんぢやねえか。何處へ行くんですつて？ お城でまた木魚ぼくぼくでせう。だいたいお殿さまがあきれるよ。何處へ行つたつてお武家が木魚叩くなんか決していゝ格好ぢやありやしないよ。

「源次郎どの、お前はお念佛は嫌ひでも、私はお念佛が好きで仕方がないんだよ。私も子供の時は源次郎は酒呑みだ、源次郎はどうしてあんなにお酒飲むのかしらと氣になつたものだつたが、お師匠さんからお念佛を教へて頂いてから、お前源次郎が阿彌陀さまそのままのお姿に見えるのだよ。源次郎、もしか暇があつたら善導寺へお参りして私のお師匠さまのお十念をお受けなさい。そうするとお酒がもつと甘くなるよ。」

「何云つてなさるよ。お城ではお待ち兼ねだ。俺お念佛大嫌ひですよ。」

鐘西さまのお十念！ へん馬鹿々々しい。人を子供扱ひして、へん。

「斯う云ふ調子です。お國の人はみんなお念佛を喜んで居るのに、たつた一人あの源次郎がお念佛申さぬのはどうしたことか。それに彼は私たち草野家の下郎です。どうかして源次郎が心を入れかへてくれたらと、私いつもその事が氣になります。」

「源次郎も悪人ではありませんが、でも彼の強情さと云つたら、他人が西と云へば東、善と云へば悪、右と云へば左、なんとも始末につかぬ男です。そして酒を呑んでは他人の軒先であらうが、畑の中であらうが、多人数寄合ひの中であらうが、もう場所構はず酔うては寝そべるのです。他人が何とか云へばすぐに打つの、殴るのと云ふ

痴れものです。あんなのが撥無因果と云ふのでせうか。全く佛縁に漏れた哀れな悪人です」

「いかなお殿様のお力でも心の無信心は何とも致しかたがありません」

念佛する人は他人を勧めたいと思ふ。

お城は夕昏れる。時に一泊するのも如何と皆から歡待されるけれど聖護房は師匠給仕の役を他人に譲らぬ人である。夕昏れ山道を下り、柿や、櫨の落葉を踏みながら善導寺へと歸られる。

(下)

年は明けて翌年の春のこと。

草野町西向寺の持願房はこの頃はずつと善導寺に詰め切りで、自坊はいつも不在であつた。表から入つて來た源次郎がいつもの調子で、

「おい誰も居ねえかよ。持願房さまはどこへ行かしやつた。お勝手には酒はねえかよ。おい、誰も居ねえ。畜生！ 小僧共隠れやがつたな。誰も居ねえな。そんなら源次郎様はお歸りだぞ、こんどは裏口からこのまゝお歸りだ。」

よろめく足で裏口から墓場の方へ、そして竹藪の横を通り抜けた源次郎は石塊の多い畑道に出たが、ちよつとしたはづみに小石に躓いてバツタリと麥畑へ倒れた。口で二言三言つぶやいて居たが、その儘グウ／＼高鼻をかいて寝入つてしまった。



八
松
三
郎

源次郎が夢は斯うであつた。

彼が寝て居る處から善導寺の森はよく見え
た。今日は何日もと異つて、森の上に紫の
雲が動かずに棚引いて居る。そしてそこら一
帯が何日もと異つた明るさである。不思議な
こと、思つて見て居る内に段々と人々の聲も
聞える。念佛の聲も聞える。鉦の音を聞える。
床しい香りも匂ふ。不思議に思ひながらその
側へ歩いて行くと、大衆の出家と、俗人と入
り混つて盛んに念佛して居る。佛前には香華
燈明供物が供へられてある。

と見上ぐると虚空急に明るく、雲中より三
尊の佛が現はれて段々と大衆の上に近づかれ
やがて又紫雲に乗つて西の方へ去られる。眞
中の佛は阿彌陀佛であらうし、左が觀世音菩
薩か、右は勢至菩薩か——源次郎は一心に見
つめる。觀世音菩薩の兩手にて抱かせ給ふ觀
音に一人の法師が坐してあり、よく見れば——
なんとそれは聖光房鎮西上人そのお方であ
る。手には水晶瓶の經卷を持つて佛後に從つ
て往かれる。

——さて／＼これは鎮西上人ご往生の前兆であるかも知れぬ。それにしても源次郎は生れて始めて尊い夢を見たものである。夢醒めて見れば自分の體は草野町の西向寺の（今の専念寺）、俗に云ふ寺尻の畑の中に横つてゐる。酒の酔は全く醒めて源次郎の過去は六十年の彼方に死骸と成つて横つて居る感じがする。彼は生れて始めて清々しい心に甦つた。

ちやうど閏二月廿九日のほの暖かい正午の太陽が彼の全身を照らし初めて、云ひ知れぬ慈愛の光を投げかけて居る。

「そうだ。早く行かう」とひとり言云うて立上つた。走つて善導寺へ行つて見ると、全山を響かす念佛の聲がする。出家も俗も口々に念佛唱へて居る。それで居て何となう一面に漲る静寂の感じに、源次郎だけは静かきから追ひ置けられ迫められる。眼に見えぬ鞭の影を感じる。

「聖護房さまに遇はして下さい。聖護房さまをお喚びして下さい！」

「静かに、静かに！ おッ！ 草野の源次郎ではないか。今日はそんなの来る日ではない。早く返りなさい。」

「いや／＼聖護房さまにお話せねばならぬ大事なことがあります、どうぞ會はせて下さい。」

「聖護房さまはお師匠様から一ト時もお離れにならないのだ。お師匠さまのご臨終が近づいて見えるのだ。無理言はずとお歸りなさい」

「あゝ氣がせく、聖護房さまにお願して一ト目お上人さまが拜みたいのだ。どうぞお願です」

善導寺の佛殿では袈裟法衣に威儀を端正された鎮西上人が、お心靜かに——併しながらいとも嚴肅に念佛を續けられる。

南無至心歸命禮——西方阿彌陀佛——

既に世のお言葉なく、右手微かに舉げられたとき、ハツと胸をついて思ひ出したのは聖護房であつた。そうだ。いつぞや仰しやつたお經——一字三禮の御自筆の阿彌陀經、あれは予が臨終の時廻らば手に握らせて呉れと仰しやつた。あのお經を今お求めになるのではないかと——人の第六感と云はるか。思ひ出してお經を取りに下ると、今しも源次郎が——聖護房さまに會はせて下さいと大聲で喚いて居る時であつた。

「聖護房さま、私は佛さまのお救ひで、こんな悪人でも鎮西上人のご臨終をお知らせして頂きました。お念佛を誂つた私をお助け頂きましたに一目なりとお上人様をご臨終前に拜ませて頂きました。ありがとうございます。どうかお上人様のお十念を頂かせて下さいまし。」

聖護房は黙して彼を佛殿に連れて入つた。聖護房は御自筆のお經をお渡すると、鎮西上人は受取つて母指の間に挟んでをし頂かれる。

そしてまたも微音のお念佛が續く。

聖護房は外陣に踞くまつて泣いて居る源次郎の姿をちらと見られた。源次郎は合掌して一心に念佛して居る。彼の肩は震へ、彼の眸は敬虔に輝いた。

「あの夢に見た觀世音菩薩の蓮臺に坐して見えた出家は、今眼の前に



記主禪師

明鏡の夢

太政大臣藤原師實六世の孫、圓尊の妻伴氏は、或る夜不思議な夢を見て懷妊した。

それは、端麗な一貴女、その面容巍然たる、警へやうもなく神々しい貴女が手に光り輝く明鏡を以て

『此の鏡をそなたに差上げやう』と云つた。

『そのやうな重寶を、勿體なり御座います。』

伴氏はこれを辭して受けなかつた。あまりに高々しい貴女の姿に、何にかしら物恐ろしい思ひがしたからである。

『いや／＼、重寶なればこそ、そなたに上げるのぢや。決して遠慮してはならぬ。』そう云はれて、伴氏は恐る／＼推し戴いて懷に納めた。……と目を覺ました。

圓尊は妻の懷妊と共にこの話を聞いて

『これぞ、その昔惠心先德が夢の告げによつて托胎遊ばされたにも似て、此の上ない目出たいことじや、必ずその子は佛法の明師ともならう。』

と非常に喜び、生れ出する日を指折り數えて待つのであつた。月みちてお生れになつたのが、後の記主禪師であつた。

見る聖光上人さまその儘のお姿である。今聖護房の持參されたお經もそのまゝ、きらめく水晶の軸もそのまゝである。あゝありがたい。あの夢は正夢であつた。源次郎といふ一番の悪人でさへお見捨遊ばさぬ佛様のお慈悲に違ひない。

源次郎はお上人様のお唇の邊を拜しては一心にお念佛を合はせた。

光明遍照十方世界……佛殿は世界一ばいに廣がつたと思へた刹那、大光明と、靜肅との合致を見たとき、お上人は靜かに横に眠られた。生とも、死とも、死とも生ともつかず、力に充ちた喜びを漂はせて居られる。

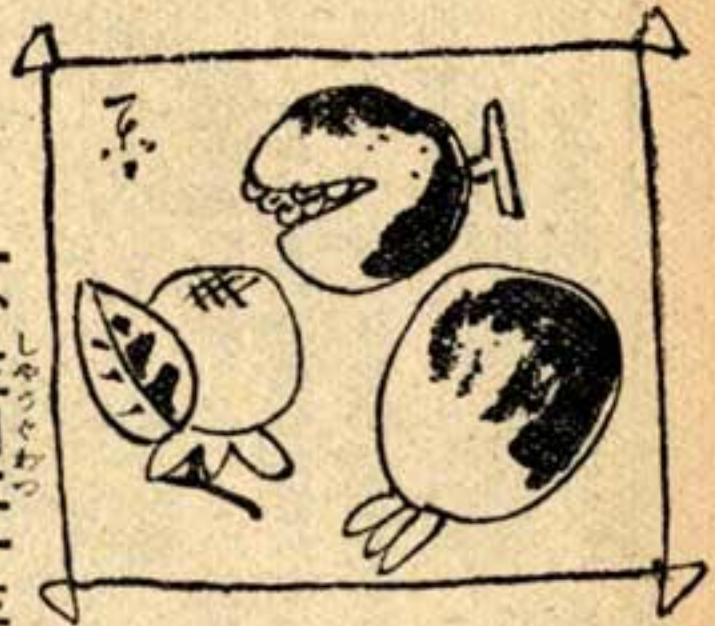
弟子たちはハツト感じた刹那、身動きもならずたゞ念佛するばかりであつた。

聖護房がちらと外陣の源次郎を見返られると同時に、源次郎は起つて佛殿の正面から駆け下りた。彼は跣足のまゝ走つた。

鐘樓に登つた源次郎が一揺れ揺つてついた鐘がゴーンとお山を震はしたとき、彼は思はず大聲あげてわつと泣いた。

大惡人源次郎が最後の一ト突き、それは大善人源次郎が最初の一ト突きであつた。二つ、三つ、鐘は鳴る。

鐘西の洪鐘は鳴つた。そして餘韻は七百年後の今に響く――。



大谷の庵

勢觀房源智上人のこと……

井川定慶

一、正月二十三日

今日は正月二十三日である。洛東知恩院の晨朝の會座に列つて
大衆と共に元祖大師御法語集前篇第二十三を拜讀した。

モロコシ我朝ニ、モロ／＼ノ智者達ノ沙汰ヲ申サル、觀念ノ念
ニモアラズ。又學問ヲシテ念ノコ、ロヲサトリテ、申ス念佛ニ
モアラズ。タゞ往生極樂ノタメニハ、南無阿彌陀佛ト申シテ疑
ナク、往生スルゾトオモヒトリテ申ス外ニハ、別ノ子細候ハズ。
タゞシ三心四修ト申スコトノ候ハ、皆決定シテ南無阿彌陀佛ニ
テ、往生スルゾトオモフウチニコモリ候ナリ。コノ外ニ奥フ
カキコトヲ存ゼバ、二尊ノアハレミニハヅレ、本願ニモレ候
ベシ。念佛ヲ信ゼン人ハ、タトヒ一代ノ法ヲヨクヨク學ストモ、
一文不知ノ愚鈍ノ身ニナシテ、尼入道ノ無智ノトモガラニ同
シテ、智者ノフルマヒヲセズシテ、タゞ一向ニ念佛スベシ。

爲證以兩手印

淨土宗ノ安心起行、コノ一紙ニ至極セリ。源空ガ所存、此外ニ
全ク別義ヲ存ゼズ。滅後ノ邪義ヲ、フセガンガタメニ、所存ヲ
シルシ畢ヌ。

建曆二年正月二十三日

(大師在御判)

これは申すまでもなく法然上人の御遺訓『一枚起請文』である。
いつも讀みならし聞き古した御法語ではあるが、この靈讀で元祖
法然上人の御影前で拜讀してゐるといつも心で讀むやうになり、
そしてお祖師様から親しく讀んで聞かせて頂いてゐるやうな心境
に誘はれて行く。

うす闇に彼の大きな御堂の中で祖師の御影前にあつてさへ他所
とは變つた靈感到れるのであるから、これが若し祖師上人の存
命中にあの溫客に接して、間近にあつて、この文句をゆる／＼と
讀み聞かせられたなら、どれほど感激するであらうか。全く五臟

六腑に泌み渡つて法悦の感も極まることであらう。
元祖法然上人には澤山のお弟子があつた。その中で、この一枚起請文を認めてゆるくと讀み聞かせて貰いたのは勢觀房源智上人だけである。其れは建暦二年正月廿三日であつた。



寫眞説明

南中の法然上人を見舞ひ給ふ貴婦人(右上)と貴婦人歸還の御車を見送り給ふ勢觀上人(左)

二、陽
春三月
今年ほど
うしたこと
か寒中とい
ふのに京洛
の一月二十
三日はさほ
ど寒くはな
い。梅の花
がほころび
初てゐる。

然し建暦二年の正月二十三日は勿論舊曆であるから太陽曆に換算すると三月五日に相當する。今年も亦三月五日であることも奇縁である。梅の花も十二分に開き、鴨川堤に枝垂れてゐる柳が芽を吹いてよい。芝草も緑を増して来る賀茂の里に茂つてゐる日蔭の葛も一層瑞らかに見える頃である。水も温み春らしくなる時でもある。勢觀房源智上人が法然上人から一枚起請文を貰いたのはかやうな時節と想察してほしい。今年に恰度一枚起請文の書き記されたといふ三月五日の次の日から十二日まで、源智上人を追慕する七百年の大遠忌がその靈蹟での知恩院嚴修されやうとしてゐるのである。

源智上人がなくなられたのは暦仁元年の冬十二月十二日賀茂の神宮堂で五十六歳を一期とせられてゐる。これは今から七百年前であり法然上人の滅後二十七年目に當つてゐる。

三、知恩教院

今日でこそ、淨土宗總本山知恩院といへば、誰しもあの「驚張」の廊下のある、あの一萬八千貫の大鐘、七萬三千坪の地域に百有餘宇を擁して景勝の地を占めてゐる堂々たる名利を想ひ起すであらうし、京都を知る程のものは日本は愚か海外のものに迄、知れ渡つてゐる。而かも學者達はまた別な意味で知恩院を訪れ憧れの聖地としてゐる。即ち世にも珍らしい古寫經の數多く所藏せら

れてゐることや、宋版大藏經、勅修法然上人行狀繪圖四十八卷などがあるからである。

ところでこの知恩院を確立したのが勢觀房源智上人である。或は事實上の創建者ともいひ得る。法然上人の御在世に於ける大谷の禪房といふのは實にさゝやかなものであつた。それさへも法然上人の滅後に至つて、念佛の興行を嫉む人々の暴舉に遭遇してからは荒廢に歸して終つたのである。然るに文暦元年（法然上人滅後二十五年）になつて其等の物情のおさまるを見定めて勢觀房は勇を鼓して大谷の庵室を復興し、其の東に隣る崖上の墳塋を修築して護持してゐた遺骨を納めて、輪奐の美を整へたのである。かゝる師恩を念ふ奇特の心掛けと聖業の完成とが天聽に達したものでらしい。四條天皇はこの地に行幸遊ばしてこゝを勸願所と定め給ひ、畏くも「華頂山」「知恩教院」「大谷寺」の勅額三面を賜ふことになつた。これは勢觀房源智の光榮ではない。淨土宗門全般の拜戴する恩寵であり、知恩院といふものの伸展し行くにとつては、無上の御沙汰であつた。爾來四ヶ年、勢觀房は示寂迄聖恩に感激し乍ら夜を日についで師恩報答の誠を致さんとこの大谷の禪房の基礎を固め興隆を計ることに力めて次の住持本佛房道宗に傳へたものである。

四、平家の公達

法然上人の數ある門弟はをちこちに四散して各々其の地で念佛の法門を弘通してゐたのである。勢觀房のみはどうしてもこの大谷の舊庵を離れて行く氣にはなれなかつた。勢觀房にとつては、この邊りは忘れることの出来ぬ想ひ出多い地であつたから。

壽永二年といへば木曾義仲が京洛に亂入して來て平家の一門を西國に追ひやつた年である。このあはたゞしい中にあつて勢觀房は小松の内府重盛の孫として備中守師盛朝臣の公達として産ぶ聲を上げたのである。父はこの子を抱き上げる暇もあらばこそ、追手にせかれて西海に落ち一の谷の戰で悲惨な最期を遂げてゐる。母なる人は平家没落の後には唯だ一子を育て上げんの一心で一杯であつた。世間を憫り人眼を忍んでやつと十三歳までにしたが、いつ／＼までも源氏の目をかすめて生涯を通すわけにも行くまい。そこで思ひついたのは大徳の法衣の袖に隠すことであつた。其の頃洛中で最も人望のあつたのは法然房源空上人である。もと／＼庶民教化のために立てられた淨土の法門が今では宮廷にまで法薙が張られるといふ有様。建久元年には關白九條兼實公が授戒する、同三年には後白河法皇の善知識、越えて建久六年には奈良東大寺が落慶して一層面目を施されるといふ有様である。いとしい勢觀房を抱き惱める母親は意を決して法然房の庵室を訪れて事情を述べて救ひを求めたのである。

五、吉水の庵室

其の時、法然上人は吉水の庵室においでになつた。吉水の庵といふのは東山祇園神社の北東栗田青蓮院門跡の南隣にあつた。つまり今の知恩院の本堂（御影堂）のあるあたりに當るのである。慈愛の籠つた口調で法然上人は其の子を托されることを快諾された。源空の弟子といふところから名を源智と改められた。ところが、庵室の北隣りなる栗田青蓮院には法然上人に歸仰せられてゐる、關白九條兼實公の肉弟である慈圓和尚が門跡であらせられた。この門跡は學德兼備で兄の威光も加はり度々天台座主にも上るほどの權威ある高僧であつた。世を忙しく渡つて來たこの平家の公達、そして何時も源氏の眼を恐れおびえてゐるこの弱弱しいとしい子を、一度はこの高僧慈圓僧正に付托するのにも後の爲めと思召しけん、事情を述べて一時は慈圓僧正にあづけられたが、間もなく呼び返して座右に侍らしめられたのである。爾來法然上人の形に影の添ふ如く、御往生に至るまで十八ヶ年間勢觀房源智は常隨給仕せられることになつたのである。

慕はれればまた慕はしいのが人情である。法然上人と勢觀房との氣脈は全く相通じて全く親子のやうであつたらしい。

六、夜半の嵐

月にむら雲花には嵐、有爲轉變の世の中である。三朝の戒師とまで一般から崇められた法然上人が讒言によつて弟子の不都合に連座して七十五歳の老體で遂に四國に御配流になつた。此れは誠に痛はしいことであつた。けれども無實の罪であつて即年に勅免はあつたが、暫時攝津の勝尾寺に滞在して七十九歳といふ建暦元年の冬に京洛に歸入せられることになつた。不在四ヶ年の間に、先きに住まはれてゐた吉水の庵室は荒れてゐた。其の時にあたり栗田の慈圓僧正（慈鎮和尚）は己が住する青蓮院の一部なる南禪院といふ華頂山麓の一字を提供してそこに法然上人を迎へられることになつた。群參のともがらその夜の中に一千餘人に及んだと勅修御傳には記してゐる。そこに大谷池があつたところからこの住房を「大谷の禪房」とも「大谷の庵室」とも呼びなすことになつてゐたらしい。

其の年も暮れて建暦二年のお正月を大谷の庵で迎へらる。然るに二日から老病の床に就き起居御自由の中にも稱名の聲は打ちつづいた。日頃教化を蒙れる道俗は「これ今生のお別れ」と次から次へ訪れて來る。その中に車よりおりて法然上人に面會に來て暫時の法談あつて歸られた貴女がある。勢觀房が其の車を見送つて行くに鴨の河原を北にかき消されたといふ。そこで勢觀房はあとにて法然上人に「あの客人の貴女は誰人に在します」とお尋ねしたところ「あれこそ葦提希夫人よ、賀茂の邊におはしますなり」

とお答へになつたといふ。

客人が殊の外貴品を備へて居り、車が掻き滑されたこと、上人のお答へが「賀茂の韋提希夫人」と仰せられたことなど思ひ合せて勢觀房は不思議に感ぜられたらしい。賀茂明神の御化身にはあらざるかと想察せられつゝ強ひて問ひ反されなかつたらしい。

七、賀茂の禪房

正月廿三日に病篤き上人より一宗の安心起行をまとめ記された「一枚起情文」を頂いた勢觀房は、更に本尊、道具、房舎、聖教等のすべてを譲りうけたのである。二十五日午の正中に法然上人は光明遍照の文を誦して入滅あらせられた。(これは陽曆三月七日に相當する。)

門弟たちは大谷の庵の崖上に葬り、七々日の追善供養を交互に執行したことは世の常の如くである。大谷の房舎を全部譲與せられた勢觀房がこれを護持したことは申すまでもない。ところが北嶺の山法師の中には法然上人の念佛の日に／＼榮え行くことを嫉視し遺骸に辱しめを加へんと企ててゐる風聞が荐りであつた。やがて其の日は來た。廟堂破却せられんとする一步前に、源智の畢世の心盡しと法然門下の宇都宮彌三郎を始め其他多數の助勢によつて事無きを得たが、いつ又再び襲撃するやも計られず、より／＼協議して遺骸を掘りおこし洛西に移し更に粟生にて荼毘して門弟

達に遺骨を分ち四散したのである。正信房湛空は嵯峨に、明遍は高野山に、法蓮房信空は北白川なる新黒谷に、而して勢觀房は賀茂に身をひそめられることになつたのである。

勢觀房は法然上人御往生直前に感見した、あの「賀茂の韋提希夫人」の不思議がどうも頭を離れない。また賀茂の社域は守護不入の地であつて源氏といへども權力をあらはせない安全地帯であつたのである。こゝには比叡の山徒といへども脅かしはせまいと考へられたのであらう。「賀茂の社域近く居をしめて、つねに參詣をなんせられける」(勅修御傳卷四十五)といふ有様であつた。

それにしても勢觀房は命の恩人であり心の救済者といふよりも身も心も抱きはぐまれた師の坊宗祖のことは片時も忘れられなかつた。時を見、折を窺つて報恩の赤誠を表はしたいといふ念願で一杯であつた。遂に宗祖法然上人二十三回忌の文曆元年、世相のおさまりたるを見定めて大谷の庵室を再興し、遺骨をもとの噴堊の地に納めて廟堂を立て落慶供養も目出度く済ませ、畏くも四條天皇の行幸を仰ぐことゝなつたのである。

淨土宗の法門を繼いだ門弟は多くあつた。然し法然上人の住房「大谷の庵」をうけつぎ知恩院の基礎を固められた勢觀房源智上人の偉徳こそは忘れることができない。そののみでない「一枚起情文」といふあの簡潔な御法語を傳へて下さつたことをも。

(昭和十二年一月二十三日、知恩院史編纂所にて謹誌)



金儲けとも一致した

谷孫六さんの信仰

戸松學瑛

谷孫六、「これは私の祖父の名であつて、祖先崇拜の意圖に出たものです」と註釋つけて成程ねと理解が出来た事程一風變つたベーンネームで知られた谷孫六さんの本名はナント矢野正世と云ふのであつて、岡辰押切帳以來立身、成功、修養、致富、利殖、蓄財、惱みの解決等々、口も八丁手も八丁、一寸他の追隨を許さぬ孫六さん、矢野正世さんは去る十一月十七日に亡くなられた。

孫六の名で日本を儲けさせ

と山雨樓主人が追悼の川柳を手向けられたが私は、先づ「江戸ものの生れ損ひ金を蓄め」

や「武士は食はねど」組であるので孫六式「金錢教育」から見られると聊か外道であつたかも知れぬ。それにも拘はらずこゝに先生の事を少々吹聴するのは先生が嘗て雑誌「淨土」に投稿せられた因縁と今一つは先生の宗教味を噛みしめて見たいからである。金錢教育と宗教教育、金と教、地獄の沙汰も金次第、アミダも金で光る世じやと古い浪花節の文句にもたしかあつたと思つたが、やゝともすると金と佛とはカタキの様に考へて居る經濟人もあれば又宗教人もある。富める者の天國に生るゝは駱駝を針のメドへ通すやうなもの

だ。貧は菩提の種子、富は輪廻のキヅナと耶蘇も釋迦も仰せにはなつた。然しこれは有閑婦人や、成金根性の者への眞門の一針であつて金そのものに罪があると云ふのではない。金は天下の融通もの、圓融をこそ望め、有無相通をこそ望め、單に私有視してはならぬ、保管すべきものじやとの佛教經濟法には貧乏ゆるぎもさせるものではない。さて、と本筋に戻つて孫六先生、儲けたか儲けさせたかそんな事は如何でもよい、經濟の權化のやうに世間から思はれて居つた先生にも金より大事な何物かゝあつた。



ん さ 六 孫 谷 故

「わしの信仰は働く事だ」と夫人に對して常に口癖に云つた。敢て手を合すことを得意としなかつた。働く事が信仰だとは、よい覺悟であつた。信仰や道心が佛壇の引出しや、信玄袋に入つて居ると思ふのは大間違ひで、仕事即信仰は佛意に叶つた卓見だ。自ら佛教に隨順して居る。どんな意味で手を合せなかつたのか、之も聞きたかつたがそれよりもつと奥の院にさぐりを入れたかつた。直接打つつかつて見たかつた。

して玄人跣足と云つてもよい位であつた。流石の佛教も先生にかゝつては一の材料、信仰も金錢教育の教材位にしか思つて居られなかつたのではなからうか。見るもの聞くもの材料ならざるはなしの立場から廢物を利用したり、物の價值を見直したりする事は朝めし前で、随分器用の才を働かして居られた事を承知して居る。こんな鹽梅だから生きた信仰者の見本は先づふみ子夫人であつた。手近で恰好なこの見本を炯眼な先生が見逃す筈はな

先生は若い時分から随分苦勞した人だ、文字通り寝る目も眠らず仕事に没頭し仕事道樂、經營の天才で有名だ。寸時の餘裕もなかつたらしい。それでいて、佛教に關する知識も相當豊富に持つて居られた。讀みもし聞きもし、考へもし書きも

い。ふみ子夫人が朝の看經に一枚起請文を讀み、夕の勸行に小消息を讀む、受けがたき人身を受けて、あひがたき本願にあひておこし難き道心を起して離れ難き輪廻の里を離れて、生れ難き淨土に往生せん事喜びの中の喜びなり

の一段に及ぶとペン執る手を止め、端坐して傾聴せられたさうである。これが故人が愛好し愛樂した法然上人さまの御法語でありましたと、夫人は此の頃しみじみ述懐された事である。

今一つ先生の内的反省に拍車をかけたのはたしか今年五歳になるお孫さん睦子さんの無邪氣な佛壇まわりではなからうか、ふみ子夫人朝夕の勤行に腰巾着となつて紅葉の手を合せるいたいけな姿、敏感な人でなくても相當感化されるものである。況や多血俊敏な先生に於ておや。牛に牽かれて善光寺詣りと云つた御縁になつた事は争へぬ。背負つた子供に淺瀬を教はる「孫の守明治の頃はやり唄」と得意な川柳を物した先生だけにこの孫さんの善知識振りには恐らく増上寺の大僧正程のきゝ

目はあつたらしい。今頃はお孫さんたちに教はつた淺瀬を渡つて無事に三途の川越えを微笑の裡にすませた事であらう。さすれば、目の中へ入れても痛くない程可愛がられた孫さん達も立派に御恩返しをしたと云つてよい。人間萬事この調子、何が幸となるかわからない。御本人は勿論、家人も嘸かし御満足のことと思ふ。それにつけても家庭に於ける兒童の宗教教育の忽に出来ぬ事を切實に思ふ。

先生は又本宗で有名な「二河白道」の譬喻には頗る敬服せられ殊に岩井僧正の二河白道の放送には熱心耳を傾け拍案絶讃されたものである。浮世の荒浪を渡り、貪欲の世界と瞋恚の世界とを知悉して居つた自己の経験が豊かであるだけに常人以上に深く考へさせられたものでもあらうし又これを種子に持ち前の奇想天涯の構へを一步先んじて考慮せられて居つたものであらう。その孰れか直接回答に接しなかつたのは残念な氣がする。

先生の或る時の宗教味として御紹介したいものゝ中、一つ

あるとき私の講演がおはつてから聴衆の一人がかう言つてゐるのをききました。

「このセンセイも、佛様きちがひの一人だね」
いかにも彼は、批評としてこの言を吐いたものと思ひます。愚劣な無用なものと考へてゐるあの思想を、その數言で、説明したのでせう。よし、彼の心中いかなるものがあるにせよ、私は彼の言の正しいことを、證明してやります。私はいかにも佛様きちがひの一人です。事實、宗教の力に負ふところなくして、私の経験の説明はできないのです。宗教こそ、私の生活のうち最も貴重なものです。時々、自分の信仰を、なにか悪いことでもしてゐるやうに語る人を見ます。つまり、信仰などは、教養あり、知識ある人間の最早、尊敬しなくなつた、古物でもあると考へてのことらしいのです。しかし、私の讀書した限りでは、宗教は常に、人類の主たる關心事であることを知つて居ます。高い地位に昇つた人には概ね「みほとけ」を信じてゐたことを知つて居ま

す。もし私が二途の一を選ばねばならぬものとしたら、即ち偉大な事蹟を残した人々の後塵をなすか、又は彼等の事蹟を批判するの徒に、ならふべきか、としたら私は前者の道をとります。

私の宗教信仰の理由はそれだけではありません。私にとつては信仰は他人の眞似でもなければ、他人の履んで來た道に盲修するのでもなく、生きた、働いて居る人生計畫です。私自身を除いたほかの人の生活では、宗教がどんな効能を持つてゐるかそれは私の詳かにするところではありません、といふのは、私自身以外の人の眞實については知る由もないからです。いづれにせよ、私は、私自身の場合に於ては、宗教はたしかに、私に有益なものであつたことを立證し得ました。それだけで、充分であります。ある惱める人が私に訊ねました。「あなたは佛様をお信じになりますか」「え、信ずる位ちやありません、あなたは、お信じにならないのですか」

私の答に彼はまた云ひました。

「かつては、私も深く佛様を信じました。いまもなほ、信じたいと思ふのです。しかし私の経験では、いくらお念佛を申しても、その念佛が、どこかへつゝかゝつてしまふのか、佛様の許まで届かないのですね。その證據には、未だかつて一度もおきゝ届けを頂いたことがないのです」

彼の意や、また一理あります。といふのはこの人が至極正直な人だつたのですから。勿論私にもなぜ彼のお念佛が聞き届けられなかつたのかそれをはつきり説明してやることはできません。

しかし私は、この問題について一言なかるべからずでした。

「あなたはお念佛を唱へてゐるとき何を考へておいでになりますか」

かう訊ねると彼氏の答へるには、

「私は自分の持つてゐる悩み、自分にふりかゝつた難儀、自分が蒙つてゐる痛手を考へてゐるのです」

といふのです。この言葉はすでにそれだけで、いくらお念佛を申しても御利益のないことの明白な説明です。

……………

宗教が生活上缺くべからざるものであることは、次のことを考へれば何人も認め得るところであります。即ち日々の行ひ、動機に於て反省し、その反省の上に生活すべきもの、それこそ宗教なのです。私は『悩みの日』に相談に來た幾多の人々と數知れないほど度々宗教に就ての議論をしました。彼等の或る者は至高の存在に信仰を置いてゐました。或る者は全々無信仰でした。然しそれ等のすべての人が私の記憶する限りでは皆信仰といふものを持ちたがつてゐるのです。

……………

私の宗教といふのは、

「如來様、どうぞ願ひ事が叶ひますやうに」

といふ代りに、

「如來様ありがたう御座います。私は私の今

日を有り難くくらさせて頂きます」

とかう朝起きて心から申上げることなので、感謝の心は、あらゆる、美德の中の最美なものであります。

若しあなたがあなた自身に就て、一物も感謝すべきものを持たないとしても如來様が他の人々には有り難いものであるといふ事實を感謝するやうになさい。

……………

佛書によれば如來様は老幼男女を問はず、人間の誰にも心の支配即ち衆生濟度と云ふことで人の心まで支配する事を許されてゐます。よしあなたがそれ程大規模の支配を試みようとはなさらないにしても、恐怖と自己の心だけを支配することを計りなさい而してその結果を見ることです。……

我々が未來の極樂を放れて、なし得る善事は生きて極樂の生活を送ることです。然らば極樂は何で出來てゐませうか。

慈悲、仁心、善根、忍耐、親切、正義、明智、才能、寛大、平和、歡喜なぞであります。

す。このやうな善性をもつ生活さへするならば我々はこの地上で今から直ぐに極樂に住むことが出来ます。

「遊説法」諺々として先生の説教は盡きない。地上の極樂も大に結構、大賛成です。然し百尺竿頭一步を進めて未來の極樂も只今の極樂も結局は「念佛生活」の外にないんだとわが法然上人の教への實行を手に手を携へて津浦々まで否天竺まで、あの世まで、遊説法に出かける事の出来なかつたのは終生の恨事である。今頃はあの世の極樂で金もよし極樂もよしお念佛とでも云つた恰好で例によつて破顔微笑して居る事であらう。

先生の逝去は十七日であるが十四日の晩に輸血をした。それは夫人のものであつたが先生は、ひどく氣の毒がりすまない／＼おまへのやうな信仰者の血を貰つて身も心も朗になるんだと感謝の意を示され夫人も亦み佛の心が自分の血を通して夫君の心臓へ通ふかと嬉し涙に暮れたさうだ。重態以來夫人は枕邊

にあつて念佛を申した、「もう一生懸命で生き死にを超えたお念佛が出ました、十六日夕から本人も苦しい息の下からナムアミダブツと念佛を申すやうになりました。そして本人は「我昔所造」の文を唱へ又アミダ經、觀音經などどと經題を口づさんで十念を明瞭に稱へたのには勿體なくて泣かされました。私は佛身觀、四誓偈を讀誦して臨終の正念を願ひ往生極樂を念じて居る内に丁度午前七時十五分子

息徳次郎に後を頼むとの一言を残しシツカリ合掌して命終いたしました」と夫人は念佛が平生にも臨終にも御蔭のある事を述べみ佛の來迎があつたればこそあの立派な臨終が出来たのだと悲しみの中にも法悦を感じて居られるのである。

元氣と意地と才と智とで一生を頑張つた谷孫六先生、さぞ今頃はお念佛で一步前へ／＼と押切つて居る事であらう。

家庭重寶

シミの抜き方

インクのシミ

衣類ならすぐ、牛乳の中に浸してから、石鹼で洗ふ。または、濃い鹽水で洗つた後アンモニアですゝぐ。

墨などにこぼしたら、直ぐ熱湯をかけて乾いた布で吸取り、まだ落ちなければ、牛乳に少し鹽を混ぜて洗つ

て水ですゝぐ。

煮物のシミ

水にアルコールと鹽とを少量溶いたものを軽く含ませて拭ひ、叩くやうにして霧水でぼかし、自然に乾かす。アイロンを使つてはいけな

醬油のシミ

すぐ鹽か砂糖をすり込ん で、アンモニアを滴らした

水で洗ふ。

酒のシミ

すぐ煙草の煙を澤山吹きかけて、暫く掌で押して温める。すぐ灰をかけてもいゝ。後になつたら熱湯の中に入れておいて石鹼つけて水で洗ふ。でも駄目なら鹽かレモン汁をつけて水洗ひする。



川柳浮世さまざま

(柳樽、柳樽拾遺より抜句)

代田 重雄
大羽 比羅 夫畫

代は、無邪氣で美しい。

眞の恥しさといふものを

ある。

正直の頭は神に見立てられ

嘘も方便と云ふ諺がある。

恥しさを知って女の苦の初め

人生を諷刺し皮肉った川柳の

中には、處世上啓蒙されるとこ

ろのものが澤山にある。一口に

川柳とあつさり云ふが、どうし

て小馬鹿には出来ない。立派な

人間處世の手鏡だ。思ひ當る節

があつたら、よろしく御自身の

容をこれにうつしてごらうじ。

女もまだ肩上げのとれぬ娘時

知らない。それが年頃になり、

世間を眺め、何も彼も解つて來

ると無邪氣も何も通り越して、

殊に異性などに對してそろ／＼

穢やかで無くなつて來る。今迄

の知らぬが佛の清い世界から、

そりなると寧ろ凡夫のやうにあ

れこれと煩惱の炎を燃やして來

る。恥しさを知ること、それは

結局女が苦の門に入る第一歩で



だがそれを悪用しては困る。人を欺いて悪の穴に陥れたりするやうな嘘はいけない。とかく嘘付きに仁者や善人は無い。人間正直に越したものは無い。正直を守つて進んで行けば、其處に榮達の道は自然とひらけて來る。正直の頭に神やどる——と云ふのはそこだ。

あの男この男とて古くなり
蟹といふやつは自分の甲羅に



似せて穴を掘るといふ。人間もよく自己を知つて何事も行ひたゐるものだ。世の中にはそう自分の思ひどほりの男も女もあるものではない。何かしら缺點がある。いらざる人選びをして大切な時機を逃がして、最後には自分が見向きもされなくなつてしまふ。あの男この男と力んで結婚適齢期を取逃がし、つ

まらぬ男に嫁した例はそこらにザラにある。自惚れたがる娘はよくこの川柳を味つてみるが

いふ。
木綿もの着るが悟りの這入り口

何んだ木綿の衣物などおかしくつて着られるかい、と云ふだらう。勿體ない話だ。吾々の先祖は皆そのおかしい木綿もので吾々子孫の爲めコツ／＼と働きてはして来たのだ。今時の人間は贅澤で木綿はさて置き、銘仙なんかおかしくつて、と、やれ錦紗、それ御召のと柄にも無い物を着たがる。内容の貧弱な人間ほどさうだ。錦紗もお召もど

てゐるから悟れないのだ。橋の下の乞食の境涯を見ろ、見榮も外聞もいらぬ彼等の境涯は青空のやうに澹淡として、氣樂だ。見榮や外聞にばかり汲々としてゐるから人間は苦しくなるのだ。瘦我慢の虚飾に止めて、一



つ木綿物でも着けて超然として見よ。人生なんてものは案外暮いし／＼もんだ。

たゝかれてゐるが女房の勝

いくさ

これは女だてらに男を征服しちまふとするからこと面倒だ。女は男に敗けるべきものと昔からの通り相場だ。素直に亭主に敗けてる女は見よいが、亭主に喰つてかゝる女房は決して他から見えて見よいものではない。

人生の生死二つの盥なり

オギアと生れて先づ盥で生湯をつかふ。朝の露にほかならぬもろい人間の生命、死ねば又湯溜の盥が待つてゐる。結局人間の生死は、この二つの盥の中一歩も出ない運命だと云ふ事になる。

思へば無情い。

まア後生の爲めこの世にゐる限りは、精々善根を積むことだな。

お天気と人間

お天気が私たちの生活に非常に深い關係をもつてゐることは今更申すまでもないことです。朝起きれば雨だらうか風だらうかと。夕焼がすれば明日の天気はどうだらうかなど

くる程であります。

そのお天気の観測をします場合、常に思ひ當ることがあるのですが、ものごとはどうも此方の思つた理窟どほりにゆかないものです。私の仕事——天気豫報にしましても、明日が晴になるか雨になるかといふやうなこと

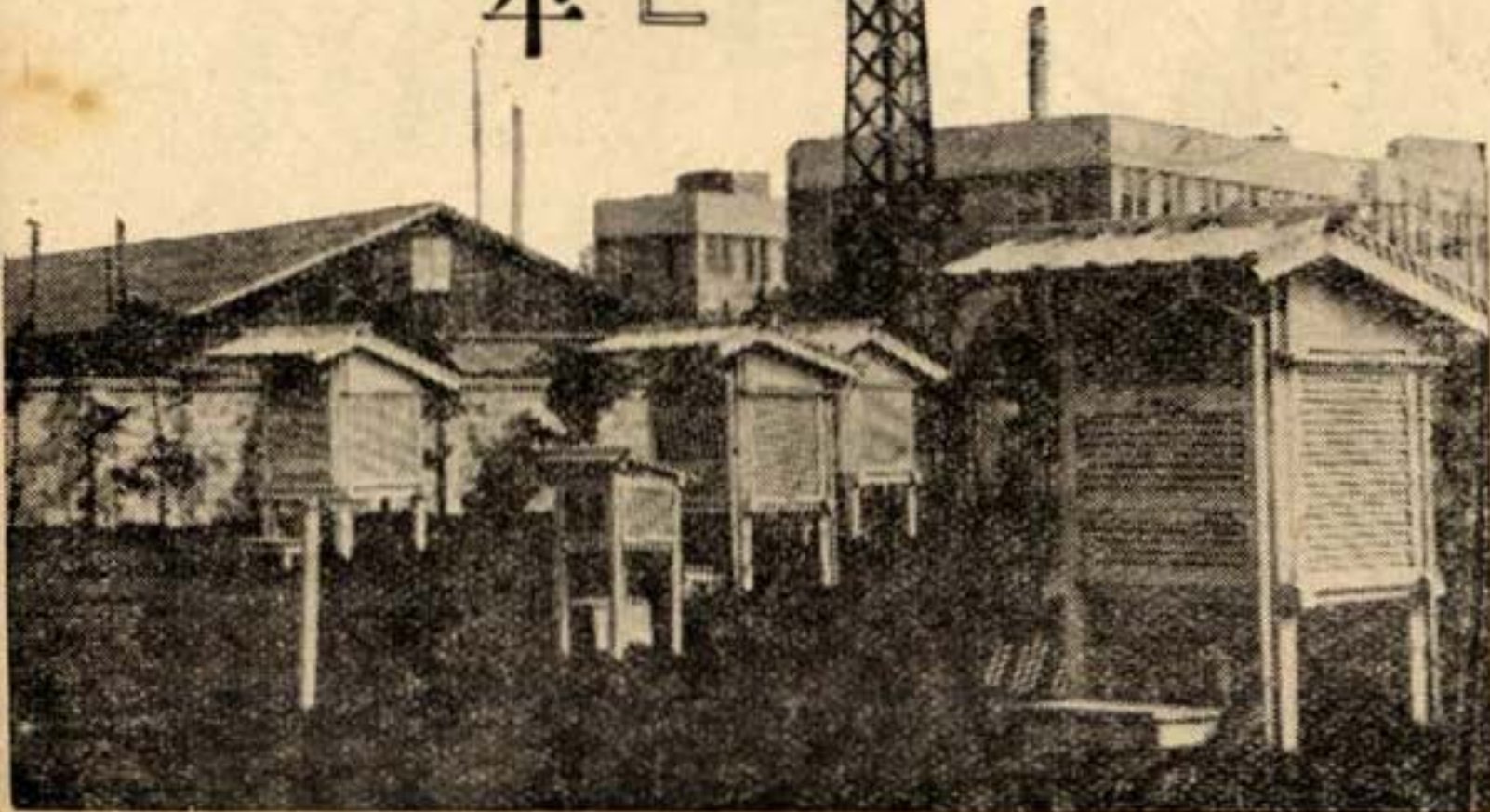
私の目から見た

人間の『お天気』

中央氣象臺 理學博士 藤原咲平

と、常にお天気のことを氣にかゝる。他人と挨拶するにしても先ずその日のお天気具合を見て、『今日は大變よいお天気で結構です。』とか『たう／＼雨になりましたね』とか云ひ交はしてゐるやうな風に、全く私達の生活は日々のお天気具合に支配され、その日その日の暮し方や氣持などもお天気次第で變つて

は低氣壓が來れば雨、高氣壓が來れば晴と大體は決つてゐるのですが、然し時には低氣壓が來ても雨にならないことがあります。其様な場合は多くは南風の強い時で、折角催はした雨も南風の爲に北の方に吹き拂はれるから



です。即仲々理屈通りには行きません。

詰り、例へば雨となるやうな同じ原因があつても、それを受けとる方のからくり如何によつては、全く正反對の結果が現はれてくるものです。

佛教の方では因縁と申してゐますがこれは『因』といふのが同じであつても、それに伴つてくる『縁』が違つてゐたら全く逆なものになつてしまふものです。言葉を換へて申しますと、刺戟が同じであれば常に同じ反響があるとは限りません。

鐘は鳴るものです。同じ撞木でつきましても、空氣の乾いてゐるときと、その反對に濕つてゐるときとの鳴り方は違ひます。又、鐘をよく鳴らさうと思へば丁度その鐘に相應しい撞木を用意しなければなりません、反對に大きすぎる撞木でたゞくと、却つてヒビが來て鳴らなくなつてしまひます。同じ鐘でもたゞき方によつてこんな風に違ひます。須くその方法を過らないことです。それが

最も大切なことだと思ひます。同じものでそれを受け取る相手の心の持ち具合如何によつては全く變つてきます。同じ言葉でありながら時に相手を喜ばす言葉にもなれば、或は相手を怒らす言葉になることもあります。さういふ風でありますから、ものごとは一概に『かうだ!』ときめつけて仕舞ふことは出来ないやうに思ひます。とかく世の中のこととは何でも六ヶしいものです。

その日その日の風次第

天氣豫報をいたします場合のことを申し上げますと、英國を除く外の國に於ては全部その『豫報の判斷をする人』を唯一人ときめてゐまして、他の人は圖を記入したり材料を集めたりしてゐるのです。詰り豫報當番の人がきまつてゐるわけです。それは何故かと申しますと『明日の天氣は晴だ!』といふやうな判斷を下します時に、非常に人間のその時の心理作用が影響して來るからであります。

『お天氣博士』それは藤原博士の異名でありまして餘りにも有名であり、讀者の皆様にも定めし親しみ深いお名前であらうと思ひます。

博士が眞剣な念佛行者であることは、既に本誌に於てお讀み下さつたことと思ひます。此の度は特に『お天氣判斷や人間判斷』のことに關する御感想をお願ひ致しました。【記者】

豫報を出しますのに、理想的に申しますとさういふことに携つてゐる人が五人なら五人寄つて相談し、各自が意見を出し合つて、最後の判斷を一番上の人が下すやうにしたなら、天氣豫報の間違ひが少くてすむだらうと考へられませうが、實際やつてみますと人間の心理作用といふものは實に不思議なものであります。なかく理想通りに行かないのであります。

私がよく下の者に明日の天氣の豫報など

を云はしめて、その時の自分の心のうごき方を窺つてみることにありますが、さういふ場合、成程その通りに違ひないといつて卒直に共鳴する場合と、さうではあるまいと反對したくなる場合とがあります。

人の性質といふものは千人が千人、皆各々違ふものでありますが、かうした心理作用の入つてくる場合に於ては特にその人の性格が現はれるものです。或る人などになると、他の人が『かうだ』と云へば、なんでも『さうでない』

と反對に考へ、甚しいのになると、實は、一成程さうであらう。』と承知してゐながら、『どうもさうではあるまい。』

と反對して、逆の方に強くゆく性質の人があつてやうです。

さうかと思ふと、また他の人が、

『斯うだ。』

と云へば一も二もなく、

『さうだ。』

と思ひこんでしまふ人があるので、當にならないものです。

ところが其の上にて判斷を下す人が、若しさういつた性質の人であるとするに判斷は悪く適中率はあやしくなつて來ます。幸にそれを判斷する人が心を平に持ちつゞけることの稽古、つまり修養の出來てゐる熟練者であれば、その下にゐる人々の云つた言葉を聞き、その顔つきを見たりして、『あゝ、あの人は平常から、斯う云ふ風な性質の人だから……』と思つてその調子で決定するやうにしたらよいであらうが、それでもなほ間違を起すことがあります。それは、『あの人は平常かう云ふ性質な人だ』といふことが解つてゐても、その日その時の風のふきまはし様

が變ると、その『呑み込み』が駄目になつてくるのです。つまり、その日に限つて、何か此方で知らないやうな複雑な事情がその人の家庭に起つて、非常に不愉快に思つてゐる場合とか、又は何とかいふやうなことがあつたと、さうした場合には平常やつてゐることと違つた調子が出てくるのだから、ますますあてにならなくなる——結局、さうした感情をもつてゐる種々の人々の云ふことを聞くことが却つていけなくなるのです。

浮氣な低氣壓

こんな譯で豫報當番は各國とも一人と云ふことにしてゐますが、それでなくても低氣壓といふものは、生物のやうな性質をもつて居りますため、とかく此方の思つた通りに動いてくれないので益々困りものです。今順調に動いてゐるかと思ふと、その次には直ぐ急にその状態が變つて、今までの渦巻の中心廻轉が弱つてきて、他の部分に中心が移るやうなこともあつて、そこに強い廻轉が起るために忽ち二つにも三つにも分烈するやうなことがあります。それかと思ふと、生物が食物を食べ、養分を採つて成長するやうな具合に、自分に都合のよいものを取り入れて非常

に大きな渦巻になることもありますので、思はぬ方向へ勝手に横切つて進んでゆくことにもなります。つまり、その渦巻が弱い間は流れのために流されてゐますが、強くなつてくるとその流れを横ぎつてゆくことが出来るから勝手に動くのであります。

又、低氣壓と雨との關係につきましても、雨は低氣壓に伴ふものであるといふこと位皆さんも御承知でせうが、併しながら折角低氣壓が來ても雨が降らないことがありますしさうかと思へば低氣壓が來ないで雨の降る場合がありますので、實際やつてみるとなかなか難かしいものであります。

一口に云つてもこんな具合ですから、折角出した豫報が兎角思ふやうにならんことがあるのであります。こちらであの低氣壓はかう來るだらうと思つてゐると、先方では、

あんな豫報を出したから、

彼方へ行つてやろう……

まさか、そんな考を起すわけではないでせ

うが、兎角變な方へ行つて仕舞ひたがるものです。

かういふ譯で、キチンと數學で割り出すやうな具合には行かないのですから、天氣豫報の大體の原理は分つて居りましても、どうも『二天作の五』式にゆかなくて困ります。

上昇する氣流があれば雨が降る。上昇する氣流の起るのは不連續線か又は低氣壓のある場合が主である。尤も高氣壓にも稀には上層氣流が起るといふ理窟も分つて居ります。そしてそれらのいろ／＼な條件を推定材料と致しまして、その上に心の直感直覺の練磨に依つて判斷を下すのでありますから、何時でも間違はないといふ譯には参りませぬので、矢張り天氣豫報といひまして、豫報の『豫』の字をくつ附けてゐるのであります。

もしこれが何時でも間違なく當るやうになりますと豫報とは申しません。『豫』の字のついてゐる間は多少外れることがあるといふことを御承知置き願ひたいのであります。

天氣豫報と夫婦喧嘩

他人が『左』と云へば一も二もなくそれに従つてしまふやうな無定見な人でも困りますが、それかと云つて自分自身でも『さうだ』と承知してゐながら、他の人があゝ云ふから、自分がかう云はう……など、意地にもそれに賛同することの出来ないやうな人にも困りものです。實際、私のやうに自分の仕事であり乍ら自分の仕事ではなく公の仕事であつてその影響するところ非常に廣範圍にわたる仕事をしてゐる者にとりましては自分の一寸した精神の影響が直ちに、大變大きな迷惑をかけねばならぬやうな結果となることがあるのを考へますと、非常におそろしくさへ感じられます。

仕事の上に心理作用が影響して來ることは免れ難いことでありますから、特に公のことに携る人などは先ず根本的にその精神をよく鍛へよく練つて、時々の浮ついた心に

左右されないだけの、どつしりした腹のすは、
リをつくつて置くことが大切だと思ひます。
心が亂れると、どうも甘く行かないものです
から……。

お恥かしい話ですが、私自身のことを申
し上げてみませう。私がこの天気豫報の役
係はり始めました時分のこと、その頃はまだ
若くもあり元氣一ぱいでもありましたが、仕
事の方は兎に角一生懸命、皆さんになるべく
御迷惑かけないですむやうにと思つて随分眞
剣になつてやつたものです。だが然し、それ
でも家庭で面白くないことゝか、氣に入らぬ
ことでもありますと、兎角うまく行かないこ
とがありました。するとその翌日の新聞に、

『藤原さん、キット家で

夫婦喧嘩でもしたのだらう……』

など、悪口を書かれて困つたものです。

天気豫報の外れたのが、夫婦喧嘩に基くの

も困りますが、よく考へてみるとその夫婦
喧嘩の原因は却つてお天気具合から來てゐる

ことがあります。つまり、平常は氣にも留ら
ないやうな些細なことが、お天氣の變り目な
どにはみんなの神經が高ぶつてゐるため、つ
い喧嘩口論の原因となるのです。

まア、私も近頃ではそんなこともなく、家
庭のことが、直接仕事の上に差し響いては來
ないやうに思ひます。

とにかく心理作用の調整がうまく出来る
やうにならなければ何ごととも一人前だとは申
されないやうに思ひます。

一文銭は鳴らぬ

低氣壓にしましても、高氣壓にしましても
一種の空氣中の渦巻でありますから、その渦
巻の性質が實際分つたら、氣象についてもお
分りになることが出来ると思つてゐます。人
間の心理作用にもそのやうな渦巻があるので
あります。

尤も人間といふものが、此の世にたつた一
人で住んでゐるものだとしたら、或はこの

心の渦巻も起らずにすむかとも思ひますが、
然し世の中といふものは一人で住めるもので
もなし、必ず多勢のものが一緒に暮してゆか
ねばならぬのですから、そこにいろ／＼な複

雑なことが起つて、そのために私達の心が
いろ／＼に動いてゆくことは致仕方のないこ
とでせう。昔から、『一文銭は鳴らぬ』

といふことを申しますが、實際一文銭に紐つ
けて振つて見たところが、何かものにぶつ
からない限りカチンともチャリンとも鳴りま

せん。人間でもその通りです。一人で怒つた
り笑つたりする人は滅多にないでせう。蓋し

精神異常の人は別としまして、大體普通の方
ならこんなことは無いわけです。思ひ出し笑

ひ、これも矢張り何か相手になるものがある
場合で、完全に一人でゐたら多分そんな思

ひ出して笑ふやうなこともない筈です。
してみるとカチンとかチャリンとかいふの
は相手がある場合に限るやうです。道を一人
で歩いてゐて喧嘩ふきかけたといふ話を聞

いたこともありませぬ。喧嘩ふきかけけるには必ず相手が必要です。その相手も見ず知らずの人では一寸喧嘩になりにくいやうです。

喧嘩の仕方

どうしても喧嘩するには自分の知つてゐる人、自分に近い人、自分の親しい人といふことになれます。喧嘩すれば嫌なものですし、居心持の悪いものですから、自分と関係のない見ず知らずの人とすればよいわけです。そして自分に近い人や親しいとは仲よくすればよいのですが、皮肉なことにこれも思ふやうにならぬものと見へて、兎角その逆になつてゆきます。誠に困つたものですが、どうすることも出来ないやうです。常に自分に近い親しい人をつかまえてはいざこざを起してゐる。關心をもつてゐない人とはどうも喧嘩にならぬらしいやうです。

雨降つて地固まる

仲のよいほど喧嘩する

こんなことも言ふやうですから、まあ、精々低氣壓を起して雨を呼んでは喧嘩するのもよいでせう。それが自然かも知れません。お天氣が續きすぎても困るし、雨ばかり續いても困りものです。乾く一方でもいけませんし、濕りが過ぎてもよくありません。自然にも春夏秋冬、秋、冬と變化があるのですから、時に、それもほんのチョッピリ位なら夫婦喧嘩してみてもよいでせう。却つて夫婦仲のよくなる過程に起つてくる一現象かも知れませんが、低氣壓にしましても老若の別がありません。對稱の悪い即ち偏つてゐるのが若い渦巻で、年寄つて来るに従つて圓い對稱の好い形になつて來ます。それが更に年寄つて來ますと段々分裂して數を増したりして、遂には滅亡してしまふものです。たとへば此のやうに段々と喧嘩せんでもすむやうになつて終には喧嘩しなくても仲よくやつてゆけるやうになるのかも知れませんが、人によると「喧嘩夫婦」といふのがあつて、いくら年寄つて

も絶へず喧嘩のやまない人があるやうですがあれはどうも感心できないやうに思ひます。喧嘩はしても、それが他人らしくない喧嘩であつてほしいものです。どうせ喧嘩といふのは自分に關心のもてる近い人とか親しい人との間に起ることですから、親しいなら親しいやうな喧嘩のしぶりにしたいもので、よくやるやうな他人らしい喧嘩にならぬやう心がけたいものです。喧嘩した結果が愛想をつかして互に別れ話を出すやうなら、誰にも出来る適當です。親しかつたので喧嘩したのですから、他人になるやうなことではいけません。喧嘩したことによつて互に深く内省し、相手を温かい心になつて抱きしめてやる事が出来るこそ、始めて親しいもの同志の喧嘩といふことが出来ます。

この他人らしくない喧嘩が出来るやうになりますと、それこそ常に明るい朗らかな生活が出来るのです。「曇後晴」といふところでせう。

士 兵 年 少 と 鳩



小鳥は春の來たのを喜んで、木の枝を飛び廻つて、歌ひ續けてゐます。小川は鈴のやうな音を轉がして流れてゐます。

「前へ進め！」

明るい聲が澄んだ青空に響きました。竹の鐵砲を擔いだ十人許りの少年が列を正しく、小川に沿ふた道を勇ましく歩いて來ます。少年達は春の喜びでいっぱいです。力強く、足音高く進んで來ます。

「アツ！敵だ」

列から飛び出して、一人が叫びました。「伏せ！」

中 田 龍 夫
野 中 昌 子 畫

先頭に立つてゐた貞夫君が驚いて號令をかけました。バタ／＼と姿を隠すやうに川の淵に倒れました。新芽と土の香が鼻について、生々した力が少年達に傳つて來ます。

「敵は何處だ」

「ホラ、あそこの木の上だ」

指さした方を見ると、丘の上の一本松に一人の少年が手をかざして、こちらを見てゐます。そして下を見ながら右手で頻りに何か合圖をしてゐます。

「突撃してくるんだな」

貞夫君はじつと睨みながら呟きました。

「ヨーシ！それではこつちも突撃だ」
 少年達の血は燃えたつて來ました。勇ましい突撃の光景が胸をワクワクさせるのです。突撃の號令と共に、ガバツと跳ね起きた小兵士は竹の鐵砲を兩手にシツカリ握つて、貞夫君を先頭にワアーツと閃の聲をあげて、一齊に馳け出しました。小鳥も小川も驚いたのか歌聲も鈴の音も一時パツタリと止んだやうでした。敵も煙を蹴散らして風のやうに飛んで來ました。まさに肉弾相討つ大合戦が起らんとしました。
 その時です。貞夫君が突然叫びました。

「戦ひは終りだ、鐵砲をおさめろ！」
 だしぬけの命令だから敵も味方も驚いてしまひました。折角はり切つてゐた力がスーツと抜けてしまひました。
 「どうしたんだい、貞夫君」
 秀男君が敵の中から出て來て面白くもないと、貞夫君の顔を覗きこみました。
 「あれを見ろ」
 貞夫君は悲壯な聲を投げすてゝ、二三步歩いたかと思ふと、煙に座つてしまひました。みんなも不思議に思つて貞夫君をとり圍みました。貞夫君は小鳩を確と抱いてゐるのです。
 「可哀想に、鐵砲で打たれたんだ。」
 「えゝ？」
 みんなの眼が小鳩に集りました。ほんとに、腹を空氣銃で打たれてゐます。今にも死にさうに苦しんでゐます。
 「彈丸を抜くんだ」
 秀男君が彈丸をとりださうと走り寄りました。

「死ぬのかしら」
 さつき迄の勇士達の明るい顔が心配でみんな曇つて來ました。小鳩に注がれてゐる多くの眼は元氣になつてくれと祈つてゐます。
 「とれたぞ」
 秀男君の聲と共に鳩は急に元氣が出たやうです。
 「ホラ、繃帶だ」
 一人がハンケチを破つて投げ出すと「血をふいてやらうよ」と一人が小川にハンケチを濡らしに行きました。
 それから屢らく經つて、仲々した朗らかな笑聲が青空に轟きました。小鳩が元氣になつたのです。喜んで羽ばたきしたのです。
 竹を擔いだ少年達がまた列も正しく元氣に進み始めました。先頭の貞夫君の小脇には繃帶を卷いた小鳩が、嬉しさで目玉をキョロ／＼させてゐます。小兵士達も大勝を得た凱旋將軍のやうに、喜びに充ち溢れ、笑ひで顔を崩しながら、青空の下を、何處迄も何處迄も進んで行きます。

小説

母を 守れ

浅原 六朗
吉田 貫三郎 畫



満洲に行く父

日本にとつては、歴史上の大問題とされた満洲事變の起る一年ほど前のことである。

高須暗太郎は、急に満洲に出かけて行くことになった。この旅行は、陸軍省からの秘密な囑託によつて、蒙古方面の測量をするためであつたが、この重大な使命については、もちろん家の者にさへはつきり打ち明けることは出来なかつた。

高須はこの仕事をして行く途中萬一の場合には、自分の生命にさへ危険のあることを知つてゐたが、彼はこれが日本の國家にとつて重大な仕事であることを想ふと、一身の利害などは構つて居られなかつた。

出發の時、高須は、十六になる君江と、十三になる勇二の頭をかわるがわる撫でて、

「お父さんの留守の間は、萬事お前たちにたのむ。病身のお母さんをお願いしながら、留守をよく守つてくれなければいけないよ」と云つた。

君江も、勇二も、父の顔を汽車の窓に仰ぎながら心からうなづいた。

「お父さん。あたし達は一生懸命にお留守居します。」

「うむ。よく云つてくれた。たのむ。お父さんは半年もすれば歸つてくる。お前たちがよく留守を守つてくれれば、それだけお父さんは安心して旅行してゐられると云ふものだ。半年後には澤山満洲のお土産をもつて歸つてきてあげるよ。」

「お土産がなくなつたつて、お父さんが丈夫でお仕事をして歸つてゐら

しつて下されば、それで僕はいいんです。」

「あはは……。いつもお土産をほしがるくせに、今日は馬鹿に偉いことを云ふね。」

高須暗太郎は、心から嬉しさに、かう笑ひだしながら、たのもしい二人の子供に別れて出發して行つた。

勇二は、父を送つた歸りに、姉の君江に話した。

「お姉さん。お父さんの今度の旅行は、いつもの旅行とちがふやうに思ふよ。」

「そう。何んだか、ずいぶん遠い處にゐらつしやるんだものね。」

「いや、遠い處とか、近い處と云ふんぢやなくつて、お父さんは今度、日本のために、大事な仕事をされに行つたんだつて氣がするよ。きつと、日本のために秘密な仕事をされに行つたんだよ。」

勇二は、もちろん父親から、今度の旅行について、はつきりしたことはきかなかつたが、おぼろ氣ながら、父親の言葉のうちから、それを感じることが出來たのだつた。

「だから、お姉さんと僕とで、お母さんを一生懸命大事にしてあげなくつちやいけないわ。」

「そして勇二さんは、あたしに喧嘩を吹つかけないことよ。」

「あんなことを云つてらあ、お父さんが留居の間、誰れが姉さんとなんか喧嘩するもんかい」

「あら、ちあ、お父さんがお歸りになつたら、また喧嘩をするつもり？」

「うん、お父さんがお歸りになつたら、又喧嘩をするかも知れないよ。」

「つまんないの。ちや、勇二さんにはお父さんがお歸りにならない方がいいのね。喧嘩をしなくつて。」

「そうれ、そう云つて、姉さんは先に喧嘩を僕に吹つかけてくるぢやないか、僕だつて、來年は中學に入るんだ。喧嘩なんかしてゐられるもんかい。」

病む母

滿洲に行つた父からは、暫々たよりがあつた。そしてだんだん滿洲の奥へ、奥へと入つて行く様子が、時々の手紙で知ることが出來た。

「……君江さんと勇二さんの二人で、お父さんの留居をよく守つてゐることと存じます。汽車の窓で、あなた方二人からきいた言葉を、お父さんは忘れないでゐます。お母さんの此頃はどう？」

お父さんは遠い滿洲の地から、いつもあなた方が、お母さんを大事にして、毎日家のことや、勉強をおろそかにしないで努めて居られることを考へながら、愉快に働いてゐます。お父さんはこゝの仕事がすめば、もう少し蒙古に近い方に入つて行くことになつてゐます。もう三月もたつたら、また日本に歸れる筈です。その頃には、

あなた方もまた大きくなつて了うことせう。君江には、蒙古で得た寶石を、勇二には、蒙古人のつかふ立派な剣をお土産にもつて歸つてあげませう。」

こんな手紙は、どんなに君江や、勇二を喜ばせたか解らない。

これらの手紙には、いつも父の住所に書いてなかつた。轉々といつても住所が變るので、住所は知らされないのだと書いてあつた。そして毎月これで暮らすだけのお金、きちんきちんと手紙の中に入つてゐた。

父が滿洲に行つて、四五ヶ月ほどたつた頃、いつも病身がちだつた母が、更に風邪をひいて床につくやうになつてしまつた。母の風邪は、なかなかほらなかつた。そのうちに醫者は、腎臓に故障が出来たと云ひだした。腎臓病と云ふのは、どの位の病氣か、姉弟にはよく解らなかつたが、母の顔からは血の氣がなくなつた。枕から顔をあげることもさへ大儀さうな母を見て、君江も、勇二もひそかに心配しだした。

ある日、藥をとり、醫者の處に行つた勇二は、お醫者に訊いてみた。

「お母さんの病氣はすぐによくなりませうか？」

「さあ。」

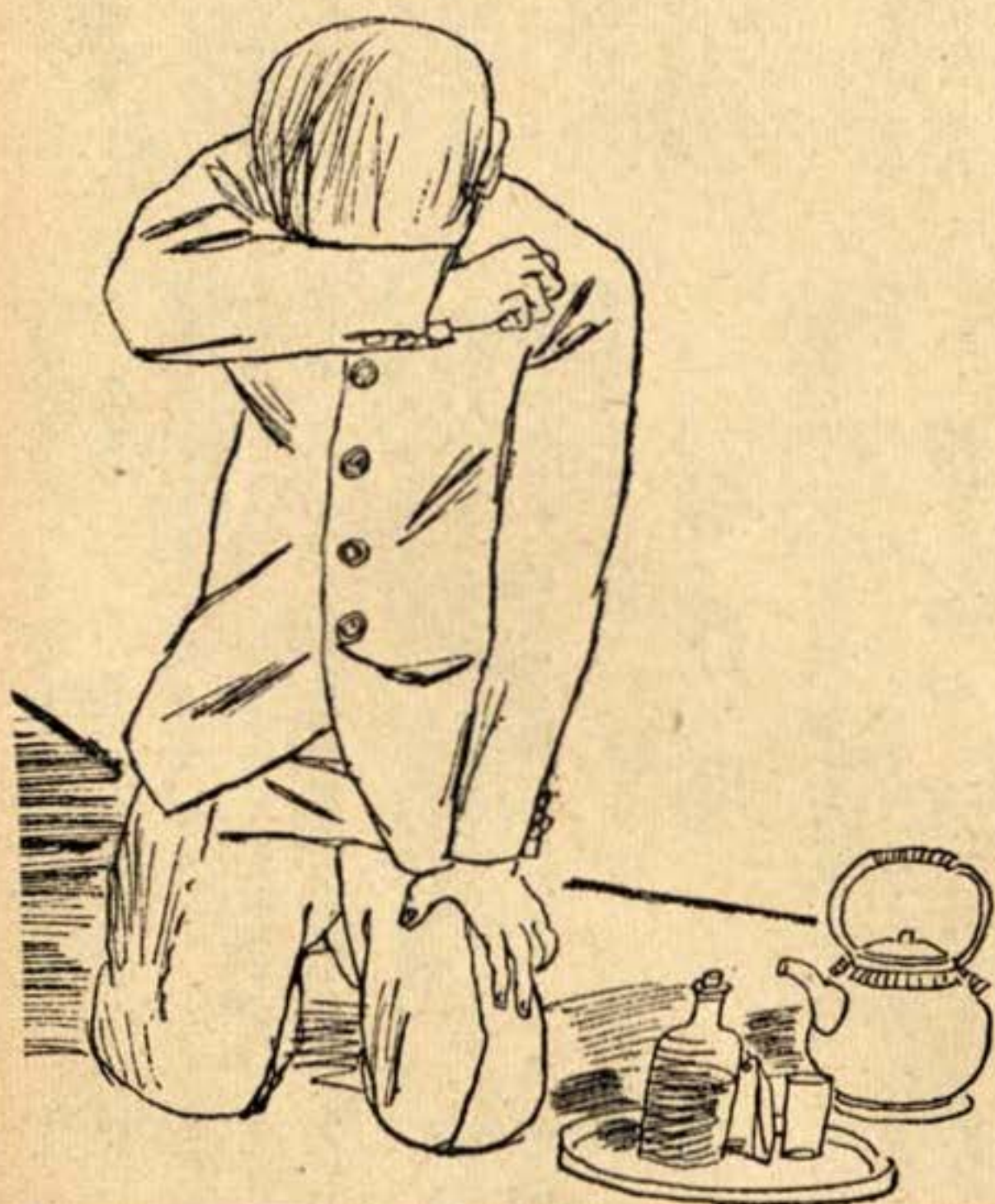
醫者は首をかしげた。

「腎臓と云ふ病氣は永い病氣でねえ。すぐと云ふわけには行かないよ。で、若しかしたら、入院しなければならぬことになるかも知れないよ。」

「入院したら、すぐ癒るでせうか？」

醫者は勇二の一生懸命な顔を見ると、氣の毒さうに、

「すぐ癒ると云ふわけには行かなくつても、病院の方が手當が行きと



どく、食事から何からいろいろなことに注意するから、早く癒るわけだね。」

それをきくと、勇二はすぐに家にとんでかへつた。

そして君江を、母にはきこえない處に呼んで相談した。

「お医者さんは、今すぐとは云はなかつたけれど、早く入院した方がいいつて云つてゐたよ。」

「ぢや、早くして頂いた方がいいわ、お父さまのお留居に若ものことがあると大変よ。あたし達は一生懸命で、お母アさまを守らなくつちや」

二人はそろつて、母の枕許に行つて、その話をした。

母は二人の言葉をきくと、暫く眼をとちてゐたが、

やがて、眼をかるくふつた。

「ありがたうよ。いろいろ二人に心配をかけるわねえ。ですけれど、お母アさんは、あんた方とこの家にゐて療治した方がいいのよ。」

母は、良人から送られる毎月のお金だけでは、入院がむづかしいことを知つてゐた。と云つて、家には、別に貯へもなかつた。こんなことで、二人の子供に心配させることは、どんなに自分が病んでも、母には忍びないことだつた。

「お母アさん。僕たちのことは構わないんです。どうか入院して下さい。お願い致します。僕たちは、お母さまが早くよくなつて、やがて

お母アさん



お父さまがお歸りになるとき、一緒にそろつて、停車場にお迎ひに行きたいんです。お母さまがこんなに悪くつて、ちつと病院にも入らないで我慢してゐるのを知つたら、お父さまだつて満洲で心配なさるにちがひないんです。」

「ありがたうよ。その心持だけでも、お母さんは、どんなにか嬉しく思ひます。いつも病氣をして、あなた方にとつては、本當に不甲斐な

「お母アさんです。」
母の瘦せた美しい顔からは、しづかに涙がつかはつてきた。

「いつも病氣ばかりしてゐて、すみません。」

「いや、いや、お母アさま、そんなことを仰言つて。」

君江は思はず聲をあげて、泣き伏してしまつた。勇二も思はず、そつと涙を拳骨でふいた。

母は一家の經濟のことを考へて、なかなか入院することを承知しなかつたが、間もなく醫者からも入院するやうに云はれ、また二人の子供たちに、毎日のやうにせがまれて、到頭入院することになつた。

「お姉さんは、學校を歸つたら、すぐ看護婦になつて、お母さまのそばに行きますからね。勇二さんは家でよく勉強してね。」

「いやだ。僕一人家にばかりゐるなんて、僕だつて、病院に行つて、お母さまの看護ぐらゐ出来るよ。お姉さんとは、かわるがわる行くことにしようよ。」

それで結局、二人は毎日交たいに病院の母を看護することにした。

働く二人

滿洲の父から手紙がきた。

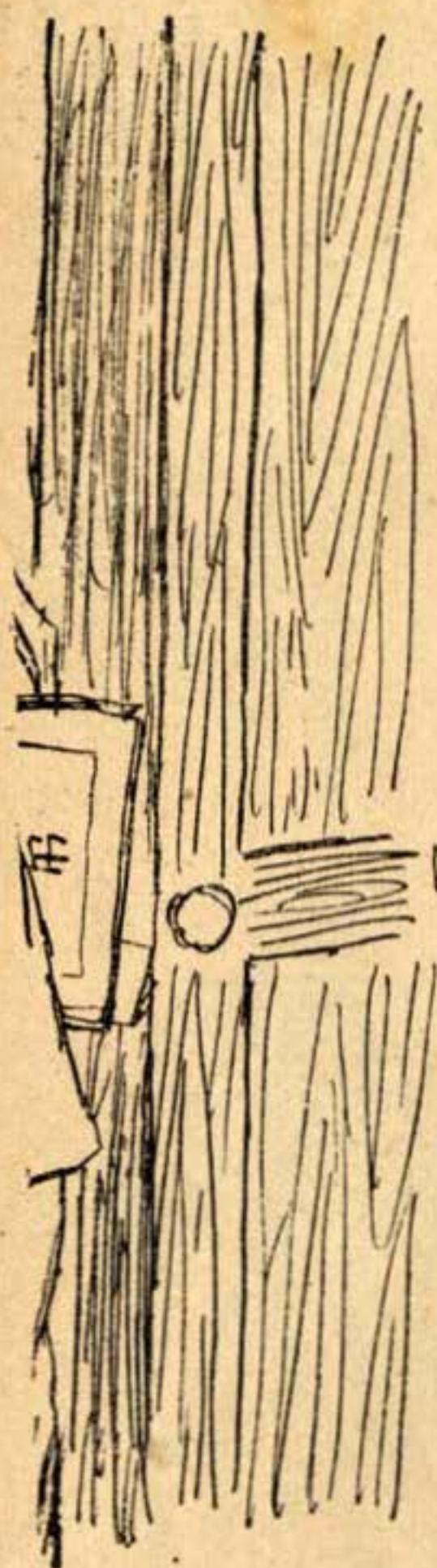
「これからいよいよまだ日本人の行つたことのない蒙古の奥に入つて行く。そこには、どんな珍らしい世界がひらかれてゐるか。歸つたら、澤山、お父さんが経験した不思議な話をしてあげよう。お母さんも、お前たちも、丈夫に暮らしてゐることと思ひます。お母さんは體が弱いことから、特にお前たちが注意をしてあげて下さい。そして君江も、勇二も勉強を忘れないで、お父さんはこれから暫く手紙が出せないかも知れませんが、然し心配しないで、お留守居をしてゐて下さい。」

この手紙は、姉弟を悲しませたり、喜ばせたりした。今は重態で、病院の寢臺にゐる母のことを知らない父を思ふと、悲しかった。また父がいつもに變らぬ元氣で、國家のために働いてゐることを思ふと嬉しかった。

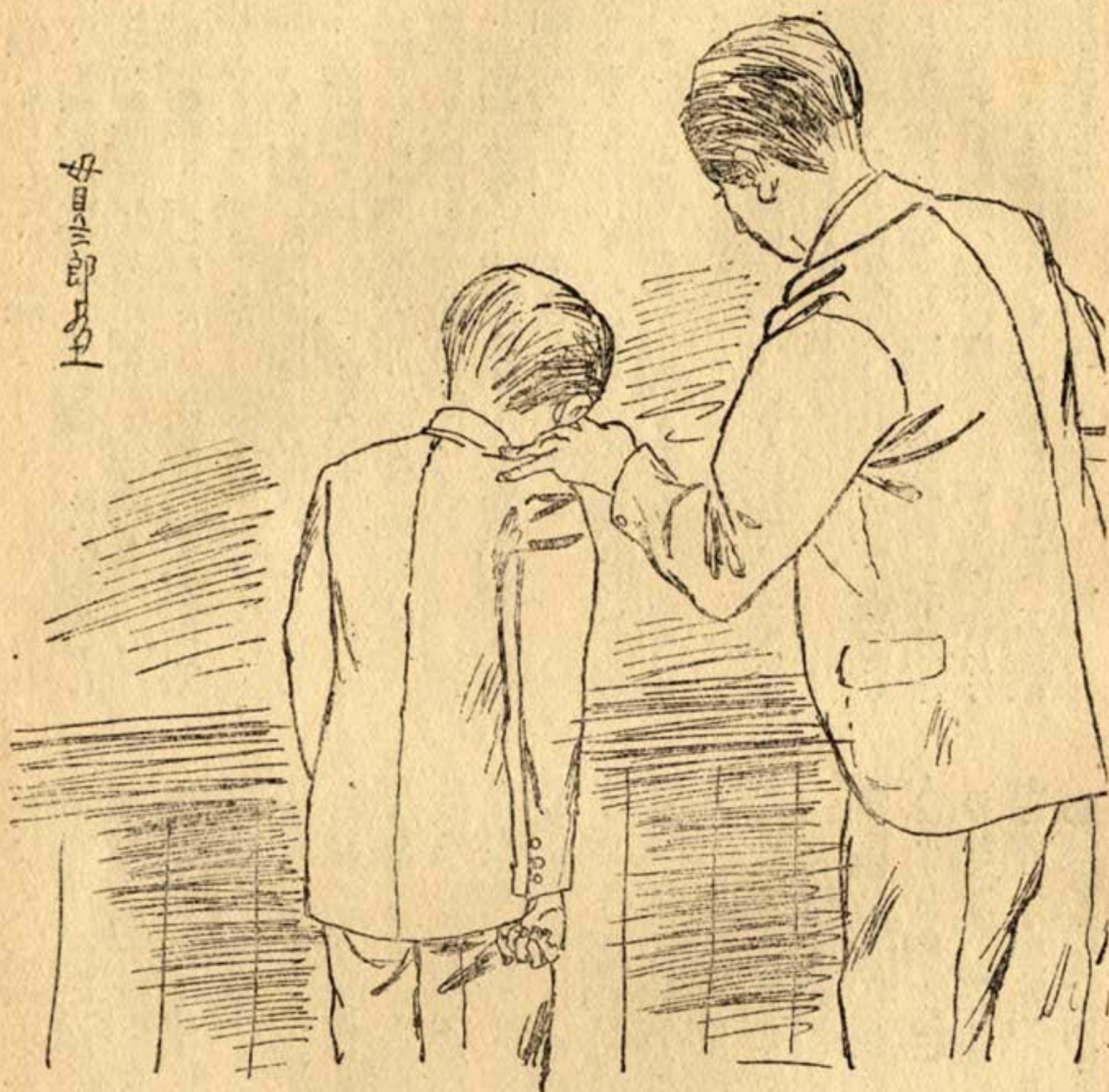
「あたし達は、益々一生懸命で留守居をしなければいけないわねえ。」

「姉さん、今迄よりもつと儉約しようよ。儉約して、お母さまに御心配をかけないやうにしようね。」

二人は、お互ひに父の手紙を見なが



お母さん



らはげまし合つた。

父からは、それつきり、一ヶ月たつても二ヶ月たつても手紙がこなかつた。手紙と一緒にくる筈のお金もこなかつた。入院費の方は、家の方の拂ひをのばして、支拂ふことが出来たが、それから以後、家の生活をどうやつて過したらいいか、見當がつかなくなつた。

「勇二さん、こまつたわ、今月の末になつても、お父さんの方から御金がこなければ、それこそ大變なのよ。」

君江はさすがに女らしく心配した。

父から杳として、二ヶ月も手紙がこなくなつてゐることを思ふと、これから先いつ父からの手紙がくるか、當がつかなくなつた。もう一ヶ月父からの手紙がこなければ、二人が家で御飯をたべるのにこまるだけではなく、重態の母を病院に置くことも出来なくなるのだつた。

「どうしよう、お嬢さん。」

かうなると勇二もどうしていいか解らなかつた。

「僕やなんか、幾日お芋だけ喰べてゐたつて構やしないけれど、それだけぢや、とてもお母アさんの方のお金足りないね。」

君江は、弟の眞剣さが嬉しかつたが、お芋を毎日喰べると云ふ考へ方が可笑しくつて思はず笑ひだした。

「とても駄目よ。もう儉約しただけでは追ひつかないのよ。どうかしてお金をあたし達が働いてとるやうにしくつちや。」

母 「そうか。お姉さん。ぢや僕、學校はやめて明日から働かう。」

「だつて、勇二さん、働けるやうな處どこかにあつて？」

を 「なアに。一生懸命に捜せば、何處かにあるとも。僕年齢は小さいが、人の二倍も働けば、誰れだつて喜んでくれるだらう。」

守 「さう、そりや喜ぶわ。だけどそんな處がすぐにあるかしら。」

「あるとも、きつとあるとも、明日から僕方々捜しまわつてやる。けれど、このことお母アさんには云はないで置かうね。」

「もちろん、お母アさんの處に行つたら、いつも元氣で、いつも明るい顔をしてゐてあげなければいけないね。」

「こんなことで、僕へこまされるもんか、お父さんに僕たち誓つたぢやないか。きつとお母さんを守つて、立派にお留守居をしますつて。」

翌日、勇二は、すぐに受持の先生の處に行つて、家の事情を話した。

「そんなわけですから、今日からでも、僕仕事をさがして、一生懸命に働きたいと思ひます。」

それをきいた受持の先生は、勇二の殊勝な心にすつかり感動した。

「偉い。君は本當に立派な少年だ。」

先生は、勇二の肩に手を置いて、

「先生も出来るだけ君のために應援する。君のやうな立派な少年なら、何處でもきつと雇つてくれるにちがひないよ。」

勇二は、學校もよく出来たし、いつも晴れ晴れとした氣象をもつてゐたので、受持の先生のみならず、校長先生まで、勇二の身の上を心配されて、やがてある新聞社の給仕となつて働くことが出来るやうになつた。それも先生たちの力そえで、晝間は學校に通ひ、夜だけ働いて、晝間働いたのと同じお金をもらふことが出来た。

それから勇二は、學校から歸ると、病院に母を看護に行き、夜は十一時まで、新聞社の忙がしい編輯室をとび廻りながら働いた。

姉の君江は、附近の人たちに、自分の腕で出来るだけの縫物をたのまれて、午後に勇二が病院に看護に行つてゐる間と、朝早く起きて、學校に行く迄の時間とを割いて、せつせと針仕事にいそしんだ。

二人の姉弟は、競争してゐるやうに、互ひに勵まし合ひながら、一生懸命に働いた。母の病氣のことを、父から便りがないこと以外に、二人はかうして働くことに、寂しいとも、悲しいとも思はなかつた。

「お父さまは、蒙古の奥に行つてきつと手紙が出せないんだよ。然し今にきつと手紙がお父さまからくるよ。」

勇二は父からどんなに手紙がなくなとも、父を疑はなかつた。父は

きつと立派な仕事をして、間もなく歸つてくると信じてゐた。ともすれば、心の弱りさうな君江も、勇二がいつも元氣で、ビチビチしてゐるのに驚まされた。

かうして一ヶ月二人が懸命になつて働いたお金を合せてみたが、お母さんの入院費を全部拂ふのには足りなかつた。

「困つたなア、お姉さん。」

君江にだつて、いい智慧のある筈がなかつた。暫くすると、急に立ちなかつた勇二は、

「よし、姉さん。僕このお金をもつて病院に行つて話してくる。」

と云つて、君江がまだ何も云はないうちに出發してしまつた。

勇二は病院に行くと、院長に逢つた。

勇二は、二人で一ヶ月働いたお金を院長の前に置いてから云つた。

「先生、僕たちは、一ヶ月一生懸命働いて、これだけしかお金がとれ

なかつたんです。あとのお金は、僕がまたうんと働いてお返しします。

決して御迷惑はかけませんから、許して頂けませんでせうか。」

院長は、勇二の眞剣な顔を見ると、感動せずには居られなかつた。

「君たち二人で學校に行く暇々にこれだけ働いたのだね？」

「そうです。一生懸命で働きました。けれどこれだけしか出来なかつ

たんです。でもお金はきつと僕たちが働いてお返し致します。」

「あゝいいとも、心配しなくつていいよ。君たちは本當に感心だ。君

たちのその立派な精神だけでも、既に充分俺の方にはお金を拂つたこ

とになる。決してお母さんのことは心配しなくつていいよ。ゆつくりとお母アさんはこの病院で療養されていい。」

勇二は院長の好意に涙ぐみながら頭をさげた。

再び逢ふ日

高須浩太郎が滿洲に行つてから一年後には、人も知る滿洲事變が突如として勃發してゐた。それから五ヶ月のうちに、高須は晴れて日本に歸つてきた。彼は日本有史以來の大きな事變の内部に於て、充分な働きをしたのであつた。その功勞は表面に現はれる種類のものではなかつたが、日本の新しい發展に自分の力が加はつたことを、高須は幸福に想つた。そして日本の陸軍の少數の幹部將校からも、心からの感謝をもつて報ひられもした。

「君のあの時の仕事は、一箇旅團の軍隊の力に匹敵した。」

ある將軍はかう云つて、高須の働きを賞讃し感謝した。

彼が歸つてきた時、東京驛には、知名な將軍たちの出迎へがあつた。

その背後に、妻と二人の子供が、明るい健康な顔で彼を迎へてゐた。

「あゝみんなそろつて迎へにきてくれたわ。俺はどんなに心配してゐ

たか。でも、君江も勇二も、お母アさんを守つて立派にお留守居をし

てくれたやうだね、ありがたうよ。」

君江も、勇二も、父の言葉をきくと、今迄一心に母を守つて終つても

せず働いてきたことをよかつたと想つた。顔を輝かしながら、

「お父さん。」と云つて、久しぶりの父にとびついてゐた。(をはり)

信 仰 相 談

(擔)(當) 中 村 辨 康

本欄への投稿はハガキまたは封書にて、住所氏名御名記の上信仰相談係あてに送ること、紙上匿名は可。

鐘、木魚、珠數

の起原は

(問) お勤めの時、打ならす鐘や木魚又は珠數などの起原と其理由をお示し下さい。

(大阪 清水眞覺)

(答) 鐘、磬、打木、木魚等皆

な原語は同じで「鍵稚」と申します。之を「鍵稚」と書くのは誤りださうです。元來は之を鳴らして人を集める用に供したもので、増一阿含經に「阿難即ち講堂に昇り手に鍵稚を執り并に此説を作す。我今此如來の信鼓を撃つ諸有如來の弟子衆は盡く普集すべし云々」と云つて居り、祇園圖經などにも堂の四角に白銀鐘、頗梨鐘の置

かれてある事を云つて居ますから、相當に古くからあつたものと見えます。

御尋ねのものは「磬」でせうが、之は一に「キン」とも云つて居ります。もと支那の樂器で石で作つたのが本當なのださうです。またお佛壇の中にある小さいのを俗に「リン」と云つて居ますのは即ち「鈴」で鈴の類を云つたものです。

次に木魚には二種あつて一はお經の時叩く丸い形で鱗の彫つてあるもの、一は魚の形をした板で上につるして食事の合圖に鳴らすものです。魚は元來晝夜ともに眠らないから覺醒をうながす意味で魚形を採つたと申します。もと支那のお寺で

使用したものが我國に渡り、淨土宗では實曆の時間説和尚と云ふ人が使ひ初めたので、遂に一般に用ゆるやうになつたと云ふことです。

次に珠數は三寶の名を唱へる時、其數を取る爲に使用した事が木樨子經などにも出て居り、相當起原は古いものらしいです。元來頸飾にして居たものを利用したのかも知れません。

或人は釋尊の弟子達が布薩の日を繰る爲に黒白三十顆の輪を所持したことから初まつたのではなからうかと云つて居ります。何れにせよ數取りに使つたものです。百八、五十四、四十、二、三十六、二十七、二十一、十八、十四など數種あり、質も金銀銅鐵眞珠水晶珊瑚木樨子蓮子菩提子など色々挙げられて居ます。また法然上人のお弟子の阿波の介が二連珠數を發明

したことは餘りにも有名な話です。

一家を同じ信

仰にするには

(問) 私は信仰のなき家庭に生れ私のお父さんは無宗教で私年二回の施餓鬼の法話を聞きにゆくのに、はんたいします。お母さんは眞宗の信者、このまま往生できるといふてじやけんなひぐらしをしています。家は淨土宗ですが、淨土宗は十九・二十の方便化土の來迎往生の、出家の信ずる宗教で、在家のものは親鸞聖人のひろめ給ふ眞宗を聞信するのにかぎると、私にきゑんをあげてはんたいしますので、こまつてゐます。家庭平和にして、無宗教のお父さんを、佛教へみちびくには、どうしたらよいでせうかお教へ下さい。

信 仰 相 談

二、法身の如來、報身の如來、應身の如來、化身の如來はなんといふ佛様ですかをおしへてください。(大阪市由良安吉)

(答)四五十歳位の人達が無信仰であるのは、我國の明治以來の教育方針が悪かつた結果で、アメリカ流にならつて、教育と宗教とを全然切り離したからです。

また人間と云ふものには「先入主」があつて自分が一旦よいと思ひ込むと、もうそれに固定して仕まつて、スツカリ陶冶性がなくなるものですが、特に低い宗教人にはさうした傾向が多いやうです。それは信仰ではなくて「固執」であり「執着」であります。然るに信仰はもつと自由闊達なもので、思想的にも體驗的にも段々深まり廣まりし行く筈ですから、自分をよく反省して見る必要があります。

貴君は恰度此の兩方の間にはさまつて居られる譯で、誠に御同情申さずには居られませんが、言葉や議論などで御両親の同意を求める事は出来ないし、また無理に強引で御両親を引つ張る譯にも行きますまい。之は何うしても貴君の生活態度なり行爲なりで、御両親を感動させるより外に手段はありません。だから一日も早く「うちの母は實に感心だ」と御両親に思はれるやうになつて下さい。さうなつたら何んなに無信仰なお父様も信仰を志すやうになるでせうし、お母様も自然に固い心が柔らいで来るでせう。

さうなつてから、ゆつくりお母様に申し上げて下さい。法然上人の教は決して出家在家を區別するものでもなく、また決して十九二十の願を許るしでも居ない。むしろ親鸞上人が

十九要門二十眞門十八弘願門として、十九願二十願の往生を一應許るして居られるので、法然上人は直ちに十八願のみを直裁簡明に主張して居られるものであると云ふこと。

そして我國はお國柄としても「家本位」であつて、主人も妻も子も孫も凡て家を中心にして行く可きであるから、單に自分の生家がその信仰だからと云つて、個人的に固執するのでは御先祖へ對しても申譯がないし、且つ其家の宗旨がよいか悪いかをさへもよく見極めもしないで、先入主に依て頭から之を否定し去るのは御先祖を袖にする事になりはしないかと云ふことを。

次に法身報身應身化身のお尋ねですが、之は十一月號念佛讀本の「佛」を御覽下さい。但しお名前として一應の事だけを申

しますと、法身は毘盧舍那佛、報身は阿彌陀佛、應身は釋迦牟尼佛、化身は衆生を濟度する爲に假りに現はれる佛で、御名前は一一定して居りません。

尙ほ老婆心までに申し上げたことは御地の淨土宗の御寺には本會の支部がありますからお近くの御寺を御訪ねして御修養下さい。

「二十五絃」は腎臓病によく効く

島野 禎祥

私の妹が今から七年ばかり前に急性腎臓病にかゝつて、随分病院にもかゝつたけれども、困つてゐた。二十五絃を紹介する人があつて、それを常用するやうになつて、今までは寒くなると、よく悪くなる事があつたけれども、今年からは起らないで健康でゐます。然し飲むことは、やめないうで毎日お茶のかわり、常飲する方面にもよく保健康として、すゝめられると思ふ。

鑽仰運動 ニ ュ ー ス

結成第三年を迎へて

躍進の秘策を練る

東京の各支部既に動く

本會も創立以來滿二ヶ年を経過した、素晴らしい發展の跡を省みると會員は一萬五千を突破し、支部は五百に垂々とし、全國津々浦々に強大な鑽仰網を布いた。「淨土」の發行部數に至つては三萬に達し、驚異的な躍進の成績を見せてゐる。

併し本會は更に創立第三年を迎へて、この強大な鑽仰網を利して、一段の擴大を試みんとしてゐる。既に本部ではこれに備へて會長の人事を始め總ての部面に亘り刷新を企て、組織の完備を圖りつゝある。全國支部の分布圖も作成され、全國遊説のプランも練られてゐる。法然劇上演運動も

着々進捗し、大衆への働きかけも萬遺憾なきを期してゐる。今年になつてからの本部は異常な張り切り方である。第三年こそは本會の將來を決する最も重要な時機だからである。陽春の若草と

壽松支部の例会

東京淺草の壽松支部では一月二十五日の上人の御忌日を選んで午後一時より壽松院にて支部例会を開く。支部員殆んど集合し御忌會念佛を莊嚴に奉修し、次いで左記講演會を開催したが、本年は三上人遠忌を紀念して會員各自念佛精進に邁進すると同時に、

共に本會の擴大運動は華々しく全國にくりひろげられるのだ。

本部のこの緊張に應じて、東京の各支部は別項の如く既に激潮たる活躍を開始した。また青年による會員獲得運動も起されんとしてゐる。生々した力がもり上つて來た。

全國の支部よ、同志よ、本部の緊張と東京同信の活躍と相應じて全國に擴大運動をまき起し、鑽仰の大旗を堂々と掲げよ。飛躍と充實こそ、この第三年に果すべき我々の責務である。いざ躍進しよう、上人の宣揚と人心不安救済の爲に。

會員獲得に努力することを申し合せ午後五時散會した、講題並に講師は左の如し、

新年と修養 主任 木村良祐氏
七福神の意義 原 善久氏
一板起請文に就て 吉田良雄氏

小笠原支部 二月五日午後一時より中野區小淀町の中村道邦氏宅にて支部例会開催し本部より藤井實應氏出講す。

會員の聲

▲「淨土」非常に有難く拜讀致しました。この尊き御教訓を自己一人にて得る事を忍び得ず、我が友に此の氣高き御教訓と喜びを分ちて、共に修養を積み將來を談らざるよう正しき道に進まむと思ひます。この複雑なる世に我等若輩は經驗、修養共に薄き爲め如何にして世に處して進み行くかに迷ふ時、こゝに本誌「淨土」あるは眞に闇夜に提灯を得たる喜びであります。此後共、我々若輩の爲、一層の御指導と御鞭撻を願ひます(東京・加賀瓜盛)

▲毎月「淨土」を愛讀致し、益せらるゝ所多大にして深く感謝してゐます。愚見として電話(佛敎主義の導一より六年に屆ぶる様なもの)の時々御掲載になつては如何がと思ひます(山口縣・性海院)

▲「淨土」(十二月號)の信仰實話「夫と子等を失つた妻の苦悶」或は「念佛信仰の店を見る」記事等は大変好評でした。今日あの大多數の信者を有してゐる天理教、人の道教團等の新聞、雜誌を見る時、全面が信仰實話や天理教、人の道に教はれた記事にて滿載してゐますが、吾等は大いに學ぶ處が多いと思ひます。深遠な教理をむづかしく書き述べるよりも、今後は益々名士や體驗者が淨土宗の念佛に教れた信仰實話を記載して頂きたい(滿洲・山本光俊)

▲責任ある記事を以て世の人が「淨土」をすきになり、從來の誤謬を取捨るやうにして読みたいものです。眞實を云ふと只習風俗俗を以て佛敎に、或は名聞の爲に、廣告的に易々と據つてゐるに過ぎないのが現在の佛敎信者の大方です(鳥取縣・小林知通)

▼會員の聲をどし／＼お送り下さい

“浄土”の大普及化

組費で驛賣を開始

静岡縣下の劃期的試み

静岡縣志太郡一圓の寺院から成り立つてゐる西駿組では「浄土」を更に一般大衆に普及せしむべく考慮中であつたが、このたび遂にその議決して年額十五圓を組の支出としてこれを「浄土」購入費にあて、本部から配給される十五冊を藤枝町岡田孝順、島田町山田豊融、小川の北山忍見等三氏の助力によつて各停車場の賣店に依託し、廣く旅行者の手にまで及ぼさうとすることになった。賣店の賣り上げに對しては組として犠牲的歩合を供する由であるが、残本はこれを取りまゝめて全部工場、會社等の團體に施本として寄附することになったので、これからは上記各驛頭にも「浄土」がお見へして旅ゆく人の心を慰め銀行會社の圖書室、應接室等にまで其のすがたを現はして愛讀さ

れることになった。かくて天然資源に恵まれた静岡は、この「浄土」の教化によつて更に住みいゝ天地となるであらう。尙この發起は岡田組長や安井

精進日を嚴守し

支部擴大をはかる

東京西信寺支部

東京大塚の西信寺支部（主任栗本俊道氏）では左記の様な種々な方法で信行具足に進んでゐるが、過日、支部員多數が本會提唱の精進日の會に入會し、敬虔な信仰生活に送つてゐる。各支部も出来るだけ、上人の御恩徳を偲びまつる紀念日として、毎月二十五日を精進日とせられん事を祈る次第である。尙、當支部の眞剣な活躍ぶりを紹介すると、一、毎月二十日に別時念佛會と

辨義氏等の有志で、今後その計劃を静岡縣の全鐵道沿線にまで擴大しやうと努力して居られる。とにかく斯うした企ては今回が初めてのことであるが、當の安井氏はこれに續いて全国各地にもかうした犠牲的進出の計劃を立て、貫ひたいものだと思氣まいて居られるなど、實にたのもし「浄土」の飛躍振りが期待されてゐる。

支部發表表

(第十七回)

484	大善寺支部	静岡縣島田町 山田豊融氏五名
483	教念寺支部	静岡縣志太郡小川村 北山忍見氏外五名
482	來迎寺支部	藤枝市落合町 堀孝誠氏外十名
481	智多加支部	藤枝市智多加町 藤太智多加氏外四名
480	正法寺支部	今治市鳳早町 米子正信氏外四名
479	吐田麻里寺支部	南郷 奈良縣南郷郡高城村 大澤神我氏外十四名
478	東安寺支部	岐阜縣岐阜郡三渡村野原 藤谷哲道氏外十一名
477	無極寺支部	長野縣東筑摩郡和田村 吉水俊雄氏外五名
476	松鹿寺支部	岩手縣花巻町 小川金英氏外十四名
475	光嚴寺支部	盛岡市北山 岩瀬豊英氏外五名
474	報國寺支部	茨城縣水海道町二六三七 大場義徳氏外四名
473	光德寺支部	京都市中京區裏寺町通須榮 師下ル 三條善雄氏外五名
472	福泉寺支部	滋賀縣野洲郡永木村永原 藤岡隆玄氏外五名
471	正覺寺支部	兵庫縣有馬郡三田町 佐野國運氏外九名
470	大信寺支部	神奈川縣愛甲郡依知村開口 宮本隆實氏外五名
469	新義州支部	朝鮮新義州府常盤町淨土宗 教會所 北出立仙氏外百三十名
468	專稱寺支部	麻布區櫻田町二八 小村常憲氏外七名
467	ハレイワ支部	宮本文哲氏外四十九名
466	慈恩青年會支部	滋賀縣八幡町洞堂院 成瀬宏忍氏外六名
465	專稱寺支部	廣島縣沼津郡山梨村 藤井了哉氏外五名

編輯後記

◇京都知恩院に於ける三上人
遠忌を迎え奉りて、我等の感激はまた深いものがある。正義を求めること甚だしくして、なほみたされざるの感深き今日、遠く七百年の昔に廻りて、三上人の御高德に浴し、魂を洗濯するのも意義あることである。

◇三上人特輯のためには特に力をそゝいだ。殊に總本山の興へられた種々なる御便宜に對しては深く感謝いたします。

◇執筆中、柴田玄鳳氏は前浄土宗教學部長、現佛專教授にして目下知恩院にあつて遠忌事業を統率してゐられる關西の元老。高山龍善氏は知恩院の教務部長の要職にある布教界の重鎮。江上秀靜氏は宗大、早大勉學後、九州の自坊に歸つて鎮西國師研究に餘念

境悦法の覺味



ドーヨ然天性機有

ヨードの素は

天然に多量のヨードを含み有害なノリ分がなく湯水に良く溶けます

用ひ度い方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後の奥様方、顔色の良くない方、風を引き易いお方

サンプル呈

發賣元東京本郷二丁目

大日本水産工業株式會社



卓效藥

ブレインは

血液を清淨にし骨格と神經を強化する強力ヨード有機性劑
効能
動脈硬化、中風、腺病、授乳婦の機カルシウム不足

のない篤學者。岸覺勇氏は大正大學浄土學出身の新進宗乘學者。共に力作を寄稿せられて一段の精彩を加へられた事は、讀者と共に喜びに堪えない所であります。

◇尙、其他の執筆者は既に讀者とお馴染の方々で、今更喋々するに及ばない各方面の大家ばかりであります。

◇本誌も今後は益々新鮮な内容

を揃へて、信仰と趣味と實用とを兼ね備へたものとして行かうと思つてをります。

◇會員諸賢の一層の御助力を希望します。實話、笑話、體驗談趣味談等實のある原稿をお寄せ下さい。掲載の分には薄謝を呈します。

「會員の聲」もどしどしお寄せ下さい。

浄土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三年二月二十日印刷納本
昭和三年三月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼發行人 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京京芝區芝公園明照會館内
振替 東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「浄土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人鑽仰會へ御入會下さい

法然上人鑽仰會とは？

法然上人鑽仰會は現代日本の世相の上に元祖大師法然上人の高邁無比なる御人格を高く顯揚し、凡ての日本人が正しい宗教的覺醒の機會に恵まれんことを念願とするものであります。

従つて元祖大師の御教へに基いて淨土教の正しい教義を最も平易に、最も明かに發揚するための、種々たる教化的活動を行つております。

雑誌『淨土』をお読み下さい

本會では以上の目的の下に、月刊大衆雑誌『淨土』を發行しております。

『淨土』は新しい内容を新しい方針の下に編輯し、傳統に輝く正しい宗教を、現代に一番適した形式で發表しておりますから、誰れでもが、興味をもつて讀むことが出来ます。讀んでゐる中に何時か信仰を持たざるを得なくなるのが、『淨土』の特色であります。

新鮮で易しい信仰的讀物は勿論、一般の小説や興味ある讀物まで満載してありますからどなたにおすゝめになつても好感をもつて迎へられております。

御入會の手續きは簡單です

本會事務所に御入會の旨を申添へて、一圓御納めになれば、その時から會員として、毎月一回『淨土』の配布を受け、その他種々な特典が與へられます。

既に全國に五百近い支部がございますから、御入會の方はその地方の支部へ直接御申込みになれば、支部員として、支部の種々な催しに参加出来ます。

その他詳しいことは往復はがきで御問合せ下さい。

御入會御申込みは本誌添付の振替用紙を御利用願ひます。

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

信 仰 の 聖 本 會 の 著 書

中村 辨康著 四六版一三〇頁
法然上人の信仰生活 三十四錢

中村 辨康著 四六版八〇頁
信 仰 讀 本 二十二錢

藤井 實應著 菊半截一五〇頁

法然上人法語抄 三十四錢

佐藤 春夫著 特ノート版三〇〇頁

法然上人 傳 掬水譚 四圓七十二錢

中村 辨康著 四六版一四〇頁

講 一 枚 起 請 文 十部九錢

中里 介山著 三六版一三〇頁

法然上人傳 六十錢

「淨土特輯號」 菊版一三〇頁
念 佛 讀 本 二〇錢

(定價は凡て送料共であります。)

風中・臟腎

藥良の壓血高



腎臟藥

二十五絃

經驗によつて推賞す

淨土宗 野上運外

私はいつも忙しく暮してゐますので、とかく身體を無理に使ふことがあります。嘗て或る會合の席上で『二十五絃』を服用してみたらと獎められるまゝに、早速これをお茶がはりにつけてみることにしました。すると段々疲勞を感じることも少くなり身體の調子もよくなるのが意識され、殊に排尿の具合が非常によくなつて、心氣一層明朗に愉快な日月を過ごし得るやうになりました。私どもの知人にもこれを服用して腎臟病や高血壓を快癒した方も少くないやうです。南洋で採れる藥草から調劑されたものださうですが、とにかく健康藥としても大變よいように思ひますので、誠意お獎めするに足るものと思ひます。

藥價

十日——二圓八〇錢
卅日——七圓五〇錢

發賣元

南洋生藥研究所

送料 内地 十五錢
海外 四十二錢

電話神田八一〇番
振替東京三三七〇四番

東京市神田區小川町二ノ十

希望者には『淨土』で
お取扱ひ致します

▼説明書無代進呈!

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年二月廿日印刷納本 昭和十二年三月一日發行

淨土第三卷 第三號 定價金十錢(送料五厘)